

福島県文化財調査報告書第396集

一般国道6号

相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ

本笑和田横穴墓群

2002年3月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所

一般国道6号

相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ

本笑和田横穴墓群



口絵1 遺跡の位置

(南から)



口絵2 横穴墓群全景

(南から)

序 文

福島県浜通り地方の北端に位置する相双地域は、重要港湾である相馬港や相馬中核工業団地などの大規模な地域総合開発が進んでいます。この開発に伴い増加する交通の円滑化を図るため、主要幹線道路として相馬市～新地町を区間とする一般国道6号相馬バイパスの建設が進められています。

本バイパスの建設に先立ち、福島県教育委員会では、建設予定地内に所在する遺跡の保護と貴重な文化財を後世に伝えるため、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所と文化財保護の協議を行い、昭和63年度と平成12年度に表面調査、平成3年度と平成11・13年度に分布調査を行い、これに基づいて平成5年度と平成12・13年度に発掘調査を実施しました。

本書は平成13年度に調査を行いました本笑和田横穴墓群の成果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様が文化財に対し、理解を深めていただく一助として、また文化財保護活動や学術研究の資料として、さらには生涯学習における基礎的な素材として、広く御活用いただければ幸いに存じます。

最後にこの遺跡の調査に御協力いただいた国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所、相馬市教育委員会および地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成14年3月

福島県教育委員会
教育長 高城俊春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の記録保存をするため、発掘調査を実施してまいりました。相双地域では、一般国道6号の混雑解消と沿道の交通安全を確保するために新地町～相馬市を通る新たな一般国道6号相馬バイパスの建設が進められており、本路線にかかる埋蔵文化財については、これまで平成5年度に3遺跡、平成12～13年度に4遺跡の合計7遺跡の調査を実施いたしました。

本報告書は、平成13年度に実施した発掘調査のうち、相馬市の本笑和田横穴墓群の調査成果をまとめたものです。

工区内において11基発見された横穴墓群は、概ね7世紀代を中心として造営されたと考えられます。崖面の流出により横穴墓の本来の入口は失われ開口していましたが、遺体を葬る部屋である玄室には、家型を始め平型やアーチ型など様々な形態のものが含まれていることがわかってまいりました。

また、今回の調査では、新たな試みとしてレーザー光線による三次元計測法を取り入れ横穴墓の微細な記録をとり、その成果も報告書中に掲載いたしました。

今後、これらの調査成果が地域史研究の基礎資料として関係各位に広く活用され、さらには地域の皆様にとって郷土を理解する上で必要不可欠な資料となれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました関係諸機関並びに地元の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成14年3月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄佐久

緒 言

1. 本書は、一般国道6号相馬バイパスにかかわる遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成13年度に実施した一般国道6号相馬バイパス関連遺跡調査のうち、相馬市大字本笑字馬場添・西和田に所在する本笑和田横穴墓群の調査成果を収録した。
3. この調査の費用は、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所が負担した。
4. 福島県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所と保存協議を行い、開発計画に沿って調査計画を策定した。
5. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託した。
6. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配し調査にあたった。

文化財主事 稲村圭一

なお、臨時的に文化財主査 安田 稔 文化財主査 大竹正浩

文化財主事 大河原 勉が調査に参加した。

7. 本文原稿は、大竹・安田・稲村が分担して執筆した。
8. 本書に掲載した地形図は、国土交通省国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製使用した。「(承認番号) 平13東複 第507号」
9. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の機関と研究者から御協力と御指導をいただいた。

相馬市教育委員会・橋本博幸

10. 本書に収録した発掘調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会で保管している。

用 例

1. 本書の遺構図の用例は、次のとおりである。

- (1) 方 位 平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。
それ以外のは挿図中に真北方向を表示した。
- (2) 縮 尺 率 原則として横穴墓実測図は 1/60, 横穴墓レーザー計測図は 1/70で
採録し, 挿図のスケール右脇に縮尺率を表示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は --- のケバで表示したが, 相対的に緩傾斜の部分
には --- のケバを使用した。なお, --- は後世の人為的な削土部の
傾斜を示す。
- (4) ピ ッ ト P 1・P 2…と表記した。
- (5) 土 層 遺構外堆積土はローマ数字で, 遺構内堆積土は算用数字で示した。
- (6) 水系レベル 海拔高度を示す。

2. 本書の遺物実測図の用例は、次のとおりである。

- (1) 縮 尺 率 各遺物の大きさに応じて縮尺率を設定した。土師器・須恵器は原則
として 1/3, 釘・銭貨 1/2, ガラス製小玉 1/1 で採録した。縮
尺率は挿図のスケール右脇に表示した。
- (2) 遺 物 断 面 土師器・ガラス玉の断面は白抜き, 須恵器についてはベタ黒で表示
した。また, 粘土の積み上げ痕は一点鎖線で表示した。
- (3) 遺 物 番 号 遺構内出土遺物は, 図版の番号と遺物の通し番号を組み合わせた。
- (4) 遺 物 寸 法 原則として挿図中に記載した。遺存値は $\langle \quad \rangle$, 推定値は (\quad) で
表記した。

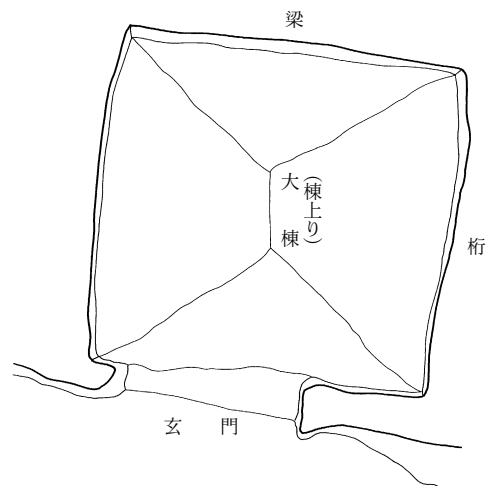
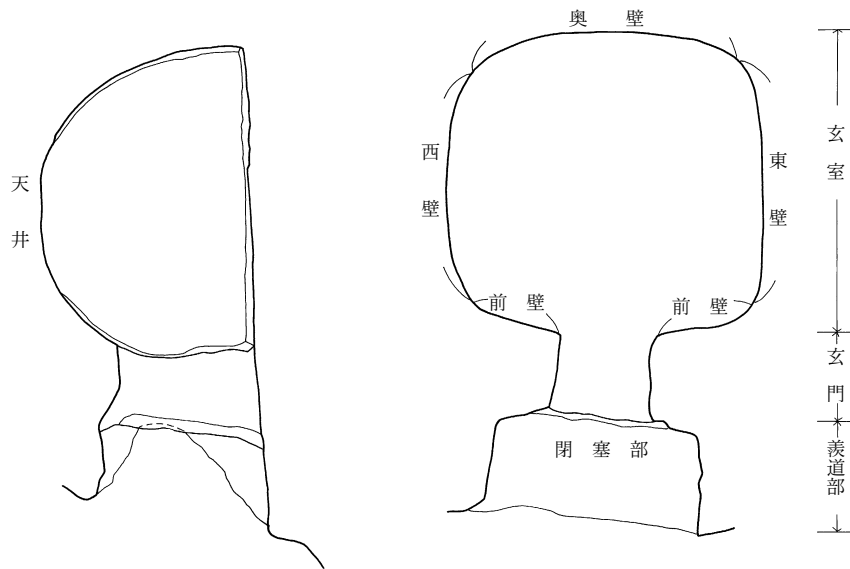
3. 本文中及び遺物整理に使用した略号は次のとおりである。

相馬市……………SM	本笑和田横穴墓群……………MWW	グリッド……………G
トレンチ……………T	遺構外堆積土……………L	遺構内堆積土…ℓ

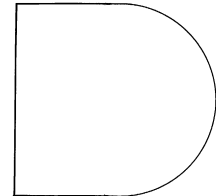
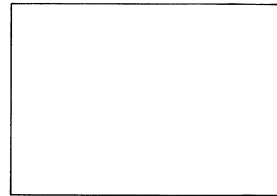
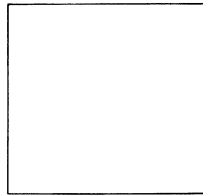
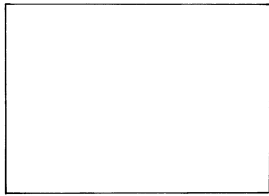
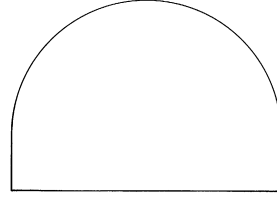
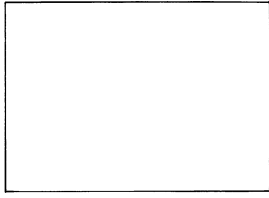
4. 引用・参考文献については、執筆者の敬称を省略し巻末にまとめて収めた。

5. 横穴墓各部の名称及び横穴墓の形態は、次の図に示したとおりである。

横穴墓各部の名称

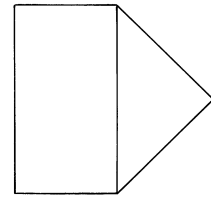
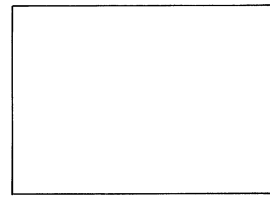
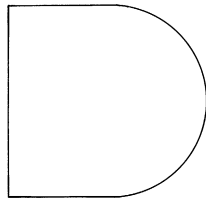
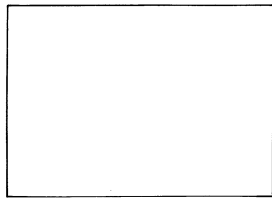
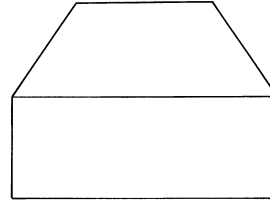
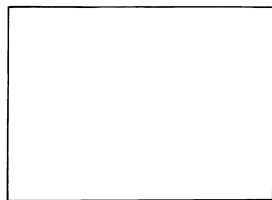


横穴墓の形態



平 型

ドーム型



アーチ型

寄棟型

目 次

序 章	1	
第1節 開発事業の概要	1	
第2節 平成13年度までの調査経過	1	
第3節 平成13年度の調査経過	2	
第4節 自然環境	3	
第5節 歴史的環境	5	
第1章 調査経過	9	
第1節 遺跡の位置と地形	9	
第2節 調査経過	10	
第3節 調査方法	11	
第4節 基本土層	13	
第2章 遺構と遺物	15	
第1節 横穴墓	15	
1号横穴墓 (16)	2号横穴墓 (19)	3号横穴墓 (22)
4号横穴墓 (25)	5号横穴墓 (29)	6号横穴墓 (33)
7号横穴墓 (34)	8号横穴墓 (37)	9号横穴墓 (39)
10号横穴墓 (41)	11号横穴墓 (44)	
第2節 その他の遺構と遺物	47	
第3章 ま と め	48	

序章 挿図目次

図1	一般国道6号相馬バイパス路線図	1
図2	遺跡周辺の地質図	4
図3	周辺の遺跡	6

挿図目次

図1	遺跡位置図	9	図19	6号横穴墓(2)	33
図2	グリッド配置図	12	図20	6号横穴墓レーザー計測図	34
図3	基本層位図	13	図21	7号横穴墓	35
図4	遺構配置図	14	図22	7号横穴墓レーザー計測図	36
図5	レーザー計測図	15	図23	8号横穴墓	37
図6	1号横穴墓(1)	16	図24	8号横穴墓レーザー計測図	38
図7	1号横穴墓(2)・1号横穴墓出土遺物	17	図25	9号横穴墓	40
図8	1号横穴墓レーザー計測図	18	図26	9号横穴墓レーザー計測図	41
図9	2号横穴墓(1)	20	図27	10号横穴墓(1)	42
図10	2号横穴墓(2)	21	図28	10号横穴墓(2)	43
図11	2号横穴墓レーザー計測図	22	図29	10号横穴墓レーザー計測図	44
図12	3号横穴墓	23	図30	11号横穴墓	45
図13	3号横穴墓レーザー計測図	24	図31	11号横穴墓レーザー計測図	46
図14	4号横穴墓・4号横穴墓出土遺物	26	図32	試掘調査出土遺物	47
図15	4号横穴墓レーザー計測図	27	図33	近隣の横穴墓	48
図16	5号横穴墓	29	図34	柴迫古墳群・本笑和田横穴墓群	
図17	5号横穴墓レーザー計測図	30		弘法山古墳群遺構配置図	50
図18	6号横穴墓(1)	32	図35	周辺の古墳分布図	51

表目次

表1	一般国道6号相馬バイパス建設予定地遺跡・遺跡推定地一覧	2
表2	周辺の遺跡一覧	7

写真図版目次

1	遺跡全景(南から)	55	15	7号横穴墓全景(南から)	62
2	横穴墓集中部全景(南から)	55	16	7号横穴墓細部	62
3	1号横穴墓全景(南から)	56	17	8号横穴墓全景(南から)	63
4	1号横穴墓細部	56	18	8号横穴墓細部	63
5	2号横穴墓全景(南から)	57	19	10号横穴墓全景(南から)	64
6	2号横穴墓細部	57	20	10号横穴墓細部	64
7	3号横穴墓全景(南から)	58	21	11号横穴墓全景(南から)	65
8	3号横穴墓細部	58	22	11号横穴墓細部	65
9	4号横穴墓全景(南から)	59	23	横穴墓群周辺全景(南西から)	66
10	4号横穴墓細部	59	24	横穴墓群周辺	66
11	5号横穴墓全景(南から)	60	25	調査風景	67
12	5号横穴墓細部	60	26	横穴墓出土遺物	67
13	6号横穴墓全景(南から)	61	27	試掘調査出土遺物	68
14	9号横穴墓全景(南から)	61			

序 章

第1節 開発事業の概要

一般国道6号相馬バイパスは、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所が事業主体となり、福島県相馬市程田～相馬郡新地町駒ヶ嶺の区間に建設される延長9.9kmのバイパスである。福島県浜通り地方北半の相双地域は全国でも有数の電源開発を軸とし、相馬港・相馬中核工業団地等大規模な地域総合開発計画に基づく作業が現在も行われている。

本事業は、相馬市街の一般国道6号の増加する交通混雑の解消、沿線環境等の改善、輸送の迅速化、市街地からの大型車の迂回を図り、相馬地域開発関連交通を円滑に処理するために、昭和62年度から着手されている。

第2節 平成13年度までの調査経過

福島県教育委員会は、路線内に存在する埋蔵文化財の保護を図るため、昭和63年に財団法人福島県文化センター(現財団法人福島県文化振興事業団)に委託し、関係市町村の協力を得て、相馬市程田～相馬郡新地町駒ヶ嶺区間の表面調査を実施し、22遺跡を確認した。相馬市大字新沼地内には鷲塚B・C、大森の3遺跡が路線内に所在することが確認された。路線内に所在する遺跡の取り扱いについては、福島県教育委員会と建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)磐城国道工事事務所の間で保存協議を行い、保存が困難な遺跡については記録保存のための発掘調査を実施することとし、これを踏まえて平成3年度に、鷲塚B・C遺跡、大森遺跡の試掘確認調査を実施し、平成5年度には発掘調査を実施した。

平成11年度には和田・南飯淵地内に所在する6遺跡を対象に試掘確認調査を実施した。この中で北迫A遺跡は平安時代の製鉄関連遺跡、柴迫A遺跡が縄文時代から平安時代までの集落遺跡、柴迫古墳群が縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡と塚の存在が明らかにされた。

平成12年には5月に建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)磐城国道工事事務所・福島県教育庁文化課・財団法人福島県文化センター(現財団法人福島県文化振興事業団)で今後の工事工程や埋蔵文化財の調査予定について確認を行い、8月から北迫A・

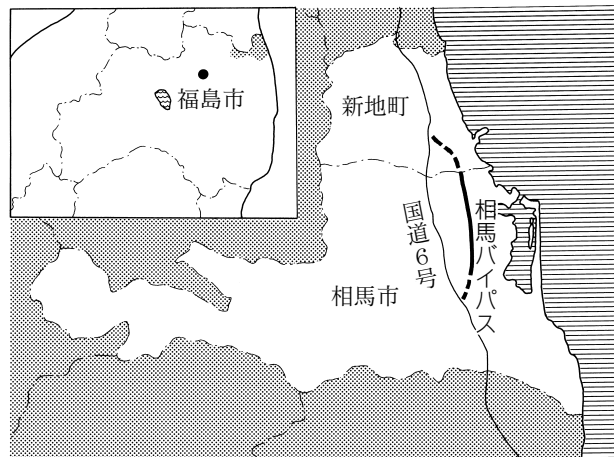


図1 一般国道6号相馬バイパス路線図

表1 一般国道6号相馬バイパス建設予定地遺跡・遺跡推定地一覧

新地町

(面積：㎡)

No.	遺跡名	所在地	工区内面積	試掘調査		保存面積	本発掘調査年度	報告書名
				調査年度	対象面積			
1	洞山A遺跡	駒ヶ嶺字洞山	2,700	平13年度	800	未定		『福島県内遺跡分布調査報告8』
2	新林塚	駒ヶ嶺字新林	未定	未試掘		未定		
3	山中遺跡	駒ヶ嶺字山中	500	未試掘		未定		『相馬開発関連遺跡調査報告II』
4	山中B遺跡	駒ヶ嶺字山中	14,800	平13年度	8,100	3,350以上		『福島県内遺跡分布調査報告8』
5	ST-B1	駒ヶ嶺字山中	1,000	未試掘		未定		
6	ST-B2	駒ヶ嶺字洞山	5,000	平13年度	1,300	未定		『福島県内遺跡分布調査報告8』

相馬市

No.	遺跡名	所在地	工区内面積	試掘調査		保存面積	本発掘調査年度	報告書名
				調査年度	対象面積			
7	鷲塚B遺跡	新沼字鷲塚	2,100	平3年度	2,100	1,960	平5年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告I』
8	鷲塚C遺跡	新沼字鷲塚	300	平3年度	300	300	平5年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告I』
9	大森遺跡	新沼字大森	3,400	平3年度	3,400	3,100	平5年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告I』
10	北迫A遺跡	和田字北迫	1,900	平11年度	1,900	800	平12年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告II』
11	北迫B遺跡	和田字北迫	2,300	平11年度	2,300	0		『福島県内遺跡分布調査報告6』
12	柴迫A遺跡	和田字柴迫	4,600	平11年度	4,600	2,500	平12年度	平14年度刊行予定
13	柴迫古墳群	和田字柴迫	2,200	平11年度	2,200	2,200	平12・13年度	平14年度刊行予定
14	本笑和田横穴墓群	本笑字馬場添ほか	4,900	平11・13年度	4,900	750	平13年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告III』
15	壇腰遺跡	南飯淵字壇腰	1,900	平11年度	1,950	0		『福島県内遺跡分布調査報告6』
16	大毛内遺跡	大曲字大毛内	9,700	未試掘		未定		
17	SM-B1	馬場野字中谷地	3,100	未試掘		未定		

柴迫A遺跡・柴迫古墳群の発掘調査を実施した。現地での発掘調査は12月中旬に終了している。

第3節 平成13年度の調査経過

平成13年度は、昨年度に引き続き柴迫古墳群・本笑和田横穴墓群の発掘調査を実施した。昨年度調査した柴迫A遺跡と柴迫古墳群は一連の遺跡であり、昨年確認されていた弥生時代の集落が今年度調査区まで広がっていることが確認された。

本笑和田横穴墓群は今年度からの調査であるが、前年度中に立木伐採や調査用道路の取り付けを終了していたことから調査は順調に開始された。横穴墓は全部で11基確認されたが、大部分が後世の破壊や時間の経過による岩盤の崩落や剥落しているものが多く、横穴墓内部の状態も良好なものは少なかった。したがって調査における成果として遺構図面が重要になると考え、レーザー計測による点群データを基に立体図示が可能になる測量を実施した。なお、この方法は遺構に非接触で行えることから、亀裂の入った横穴墓内での作業が回避できるとともに、作業期間の短縮にも有効であった。

発掘調査の開始は4月16日であったが、横穴墓群については崖面調査のための足場建設が必要であったことから、開始は足場建設終了後の5月8日となった。本遺跡の現地調査終了日は7月19日である。

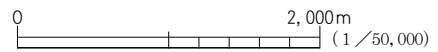
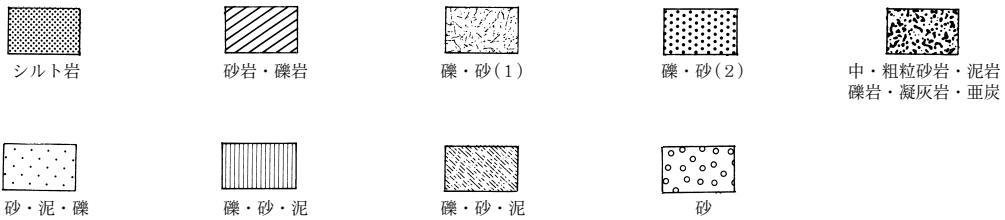
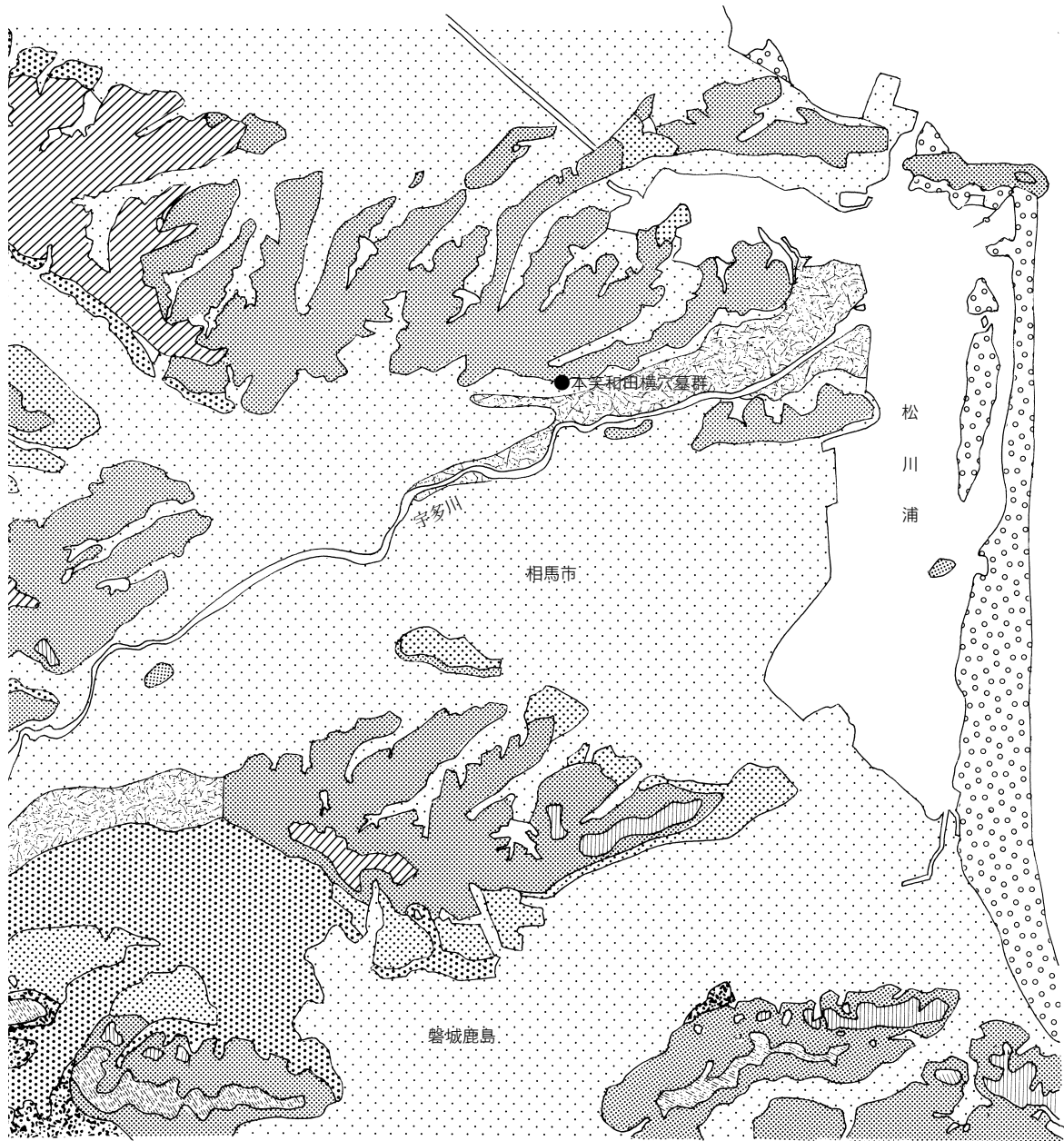
7月17日には、現地において福島県教育庁文化課・財団法人福島県文化振興事業団から調査経過・成果の説明後、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所に対し、柴迫古墳群・本笑和田横穴墓群の引渡しを行った。

第4節 自然環境

福島県は、北海道・岩手県につぎ全国で三番目の県土を有する。県土の自然地形からの地区割りでは、南北に走る奥羽山脈と阿武隈高地を境として、西から会津地方・中通り地方・浜通り地方の3地区に区分されている。一般国道6号相馬バイパスが建設される相馬市及び相馬郡新地町は、福島県浜通り地方の最北端に位置し、北は宮城県との県境に接している。相馬市の面積は197.61km²・人口は39,590人(平成13年3月1日現在)、新地町の面積は46.35km²・人口は9,013(平成14年4月1日現在)人を数える。

本地域の地形を概観すると、双葉断層を境に阿武隈高地東縁部に位置する標高500m前後の高原状山地とその東方の浜通り低地帯とに分かれる。阿武隈高地東縁部に位置する標高500m前後の高原状山地は、霊山(標高825m)・古霊山(標高783m)・手倉山(標高672m)・天明山(標高488m)などの山々が発達している。次に、浜通り低地帯はさらに丘陵地と沖積低地とに分かれ、丘陵地は浜通り丘陵帯と呼称されている。この浜通り丘陵帯は東西約10km、南北約100kmの規模を持ち、相馬市及び新地町はその北部を占めている。この丘陵地帯は本来1つのものであったが、太平洋を目指して東流する宇田川・小泉川・地蔵川・日下石川などの中小の河川によって開析され、ちょうど東西に長い丘陵が南北に並列したような状況が観察され、丘陵間には沖積低地が発達している。相馬市や新地町周辺には北から初野丘陵・尾浜丘陵・馬場野丘陵・磯部丘陵の4丘陵と新沼低地・宇田川低地の2低地がそれぞれ呼称されている。

相馬市及び新地町の表層地質は図2のように、阿武隈高地域では中新世以前の団結堆積物・火山性堆積物・深成岩・変成岩、丘陵地域では新第三紀鮮新世の半固結堆積物、低地域では海岸平野堆積物・段丘堆積物・砂州堆積物などの第四紀の未固結堆積物が広く発達している。丘陵地域に発達する半固結堆積物は竜ノ口層と呼ばれ、本笑和田横穴墓群が所在する尾浜丘陵東端部では凝灰岩が発達している。この凝灰岩は、片岩としての堅さ及び岩体としての堅さがそれぞれやや柔らかい部類に入り、砂岩などの薄い層を挟んで、厚さは80~140mを測る。この周辺ではこの凝灰岩を基盤に礫・砂からなる第四紀更新世の低位上位段丘堆積物が部分的に観察される。丘陵の土地利用は、宅地と畑である。この丘陵を取り巻く新沼低地や宇田川低地は松川浦統と呼ばれる黒沼土壌で、アシ・ヨシなどの植物遺体が分解されて腐植含量が高いことから水田に土地利用されている。



この図は『土地分類基本調査』「相馬・中村」
表層地質図(1/50,000)を加筆・修正した

図2 遺跡周辺の地質図

相馬市及び新地町の気候は夏は涼しく冬は暖かく、この地方が太平洋岸気候区に属している。また、冬季には北西の季節風が卓越し乾燥した晴天の日が続くことから、四季を通じて晴天の日が多い。このため、しばしば水不足に見まわれ、数多くの灌漑用のため池が構築されている。しかし、梅雨期において北東風(やませ)が卓越すると、日照不足・低温の日が続き、冬季には本州南岸を東進する低気圧に北東気流が吹き込むことによって降雪の日も何日か観察される。

第5節 歴史的環境

相馬市や新地町は、『相馬市史』や『新地町史』の編纂及び『福島県遺跡地図』作成のための表面調査により遺跡台帳が整備され、遺跡の分布状況がある程度把握されている。この地域には、相馬地域開発・県営かんがい排水事業相馬第二地区・相馬工業用水道・一般国道6号相馬バイパス・一般国道113号バイパスなどの開発や建設に伴う遺跡分布調査が行われ、発見された遺跡の数は増加の一途を辿っている。『福島県遺跡地図』では相馬市で184カ所、新地町で149カ所の遺跡が登録されている。次に当地域の歴史的な環境について、遺跡分布や調査報告から概要を述べる。

現在まで相馬市と新地町で確認されている遺跡には、旧石器時代から近世・近代にかけての散布地・集落跡・貝塚・水田跡・製鉄跡・古墳・窯跡・城館跡・製塩跡など多種多様なものがあり、その中には遺跡の全面的な調査が行われた場合も多く、日本史の中では特筆される生産遺跡もある。

旧石器時代の遺跡には、北原遺跡と三貫地遺跡がある。北原遺跡からはナイフ形石器1点が出土しているが、三貫地遺跡では直径約10mの石器製作跡と考えられるユニットからツール・コア・フレイク・チップが10,000点以上出土し、福島県の後期旧石器時代を代表する遺跡の一つとなっている。

縄文時代になると遺跡の数は増加し、阿武隈高地から延びる丘陵や段丘面にも多く発見されている。相馬地域開発の一環として本発掘調査を実施した相馬市段ノ原B・山田B・猪倉B遺跡では前期前半の竪穴住居跡が各々100～200軒検出され、当該期の集落研究に新資料を提供した。中期後半には相馬市馬見塚遺跡や新地町山海道遺跡などで複式炉を有する集落跡が形成されている。後期には国指定史跡で後期後葉の新地式土器の標識遺跡である新地町新地貝塚、県指定史跡で多数の人骨が検出された新地町三貫地遺跡が代表的な遺跡である。この他に、低地遺跡である相馬市大森A遺跡や同市双子遺跡から、同時代としては珍しい木製品が出土している。大森A遺跡からは後期前葉の櫛状木製品と晩期の丸木弓、双子遺跡からは丸木舟が出土している。

弥生時代になると、際だった集落は形成されていないが、前期の成田藤堂塚遺跡で再葬墓が検出され、中期後半の桜井式期には新地町武井地区において小規模な集落が形成されている。この時期には小規模な集落が点々と形成されていたと推定されるが、調査例が少ないため不明な点が多い。

古墳時代は、高塚式古墳の造営が盛んになり、水田耕作などの生産活動も本格化してくる。山中遺跡では塩釜式期の土師器が多く出土し、大森A遺跡では水田耕作の痕跡や木製の農具や足跡など

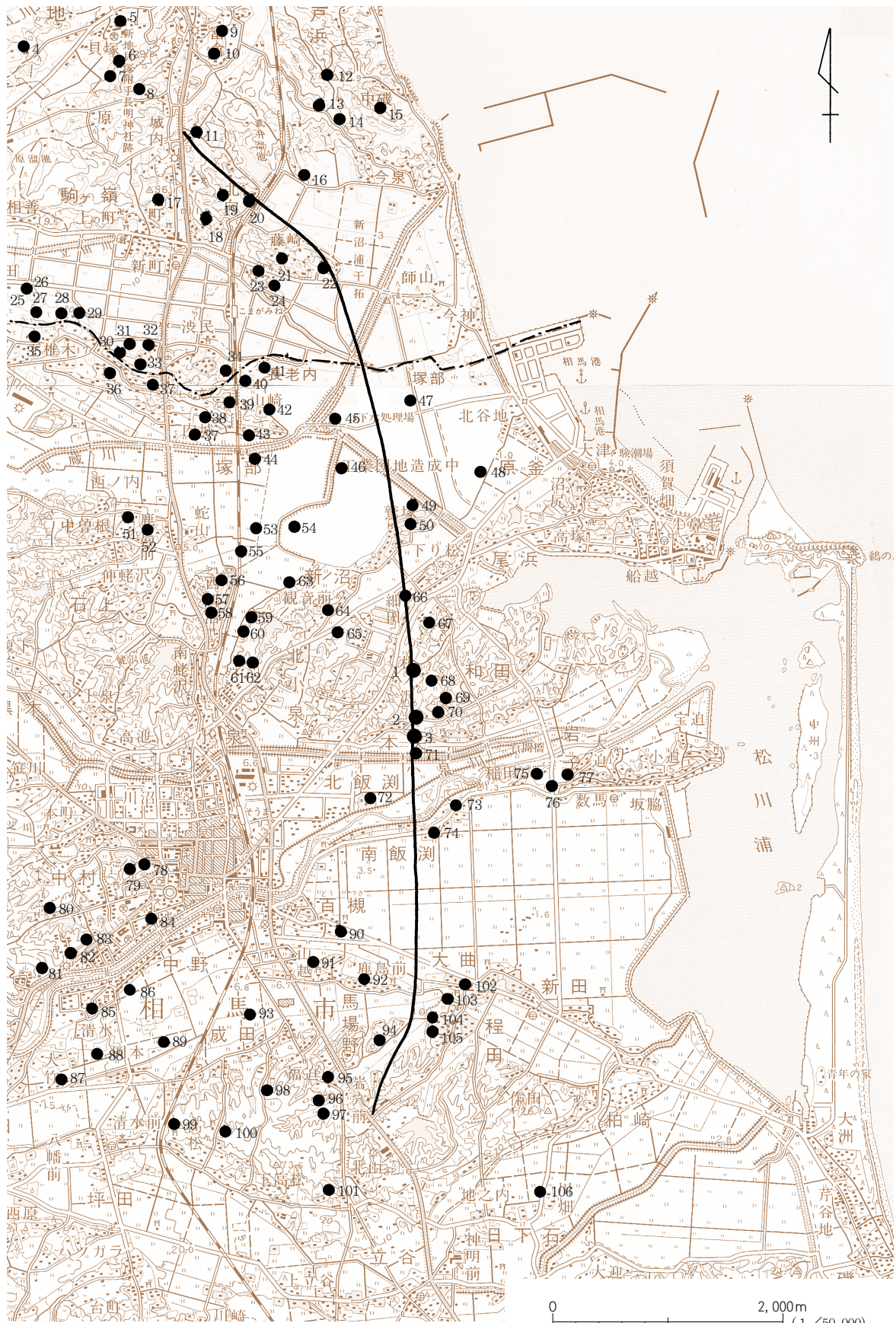


図3 周辺の遺跡

表3 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	番号	遺跡名	所在地	種別	時期
4	雁小屋遺跡	新地町杉目字雁小屋	散布地	縄文	54	古川尻A遺跡	相馬市塚部字古川尻	散布地	古墳
5	貝塚西遺跡	小川字貝塚西	散布地	縄・奈・平	55	南両仙A遺跡	石上字南両仙	散布地	奈良・平安
6	貝塚遺跡	小川字貝塚	散布地	古墳	56	作田遺跡	石上字作田	散布地	古墳～平安
7	武井D遺跡	今泉字武井・駒ヶ嶺字向田	散布地	弥生	57	南白髭A遺跡	石上字南白髭	製鉄跡	奈良・平安
8	原製鉄遺跡	駒ヶ嶺字原	製鉄跡		58	南白髭B遺跡	石上字南白髭	散布地	奈良・平安
9	ソリ畑遺跡	駒ヶ嶺字ソリ畑	散布地	弥生	59	鹿島前B遺跡	新沼字鹿島前	散布地	古墳～平安
10	富穴前遺跡	駒ヶ嶺字富穴前	古墳	古墳	60	坪ヶ廻A遺跡	新沼字坪ヶ廻	製鉄跡	
11	洞山A遺跡	駒ヶ嶺字洞山	散布地	奈良・平安	61	坪ヶ廻B遺跡	新沼字坪ヶ廻	散布地	
12	茂庭A遺跡	大戸浜字茂庭	散布地	古墳～平安	62	坪ヶ廻塚	新沼字坪ヶ廻	塚	中世・近世
13	茂庭B遺跡	大戸浜字茂庭	散布地	奈良・平安	63	鹿島前A遺跡	新沼字鹿島前	散布地	古墳～平安
14	茂庭C遺跡	大戸浜字茂庭	散布地	縄文	64	観音前B遺跡	新沼字観音前	散布地	古墳～近世
15	吾安谷地遺跡	大戸浜字吾安谷地	散布地	奈良・平安	65	観音前C遺跡	新沼字観音前	散布地	古墳～平安
16	鞘前遺跡	今泉字西田	その他	奈良～近世	66	細田A横穴群	尾浜細田	その他	
17	駒ヶ嶺城跡	駒ヶ嶺字館	城館跡	中世・近世	67	細田B横穴群	尾浜細田	その他	
18	金子坂遺跡	駒ヶ嶺字金子坂	製鉄跡	奈良・平安	68	北廻B遺跡	和田字北廻	散布地	
19	新林塚	駒ヶ嶺字新林	塚	中世・近世	69	柴廻C遺跡	和田字柴廻	散布地	
20	北向屋敷遺跡	駒ヶ嶺字北向	散布地	縄・古～平	70	柴廻B遺跡	和田字柴廻	散布地	
21	山中B遺跡	駒ヶ嶺字山中	散布地	縄・古～平	71	本笑和田横穴墓群	本笑字馬場添・西和田	古墳	古墳
22	山中塚	駒ヶ嶺字山中	塚	中世・近世	72	飯淵古館跡	北飯淵字川原崎	城館跡	中世
23	藤崎館跡	駒ヶ嶺字藤見	城館跡	中世	73	松下遺跡	南飯淵字松下・曲淵	散布地	奈・平・近
24	藤崎横穴墓	駒ヶ嶺字藤見	古墳	古墳	74	檀腰遺跡	南飯淵字檀腰	散布地	奈良・平安
25	朴木原遺跡	福田字朴木原	散布地	縄文	75	一本松古墳群	岩子字一本松	古墳	古墳
26	三貫地貝塚	駒ヶ嶺字田丁場	貝塚	縄文	76	山野貝塚	岩子字山野・一本松	貝塚	古墳～平安
27	三貫地遺跡	駒ヶ嶺字三貫地西	散布地	縄・古～平	77	山野遺跡	岩子字山野	散布地	古墳
28	高田遺跡	駒ヶ嶺字白薄	散布地	縄・古～平	78	相馬中村城跡	中村字北町	城館跡	中世・近世
29	境付遺跡	駒ヶ嶺字境付	散布地	縄・古～平	79	北畑A遺跡	玉野字副霊山	散布地	縄文
30	境B遺跡	駒ヶ嶺字境	散布地	縄・奈・平	80	圓應寺供養塔	中村字川原町	石造物	中世
31	十二所B遺跡	駒ヶ嶺字十二所	散布地	奈良・平安	81	西山横穴墓群B	西山字西山	古墳	古墳
32	十二所A遺跡	駒ヶ嶺字十二所	その他		82	西山横穴墓群A	西山字西山	古墳	古墳
33	境A遺跡	駒ヶ嶺字境	散布地	奈良・平安	83	西山横穴墓群C	西山字西山	古墳	古墳
34	中丸東遺跡	駒ヶ嶺字中丸東	散布地	奈良・平安	84	和田古館跡	和田字館前	城館跡	中世
1	北廻A遺跡	相馬市和田字北廻	散布地		85	熊野堂館跡	中野字堂ノ前	城館跡	中世
2	柴廻A遺跡	和田字柴廻	散布地	古墳～平安	86	黒木田遺跡	中野字明神前	散布地	古墳～平安
3	柴廻古墳群	和田字柴廻・西和田	古墳	古墳	87	今田古墳群	今田字地蔵前	古墳	古墳
35	北原遺跡	椎木字北原	散布地	縄・奈・平	88	館腰館跡	成田字館腰	城館跡	中世
36	聖遺跡	塚部字聖	散布地	奈良・平安	89	丸塚古墳	成田字船橋	古墳	古墳
37	前田遺跡	塚部字前田	散布地	奈良・平安	90	篠竹遺跡	百槻字篠竹・赤屋敷	散布地	奈良・平安
38	貴布根前遺跡	塚部字貴布根前	散布地	奈良・平安	91	馬場野横穴墓群	馬場野字岩崎	古墳	古・中・近
39	大森D遺跡	長老内字大森	散布地	奈良・平安	92	寺内遺跡	馬場野字寺内	散布地	奈良・平安
40	大森B遺跡	長老内字大森	散布地	奈良・平安	93	藤堂塚遺跡	成田字藤堂塚	散布地	縄文～平安
41	大森A遺跡	長老内字大森	散・他	縄・奈・平	94	馬場野館跡	馬場野字中谷地	城館跡	中世
42	堤下遺跡	長老内字堤下	散布地	奈良・平安	95	福迫横穴墓群	馬場野字福迫	古墳	古墳
43	山崎遺跡	塚部字山崎	散布地	奈良・平安	96	山田古墳群	馬場野字山田	古墳	古墳
44	五反田遺跡	塚部字五反田	散布地	古墳～平安	97	山田横穴墓群	馬場野字山田	古墳	古墳
45	清水前遺跡	塚部字清水前	散布地	奈・平・近	98	上薬師堂横穴墓群	馬場野字上薬師堂	古墳	古墳
46	古川尻B遺跡	塚部字古川尻	散布地	奈・平・近	99	高松横穴墓群	坪田字高松	古墳	古墳
47	古川尻C遺跡	塚部字古川尻	散布地	縄文	100	高松古墳群	坪田字高松	古墳	古墳
48	鷲塚遺跡	新沼字広須賀	その他	近世・近代	101	北山窯跡	立谷字北山	窯跡	奈良・平安
49	明神前B遺跡	新沼字明神前	その他	近世	102	大曲館跡	大曲字天神前	城館跡	中世
50	鷲塚B遺跡	新沼字鷲塚	製鉄・散	奈良・平安	103	御宿古館跡	馬場野字中谷地	城館跡	中世
51	石上館跡	石神字御屋敷	城館跡	中世	104	朝日前貝塚	程田字朝日前	貝塚	縄文
52	藤橋紀伊館跡	石神字城ノ内	城館跡	中世	105	朝日前古墳	程田字朝日前	古墳	古墳
53	南両仙B遺跡	石神字南両仙	散布地	中世・近世	106	東北田遺跡	日下石字東北田	散布地	奈良・平安

が発見されている。水田の痕跡から当時の水田の規模や水路を中心にした水管理、足跡から当時の人々の身長などが明らかにされた。同時に田下駄や馬鋤などの木製品が出土している。

古墳の中で特筆されるのは、相馬市丸塚古墳と高松1号墳・舟橋古墳、福迫横穴群や高松横穴群がある。丸塚古墳からは人物・飾馬・円筒埴輪が多数出土し、高松1号墳からは人物・円筒埴輪の他金銅製承盤付鏡、金銅製雲珠が出土している。その類似性から関東地方との関係が指摘される。福迫横穴群からは金銅製環頭太刀柄頭、高松横穴群からは線刻画が検出された。この他に横穴式古墳も数多く発見されているが、墓域の割合に対して集落遺跡の発見例は少なく、同時代の集落の様相については不明な点が多い。

飛鳥～奈良時代になると、宇多郡家に比定される黒木田遺跡がある。部分的な調査のため、遺跡の性格について不明な点もある。隣接する相馬市善光寺窯跡では黒木田遺跡の瓦を焼成している。この善光寺窯跡の他に、山崎窯跡などでも須恵器生産が開始されている。

奈良・平安時代になると、新地町武井地区の鉄生産は活況を呈し、製錬から精練・鍛冶・鍛造・鑄造まで行う一大コンビナートの様相を呈している。鉄生産は武井地区にとどまらず大森遺跡や北迫A遺跡など周辺地区にも波及し、相馬市西方の大坪地区の山田A遺跡、猪倉B遺跡でも精練から鍛造まで行っていたことが判明している。飛鳥～奈良時代から宇多郡の郡家と考えられる黒木田遺跡は、この鉄生産と深い関わりが指摘されている。また、三貫地遺跡などでは集落が形成されている。その後、10～11世紀にかけては当地域の調査例も少なく不明な点が多い。

中世から近世にかけて活躍した相馬氏は元亨3(1323)年頃、下総国から入部したと伝えられている。残念ながら資料も少なく、相馬市・新地町周辺の鎌倉時代については不明な点が多い。南北朝時代から戦国時代になると戦乱と共に、相馬氏の活躍を裏付ける多くの資料がある。同時に多くの城館が構築されている。南北朝時代には南朝方によって霊山城の搦手として熊野堂城跡や黒木城跡、戦国時代には相馬氏が築城した駒ヶ嶺城跡などがあり、駒ヶ嶺城跡は1589(天正17)年の伊達政宗の侵攻により落城し、藩政期には相馬藩に対する藩境警備の役目を果たしていた。

豊臣秀吉による奥州仕置き以後、相馬氏は宇田・行方・標葉の三郡を安堵され、慶長16(1611)年には小高城から相馬中村城に拠点を移した。その後、相馬氏が居城した環郭式平山城の中村城を中心に城下町が形成された。

また、近世の代表的な生産遺跡として、製塩関連施設がある。本地域では、相馬藩や伊達藩の藩営の産業として製塩が盛んに行われた。本来製塩に適していると考えられている遠浅海岸や干満差の大きな海岸を有していないが、波の穏やかな内海的性格を持つ新沼浦に恵まれ、入浜式製塩技法を用いて、明治時代まで製塩産業が営まれてきた。相馬地域開発に関連して実施した、近世～近代に営まれた製塩関連施設の発掘調査成果が、塩業研究に果たした功績は多大である。

第1章 調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

本笑和田横穴墓群は、福島県相馬市大字本笑字馬場添・西和田地内に所在する。JR常磐線相馬駅からは、北東約1.6kmに位置する。平成12年度に調査した北迫A遺跡からは、南に約400m離れる。なお、平成12・13年度調査した柴迫A遺跡・柴迫古墳群は、本遺跡が位置する崖面の丘陵上に立地する。

本遺跡は、南東に延びる丘陵の南向きの崖面に位置しており、現況での遺跡の標高は、崖面の高いところで16m、崖面下の平坦面で4.5mであり、標高差は11.5mとなる。横穴墓群はこの崖面の標高12mから下に構築されている。なお、表面調査で調査区外の崖面にも横穴墓が確認されている。

調査前の現況は、横穴墓群が存在する崖面には草木が繁っており、崖面下の平坦地は畑や荒地となっていた。横穴墓群が位置する崖面下側は、後世の開削により物置・馬小屋等が崖面を掘り込ん

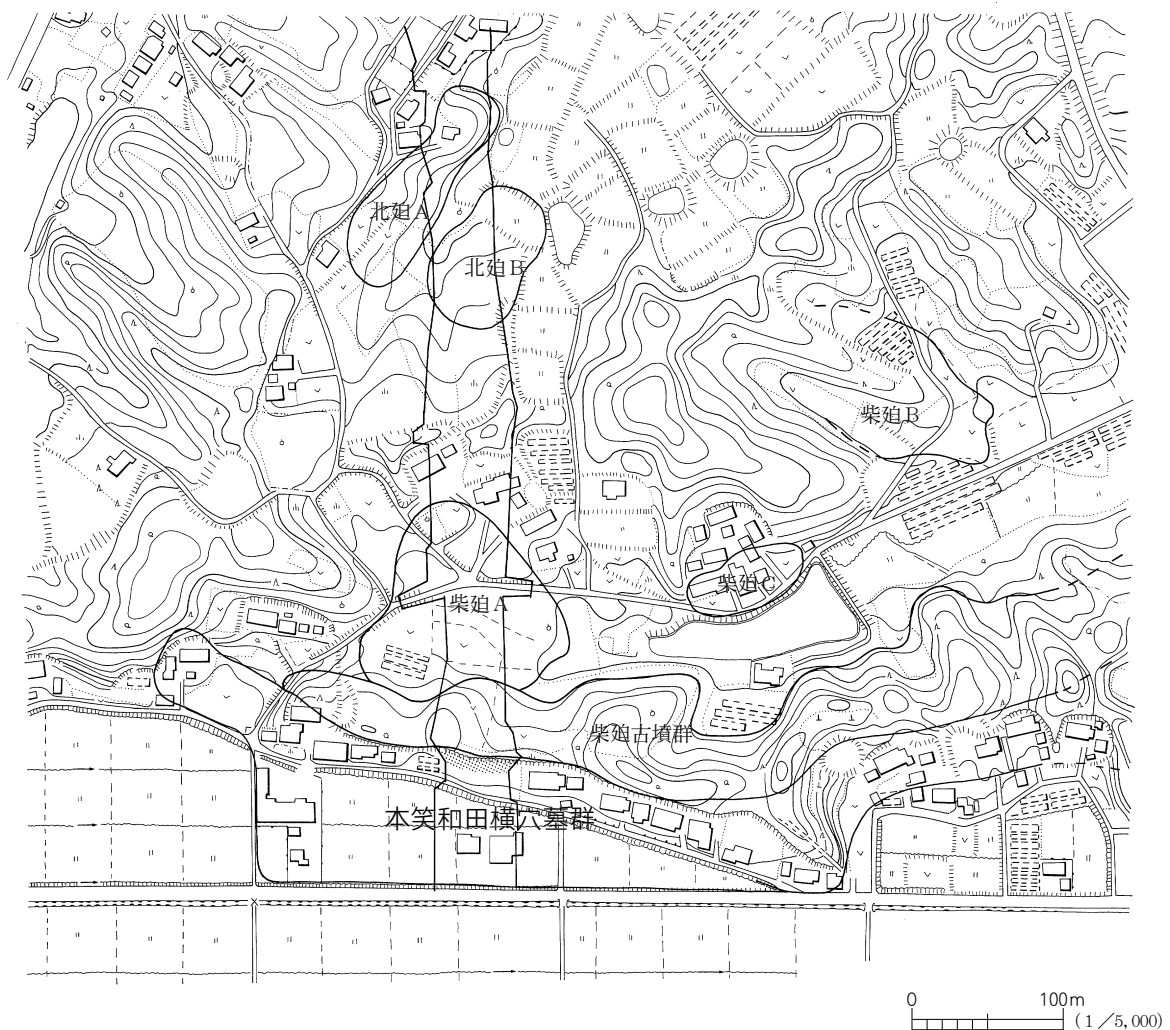


図1 遺跡位置図

第1節 遺跡の位置と地形

で構築されているため、床面が消失している横穴墓も存在する。また、崖面は後世における崩落等があり、横穴墓が構築された時期の状況はとどめていない。

遺跡周辺の地質は、基盤である丘陵が新第三紀鮮新世の半固結堆積物である凝灰岩が発達している。横穴墓群が位置する崖面も、この凝灰岩が基盤となっており、丘陵を取り巻く低地は松川浦統と呼ばれる黒沼土壌が広がる。

第2節 調査経過

本笑和田横穴墓群は、昭和63年度に福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）に委託して実施した表面調査により確認・登録された遺跡である。その結果を受けて平成11年11月30日～12月3日に試掘調査を実施し、崖面に8基の横穴墓、崖面下の平坦地に製塩関係施設とみられる構築物が確認された。（『福島県内遺跡分布調査報告6』）

この成果を基に工事区域内調査対象遺跡面積について開発側に通知するとともに、両者間での協議の結果、平成13年度以降の調査対象遺跡とする事が決定した。

なお、試掘調査の段階で懸案となっていた崖面下の平坦地及び南側の工場跡地については、平成13年6月25日～7月6日にかけて再度試掘調査を行った。その結果、崖面下の平坦地で土師器・須恵器片が数点出土したが、出土状況などから要保存対象範囲から除外した。（『福島県内遺跡分布調査報告8』）

本笑和田横穴墓群の調査は、柴迫古墳群とほぼ同時並行で実施した。4月16日よりプレハブ・トイレ等の設置、17日より作業員の雇用を開始し、柴迫古墳群の2次調査を進めた。柴迫古墳群の調査が軌道に乗った4月23日より横穴墓群調査の足場組み立てを業者に依頼した。

連休明けの5月8日より各横穴墓の精査を開始し、床面等の堆積土をすべて土嚢袋にいれ、随時ふるいにかけるなどして遺物の取り上げに努めた。横穴墓内における作業は土埃がひどく、壁面の崩落の危険性もあったため、防塵マスク・ヘルメットを着用するなどして対応し、6月初旬には各横穴墓内に堆積する土砂の除去が終了した。

6月4日～6月8日には、横穴墓の遺存状況から非接触の測量が有効であると考え、業者に依頼してレーザー計測を行い、作業の安全と迅速化を図り各横穴墓の図面を作成した。その後6月中旬に足場解体を行い、崖面下の平坦地の精査及び地形測量を6月下旬までに終了した。

7月上旬にレーザー計測による横穴墓群の全体測量、中旬に遺跡の全景写真撮影を行い、柴迫古墳群の調査に合流した。7月19日には、両遺跡の器材の片づけ・プレハブの撤去等を行い、調査の全てを終了した。

本遺跡の調査は、4月23日～7月19日の間で延べ調査日数は53日である。7月17日には福島県教育庁文化課・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所の各担当者が集まり、調査の経緯及び成果の説明後、柴迫古墳群と本笑和田横穴墓群の引渡しを行った。

調査の結果、本遺跡は古墳時代の横穴墓群であり、検出した遺構は横穴墓11基である。横穴墓から出土した主な遺物は、全部の横穴墓が開口していたこともあり、ガラス玉など数点にとどまった。

横穴墓がある崖面下の平坦地の精査では、基盤層の凝灰岩に現代の井戸や馬小屋の柱の跡などが掘り込まれているのが確認され、横穴墓に伴うような遺構や遺物は発見されなかった。

第3節 調査方法

平成13年度の一般国道6号相馬バイパス発掘調査に際し、遺跡の位置関係を正確に把握するために、各遺跡に国土座標を基準にした4m四方の方眼を設定して調査を行った。この方眼をグリッドと呼称し、その基準ラインの方向は真北を向いている。基点とした座標点は国土座標Ⅳ系の値 $X=201,100$ $Y=97,940$ で、これをA1グリッドの北西とした。平成12・13年度に調査した柴迫A遺跡・柴迫古墳群・本笑和田横穴墓群は上記の座標点を基点として、グリッド名を付している。図2に一般国道6号相馬バイパス関連遺跡のグリッド配置図を示した。

グリッドの名称は、東西方向に西から東へA・B…というように付したアルファベットと、南北方向に北から南へ1・2…というように付した算用数字との組み合わせでグリッド名を表示し、S36グリッド、Z37グリッドなどと呼称した。なお、本笑和田横穴墓群のZグリッドの東側に調査区が広がる部分については、東へ順次ア・イ…というグリッド名を付した。

実際の調査では、北西のグリッド番号を使用して、ここから東側と南側にいくごとにE1～3、S1～3とし、それぞれのグリッド番号と組み合わせで使用した。例えば、S36-E2・S3は、S36グリッドの杭の位置から東に2m、南に3m離れた場所を示している。横穴墓の実測に関しては、床面等に任意に測量点を設置し、機械で座標を読みとり図面に記録した。この数値は国土座標に合わせており、レーザー計測の各横穴墓の基準点とした。

横穴墓のある崖面下の平坦地の表土剥ぎは主に重機を使用して行い、遺構検出等は人力によって行った。

遺物の取り上げに関しては、遺構外の遺物はグリッド単位で取り上げ、層位は基本層位をLⅠ・LⅡ…で表し、遺構内の層序は $l1$ ・ $l2$ …と表した。

遺構の記録は、1/20縮尺を基本として土層断面図を作成した。レーザー計測ではその他の情報も含め平面図を1/20、全体図を1/100で作成、点群データによる立体図も作成した。また、遺構ごとにカードによる遺構の記録化を行った。写真は検出状況・土層堆積状況・完掘全景などについて35mm判モノクロ・カラーリバーサルフィルムで随時撮影し、他に完掘全景などについては必要に応じて6×4.5判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムでも撮影を行っている。

各横穴墓の堆積土はすべて土嚢袋に入れて、ふるいにかけてたり、水洗いをするなどして遺物の採集に努めた。調査において出土した遺物は、財団法人福島県文化振興事業団に持ち帰り、水洗いを行い個々に出土地点を記録し、遺構ごとあるいはグリッドごとに整理・分類した。

第3節 調査方法

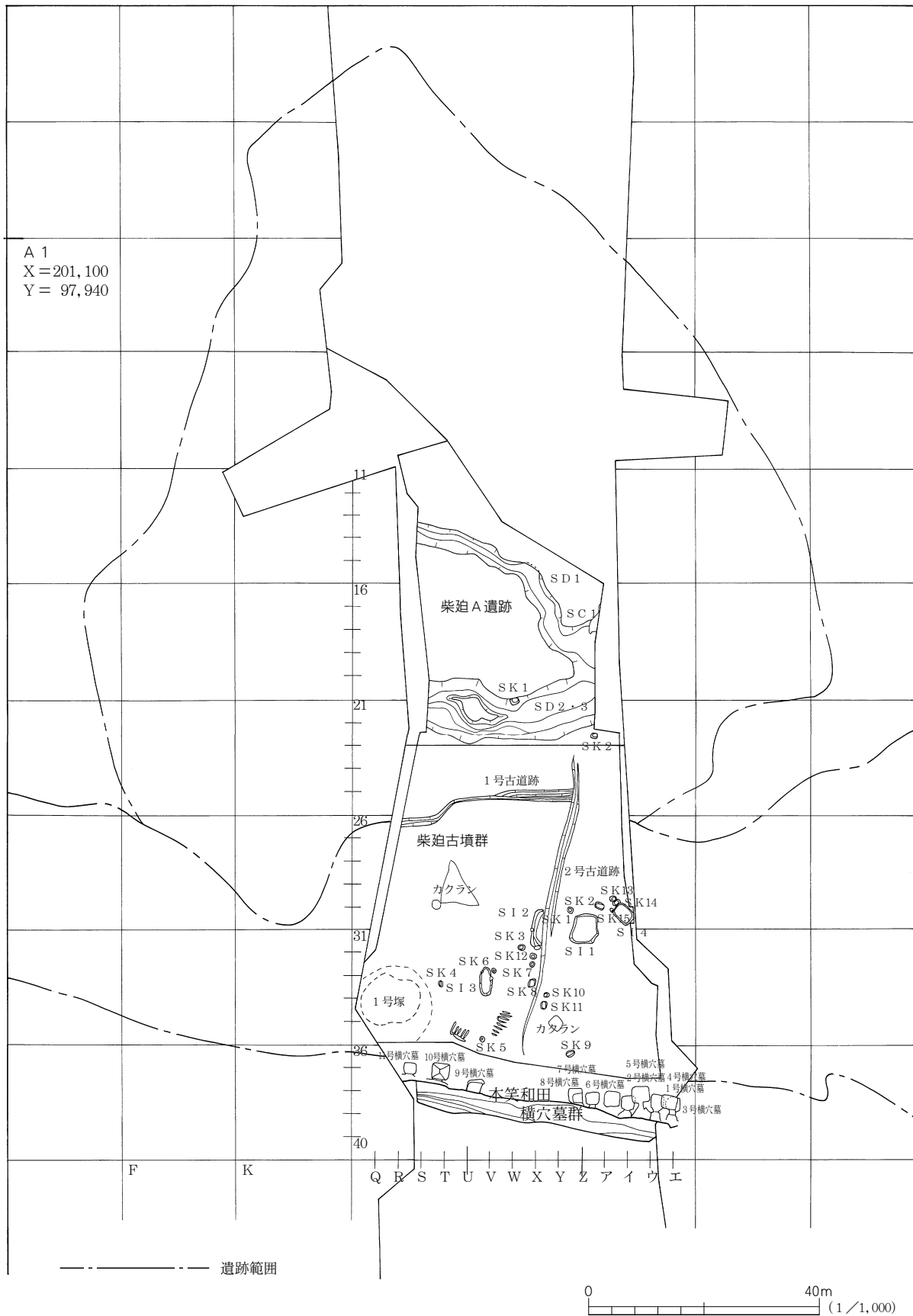


図2 グリッド配置図

第4節 基本土層

調査区内での平坦地の堆積土観察は、横穴墓が位置する崖面の平坦地西側において、T33グリッドを中心に行った。T33グリッド付近では、横穴墓が位置する崖面から南に約1.5mまでは、基盤層である凝灰岩が平坦になっており、この付近から南側は急激に落ち込む。調査区内で急激に落ち込む箇所は平坦面西側でしかみられず、中央から東側は平坦面から緩やかに傾斜している。この平坦面に堆積しているL II・L IIIは、基盤層の凝灰岩の崩落した礫を含んでいる。また、試掘調査で検出されたピット等は、平坦面の凝灰岩に掘り込まれている。

本笑和田横穴墓群の位置する崖面下の調査区内平坦地の土層は8層に分層され、地表面から基盤層の凝灰岩までは最深部で1.8mとなる。試掘調査では地表下2.5m付近の崖面崩落土の直下より土師器・須恵器が出土している。

L Iとした表土は層厚は10~15cmで、攪乱が多く入り込む。特に東側平坦地では攪乱が基盤層まで届いている状況であった。L IIは調査区全体を覆っており、層厚は20~25cmで、凝灰岩の細片を多量に含んでいる。L IIIは崖面裾部のみ堆積しており、層厚は20cmである。L IVは調査区西側の落ち込む箇所および中央から東側においては緩やかに傾斜する箇所に堆積し、凝灰岩の大礫を多量に含み、層厚は25~40cmで固く締まっている。L V~L VIIIは西側の平坦面から急激に落ち込む箇所のみ堆積し、層厚はL Vで10~30cm、L VIで35cm、L VIIは10cmとなる。L IV・L V・L VIIは凝灰岩の大礫を多量に含んでいることから、何度か大きな崖面の崩落があったことがうかがわれる。

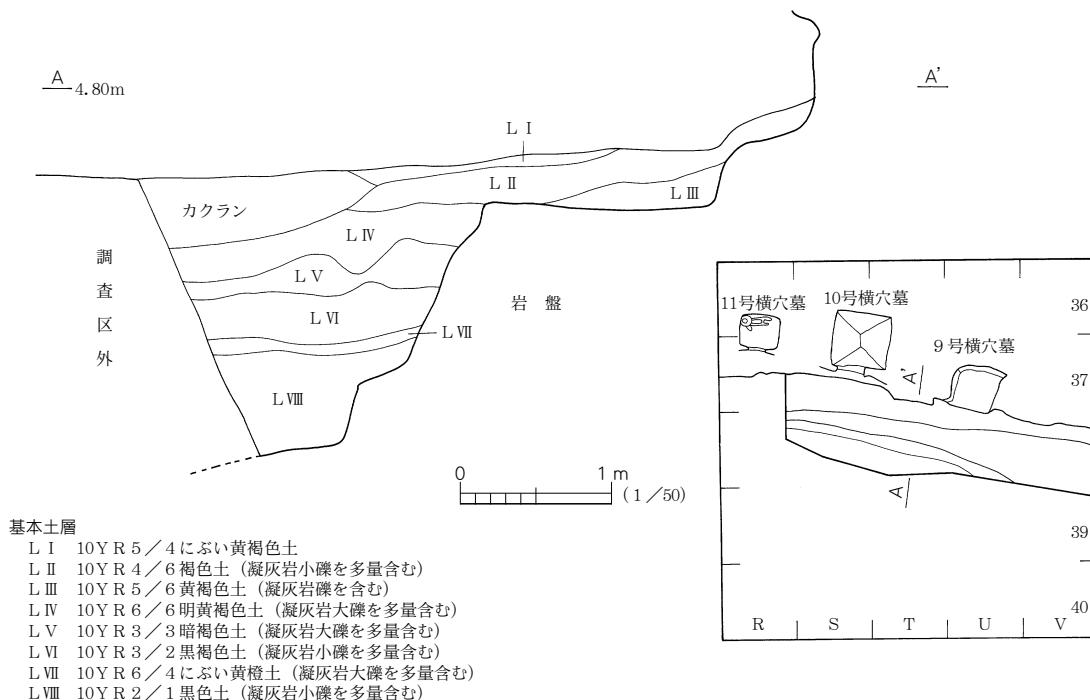


図3 基本層位図

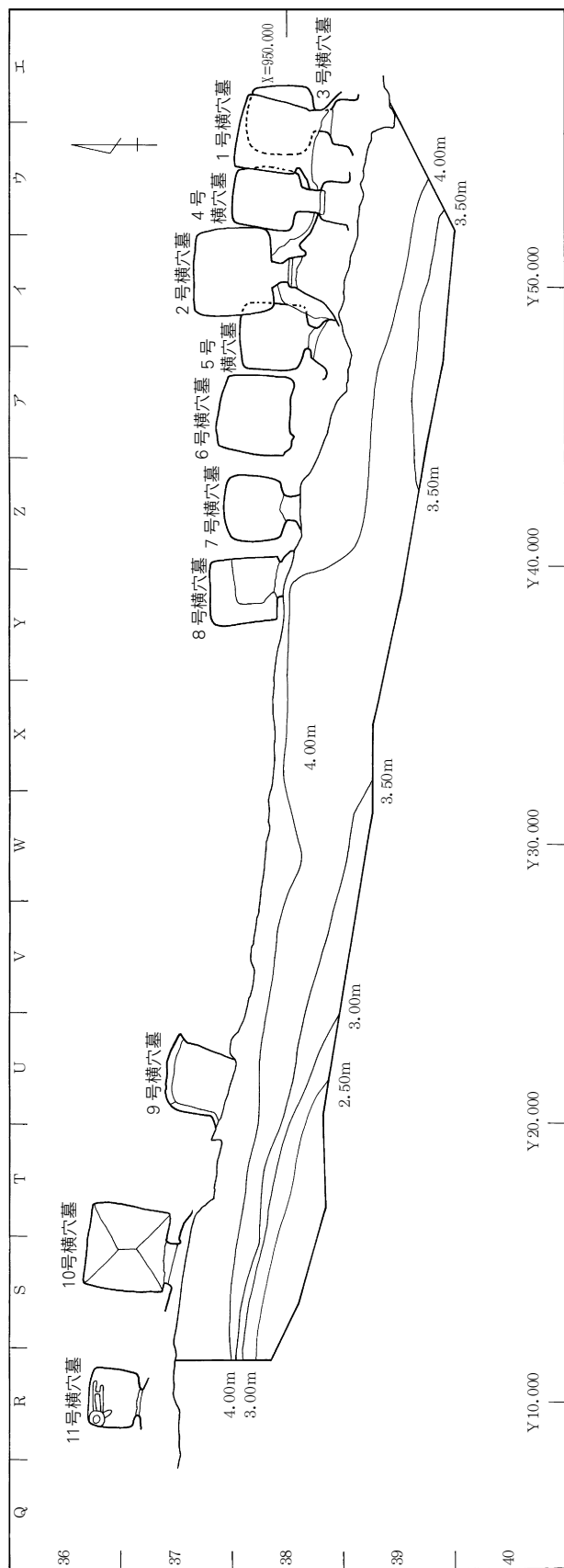
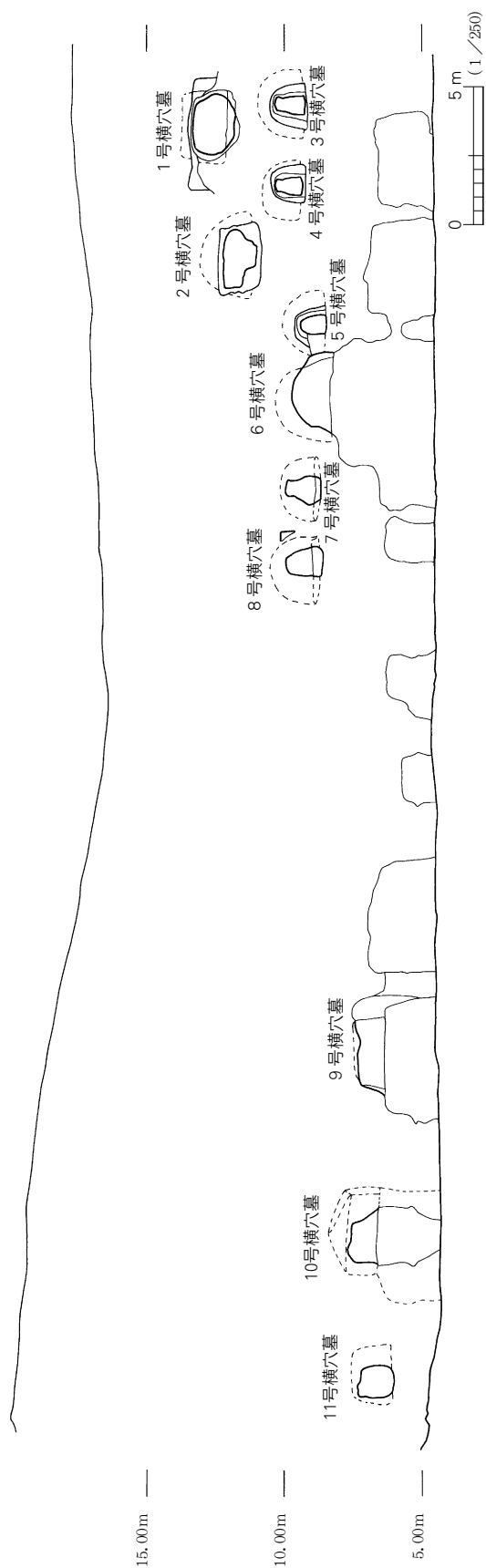


図4 遺構配置図



第2章 遺構と遺物

第1節 横穴墓

今回の発掘調査において検出された横穴墓は11基である。調査区内の崖面幅は54mに及び、横穴墓は丘陵の崖面に南側を向いて、現況では羨道部等の施設を共有している部分もなく、全て単独で並んでいる。

横穴墓が構築されている位置は、高さ16mになる崖面で1・2号が標高12m付近、3～8号が標高9m付近、9～11号が標高6m付近となる。

横穴墓はすべて開口しており、床面に筵を敷いた痕跡がある横穴墓や後世の削平により床面が消失してしまった横穴墓があり、極めて遺存状況が良くなかった。そのため遺物の出土も限られたものとなり、横穴墓の時期を特定するのが難しい状況であった。

本遺跡が位置する崖面では、調査区外にも表面調査で横穴墓が確認されており丘陵の崖面全体に横穴墓の分布が広がる状況である。

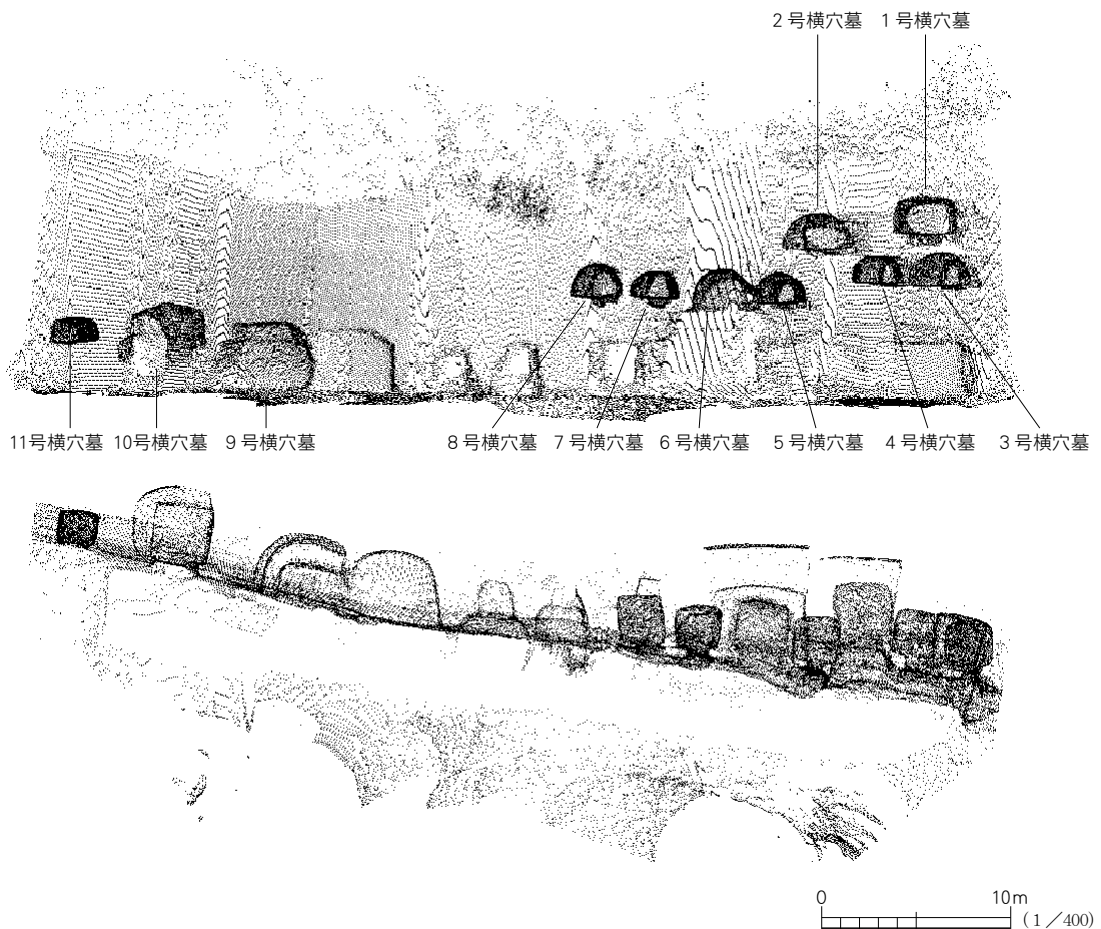


図5 レーザー計測図

第1節 横穴墓

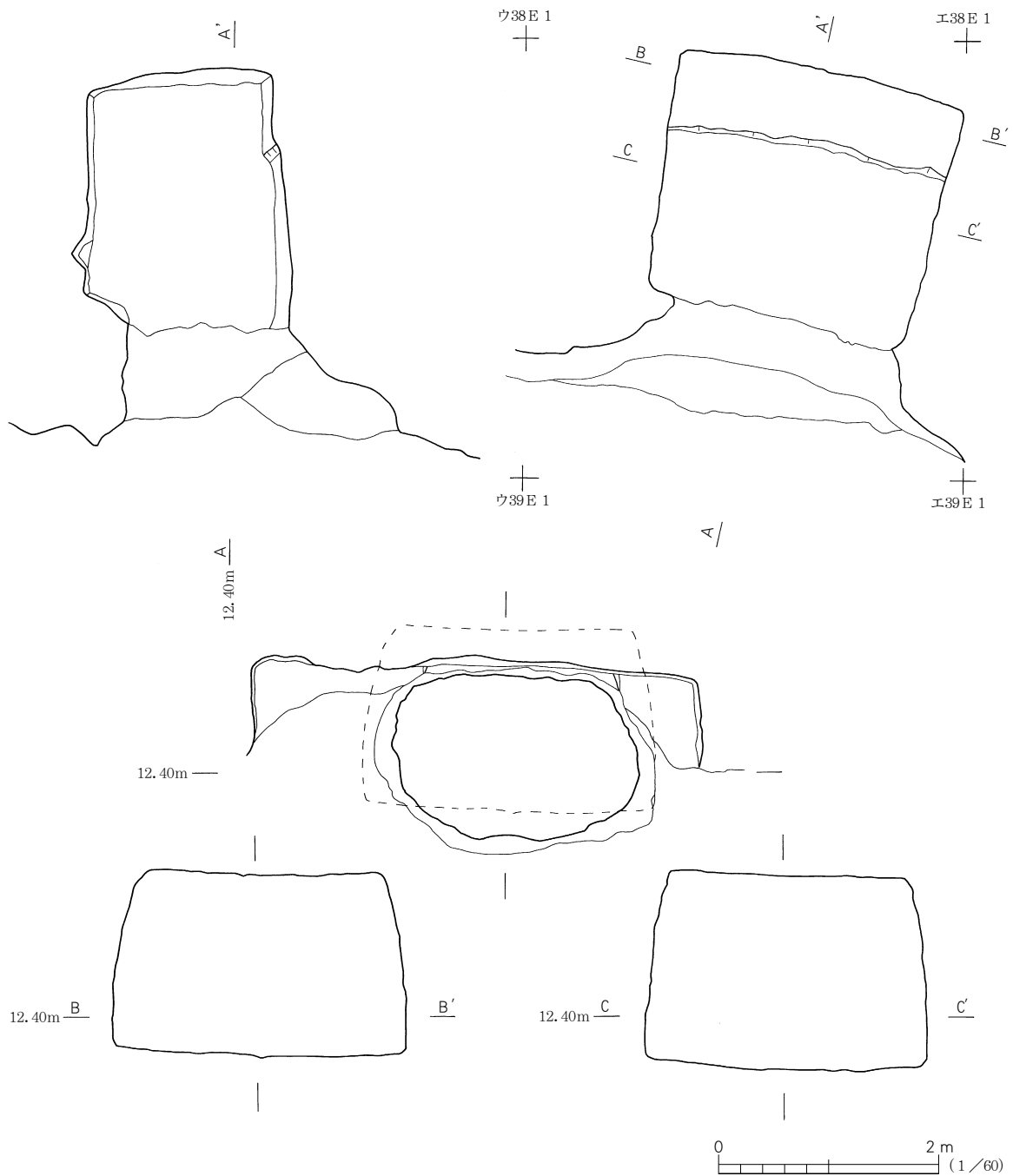


図6 1号横穴墓 (1)

1号横穴墓

遺構(図6～8, 写真3～4)

位置 1号横穴墓は、調査区崖面の東端、ウ38・エ38グリッドに位置する。西側4.9mに2号横穴墓、下側2.5mには3号横穴墓が構築されている。今回調査した横穴墓の中では上段に位置し、隣接する2号横穴墓より1mほど床面の標高が高く、最も高い位置に構築されている。

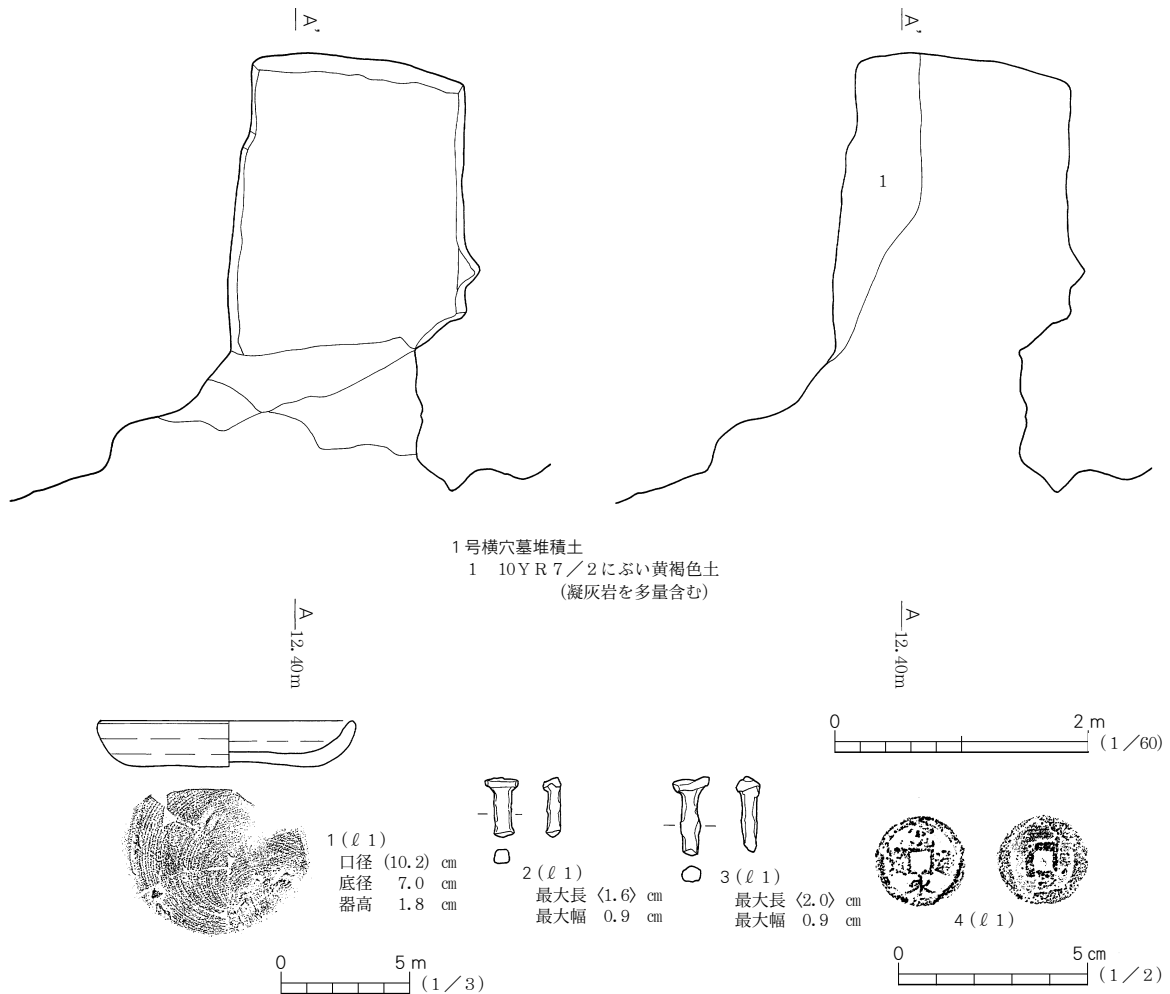


図7 1号横穴墓 (2) ・ 1号横穴墓出土遺物

調査区外の東側では、以前の崖崩れにより補強工事が行われており、この工事の際とみられるが、横穴墓の東側上部の崖面には重機によって削平された痕跡が残っている。

堆積土 横穴墓は開口しており、凝灰岩が風化した締まりのないにぶい黄褐色土が約60cm堆積している。他の横穴墓と比較すると堆積土の厚さが3倍以上で、30～40cm大の砕かれた凝灰岩が大量に含まれていた。

玄室内の壁面が大きく崩落した痕跡は、天井の一部にしか認められないため、玄門・閉塞施設などが何らかの要因で壊され、玄室内に廃棄されたものではないかと考えている。

床面全体には藁が敷かれている状況であったため、後世に再利用されていたと考えられる。

玄室 床面の平面形は東西2.5m×南北2.3mの正方形に近い形状を呈し、床面には棺座が構築されており、奥壁の床面幅の midpoint と前壁の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、やや西側に傾く。

床面の東西方向はほぼ平坦であるが、南北方向は床面標高が奥壁で12.05m、玄門付近で11.90m、比高差が15cmと奥壁から玄門にかけて緩やかに傾斜している。

棺座は、奥壁から0.7m南側で5～6cm高く削りだされており、平面形は長方形で、溝等の施設は構築されていなかった。

第1節 横穴墓

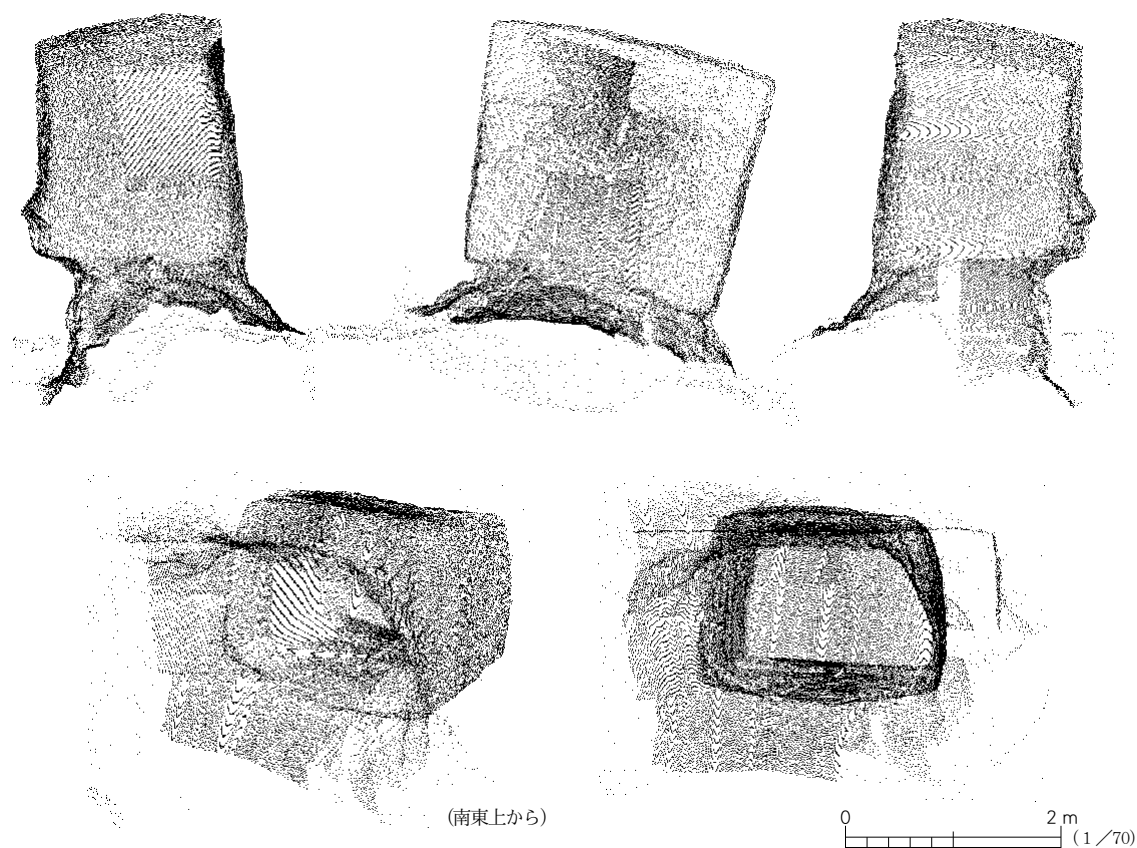


図8 1号横穴墓レーザー計測図

玄室の立面形は平型を呈し、天井高は玄室中央で1.75mを測る。奥壁は上辺が2.1m、下辺が2.6m、高さが1.6mの台形をなしており、東西の壁と同じく床面からほぼ垂直に立ち上がる。

なお、天井の前壁付近には大きく崩落している箇所が認められた。

工具痕は壁面の風化が激しく顕著には残っていないものの、土が堆積していた箇所と奥壁や天井及び東西壁の角に認められる。

現況では天井や壁の隅の方向に向かい、刃先が平形で、6cm幅の工具痕が若干認められ、特に四隅での掘り込みが深い。

玄門 崩落が激しいため、遺存状況は極めてよくないが、現況では短軸1.45m、長軸2.2mの隅丸長方形をしており、床面は崩落しているため、閉塞に伴う施設は検出されなかった。

崩落した玄門の上部には、幅1.75m、天井までの最大遺存高0.2m、最大遺存奥行き0.25mで段差がついており、形状は遺存の状態から長方形を呈すると考えられる。この段差は、遺存する位置から閉塞に伴う施設が、崩落をまぬがれた箇所と推測される。玄門の遺存奥行きは0.8mである。

羨道部 周囲の崖面の状況から羨道部が存在していたと推測されるが、羨道部も玄門と同様に崩落が激しいため床面等は遺存していない。

しかしながら、天井で玄門と同じように幅4m、天井までの最大遺存高0.8m、最大遺存奥行き0.3mで段差がついており、形状は遺存状況から長方形を呈すると考えられる。この段差は、遺存

する位置から閉塞部から羨道部になる変換点の崩落をまぬがれた箇所と推測され、羨道部の幅は玄室の幅の1.5倍となる。

周囲の崖面や羨道部の遺存状況から、奥壁より羨道部までの全長は3.5mを超えると推定される。

遺物(図7, 写真26)

横穴墓の構築の時期と関連しないが、玄室内の ℓ 1より杯1点、古銭1点、釘2点が出土した。

杯は、全体の3/4が遺存しており、ロクロ整形で底部に糸切り痕がみられる。底部外面に茶褐色、口縁部内面に白い付着物がある。杯の時期は中世以降のものと考えている。古銭は寛永通宝である。

釘は頭部付近のみ遺存しており、断面が四角であり、釘の先端を折り曲げ平らにして頭部を造りだしている。

まとめ

1号横穴墓は、今回調査した横穴墓の中では最上位に位置し、規模として大きな部類にはいる。玄室の立面形は規模の違いがあるものの、11号横穴墓とほぼ同じである。

玄門や羨道部の崩落が激しいため、全体像をうかがうことはできないが、玄門の天井の段差から推測できる閉塞部や羨道部の規模は、他の横穴墓と比べると大きい。

羨道部の断面形が長方形を呈することが推測されるのは、本横穴墓と西側に位置する2号横穴墓である。

遺物は近世以降の年代であり、床面に藁が敷いてある事や凝灰岩が混じる堆積土からの出土状況から考えると後世に入り込んだものと考えている。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土がないため特定できないが、概ね7世紀頃と考えている。

2号横穴墓

遺構(図9～11, 写真5・6)

位置 2号横穴墓は、調査区崖面の東側、イ37・38、ウ37・38グリッドに位置する。東側4.9mに1号横穴墓、東側下方3mに4号横穴墓、西側下方3.5mに5号横穴墓が構築されている。

隣接する1号横穴墓より床面標高が1mほど低い位置にあるものの、今回調査した横穴墓の中では最上位に位置する。本横穴墓より西側には同じ標高で横穴墓は構築されていない。

なお、本横穴墓が構築されている岩盤には大きな亀裂が入っており、このため玄室の床面や西壁などに亀裂に沿って崩落している箇所がみられる。

堆積土 横穴墓は開口しており、壁が風化して剥落したとみられる締まりのない灰褐色土が、約6cmの厚さで堆積し、落葉などを大量に含んでいる。玄門および羨道部が崩落している部分も多いため、玄室のみの堆積となっている。

玄室 床面の平面形は、東西3.1m×南北2.8mの隅丸方形に近い形状を呈し、床面には溝等の

第1節 横穴墓

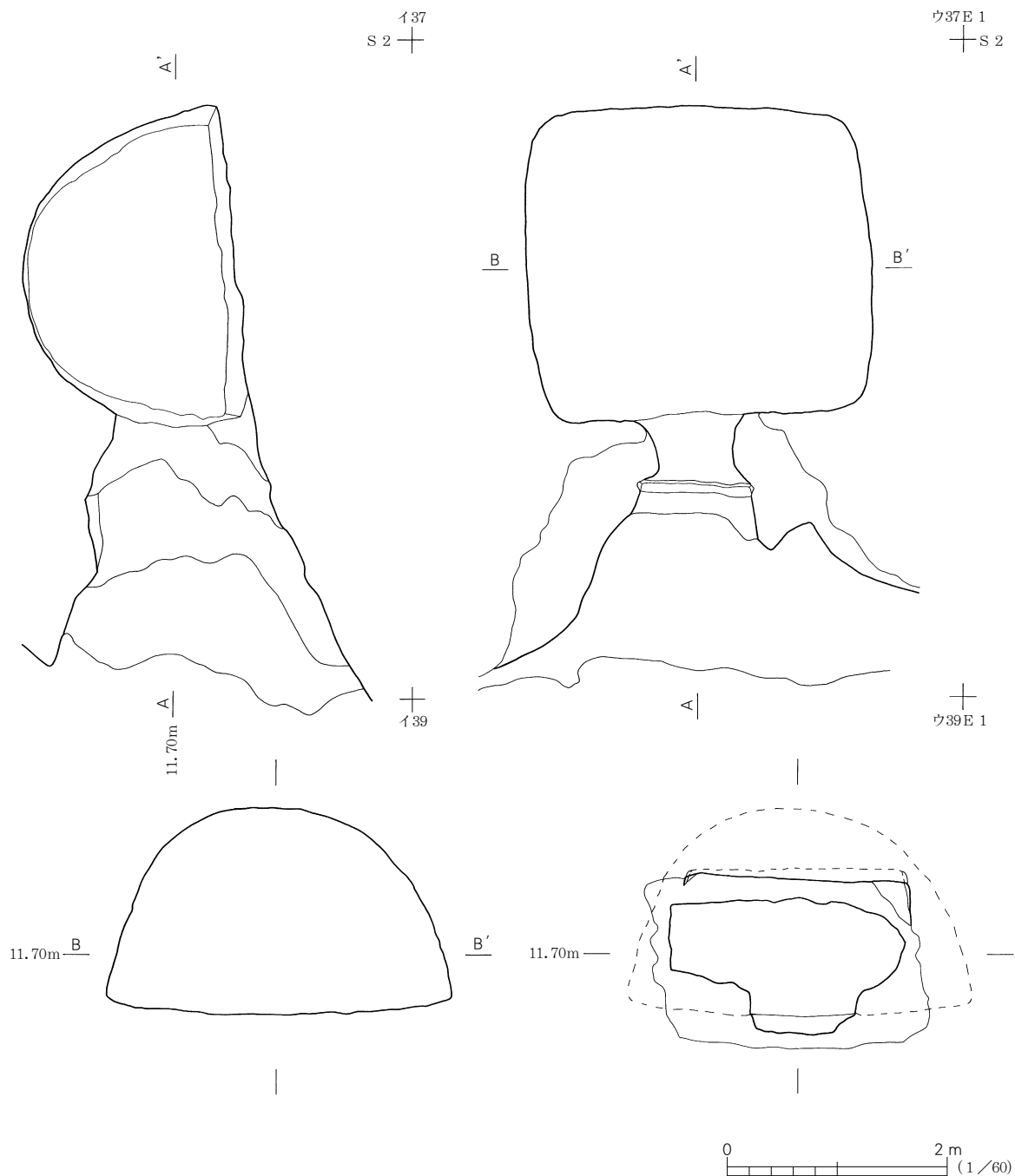


図9 2号横穴墓(1)

施設はなく、奥壁の床面幅の midpoint と前壁の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、ほぼ南北である。

床面は東西方向にはほぼ平坦であるが、南北方向は床面標高が奥壁で11.3m、玄門で11.0m、比高差が30cmと奥壁から玄門にかけて傾斜しており、今回調査した横穴墓の中で最も傾斜が大きい。

床面には溝などの施設は検出されなかったものの、亀裂が入っているため、その箇所の剥落が溝状に残っている。

玄室の立面形はドーム形をしており、天井と壁面とは明瞭な変換点を持たないが、亀裂が入っているため、西壁が稜線を持つように天井につながる。天井の最大高は玄室中央で1.9mを測り、今

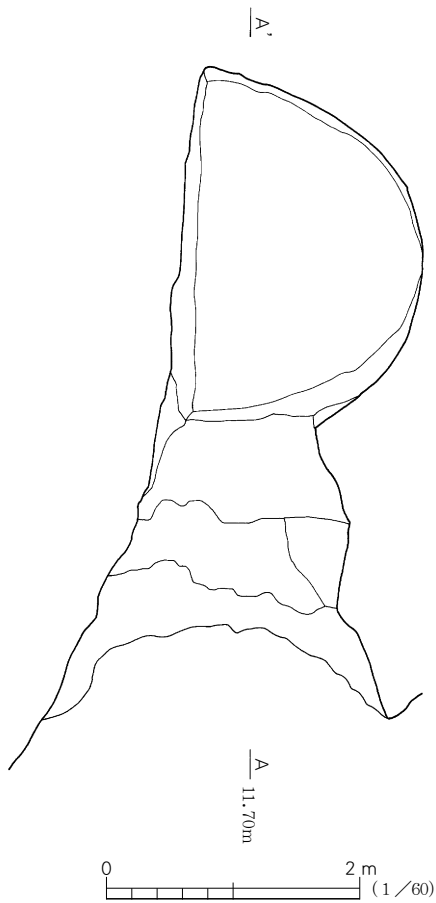


図10 2号横穴墓 (2)

回調査した横穴墓の中では高い部類に入る。

床面は風化が激しく、床面中央から玄門にかけての工具痕は認められないが、一部奥壁に沿った部分で床面中央から奥壁に向かって掘削しているのが認められる。

工具痕の幅は約5cmで、刃先は平形で、掘削の状態も平坦であった。天井の工具痕は顕著に遺存しており、天井中央を円形状に削り込み、そこから四隅に向かって帯状に工具痕が遺存し、稜線を描く様に側壁の上部まで削りだしている。

他の部分では天井の中心部分から周囲へと放射状に削り込んでいる。工具痕の幅は6cmで、刃先は平形である。

東西壁や奥壁の中央は壁の剥落が激しく明瞭な工具痕は認められなかった。

玄門 崩落が激しいため、遺存は極めてよくないが、現況は西側の部分が亀裂のため大きく崩落しており、長軸2.15m×短軸1.25mの不整形をしている。

床面付近に遺存している玄門の幅は0.7mを測り、遺存状況から他の横穴墓と同様にアーチ型を呈しているものと推測される。

閉塞部から前壁までの奥行きは0.8mを測り、玄室の床面から傾斜をつけて閉塞部につながる。

閉塞部 閉塞部は、玄門から羨道部につながる床面において、長さ1.05m、幅0.1m、深さ5cmの規模で溝状に窪んでおり、その底面はほぼ平坦である。

天井では、閉塞部の溝と対応する位置で屈曲している箇所があり、遺存の状況から玄門と羨道部との変換点と考えている。

なお、周囲の壁面には、溝状の落ち込みや段差などは検出されなかった。

羨道部 崩落や剥落が多く、床面の遺存状態をとらえることはできなかった。天井は閉塞部からつながる箇所を大きく屈曲させて削り込んでいるのが確認され、遺存している規模は幅2.0m、天井からの最大遺存高0.5m、最大奥行き0.7mである。

周囲の崖面の状況から奥壁から羨道部までの全長は5.5mを超えると推測される。

まとめ

2号横穴墓は、今回調査した横穴墓の中で、1号横穴墓と同じ最上位に位置し、規模として大きな部類にはいる。玄門や羨道部での崩落はあるものの、全体像をうかがえる横穴墓である。

本横穴墓の羨道部の断面形は、遺存状況から長方形を呈することが推測され、同様の羨道部を持つ横穴墓は東側に位置する1号横穴墓である。

第1節 横穴墓

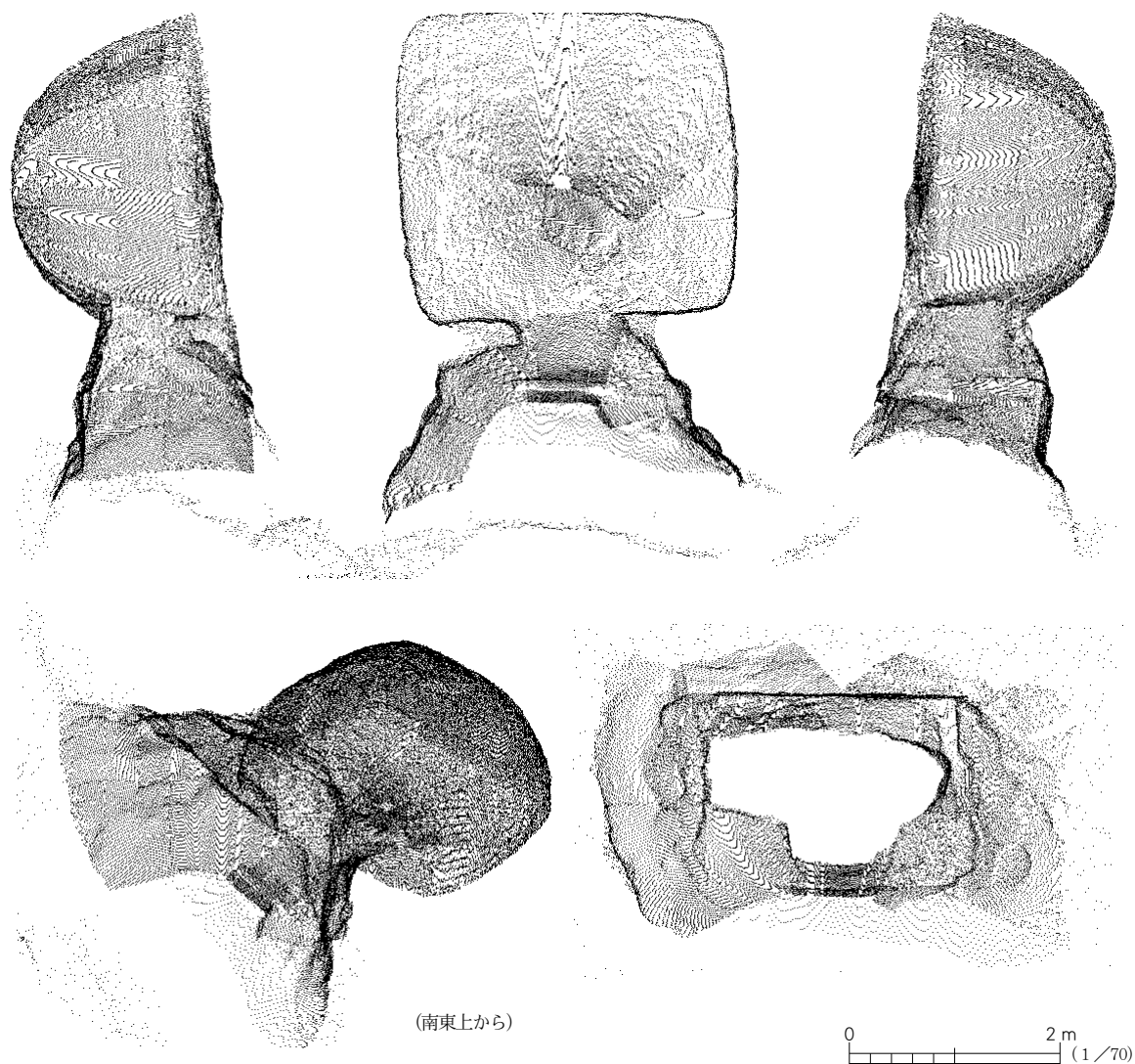


図11 2号横穴墓レーザー計測図

他の横穴墓と比較すると玄室や玄門の床面の傾斜が強く、玄室の天井に稜線を描くように削りだされている工具痕も他の横穴墓にみられない特徴である。

横穴墓の時期については、遺物が床面の堆積土中から出土していないため、時期の特定はできないが、概ね7世紀と考えている。

3号横穴墓

遺 構(図12・13, 写真7・8)

位 置 3号横穴墓は、調査区崖面の東側、ウ38・39, エ38・39グリッドに位置する。西側3mに4号横穴墓、上側2.5mに1号横穴墓が構築されている。

今回調査した横穴墓の中では中段の並びの一番東端に位置し、西側に隣接する4号横穴墓と床面標高がほぼ同じである。

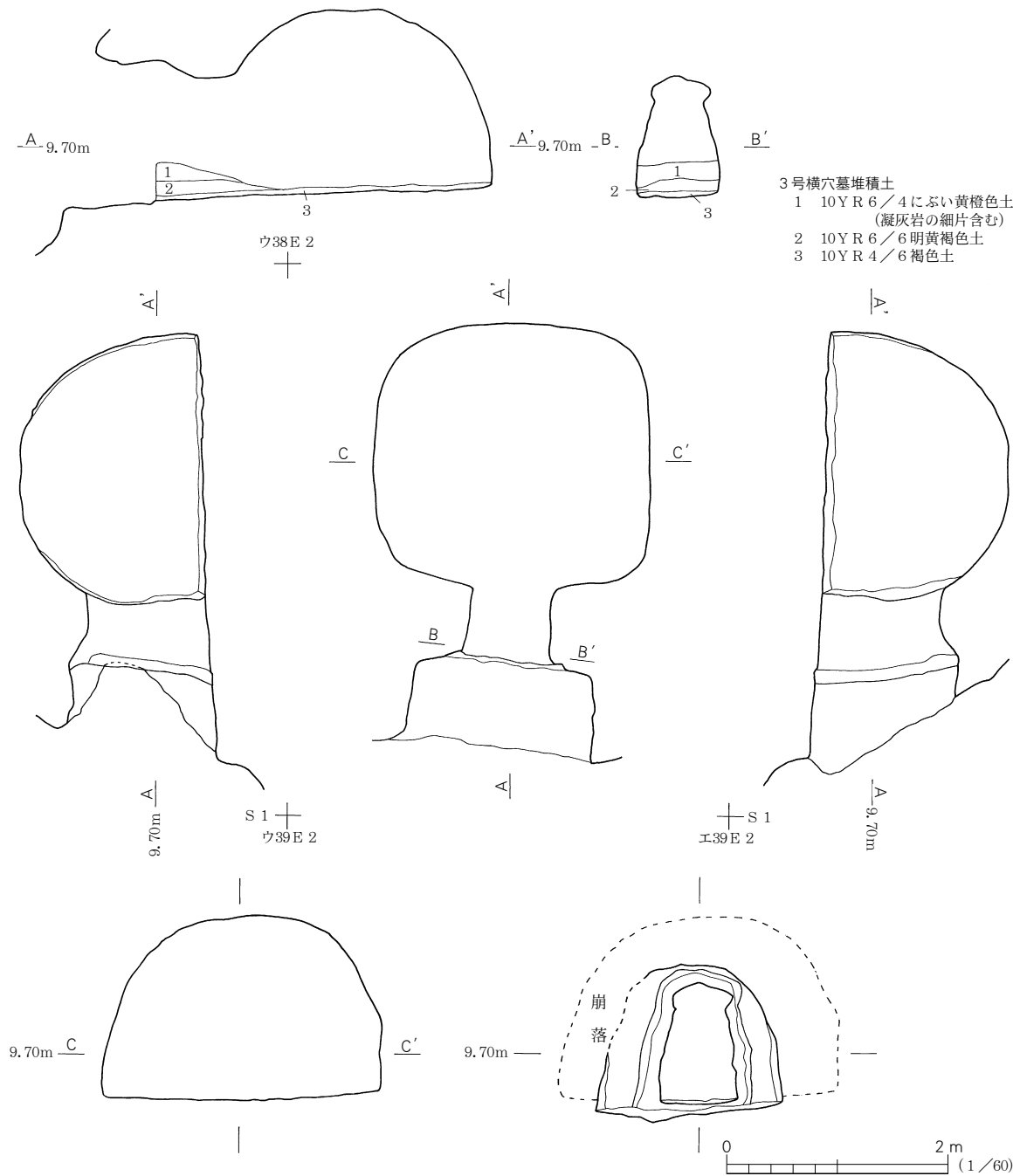


図12 3号横穴墓

なお、本横穴墓の東側は、崖面の崩落のため補強工事を施しており、横穴墓の存在が確認できず、下側2.5mには、後世の削平によって崖面に大きな穴が開けられている。

堆積土 横穴墓は開口しており、玄門から羨道部にかけての堆積土は、他の横穴墓と比べると比較的多いが、玄室内の堆積土上には空き缶などが散乱している状況であった。

堆積土は3層に分けられ、*l* 1は木葉や壁の剥落土を含む締まりのない黄橙色土、*l* 2は壁の剥落土を主体とした締まりのある明黄褐色土、*l* 3は床面に堆積しているやや締まりのある褐色土であり、層厚は閉塞部で44cm、奥壁で5cmを測る。

第1節 横穴墓

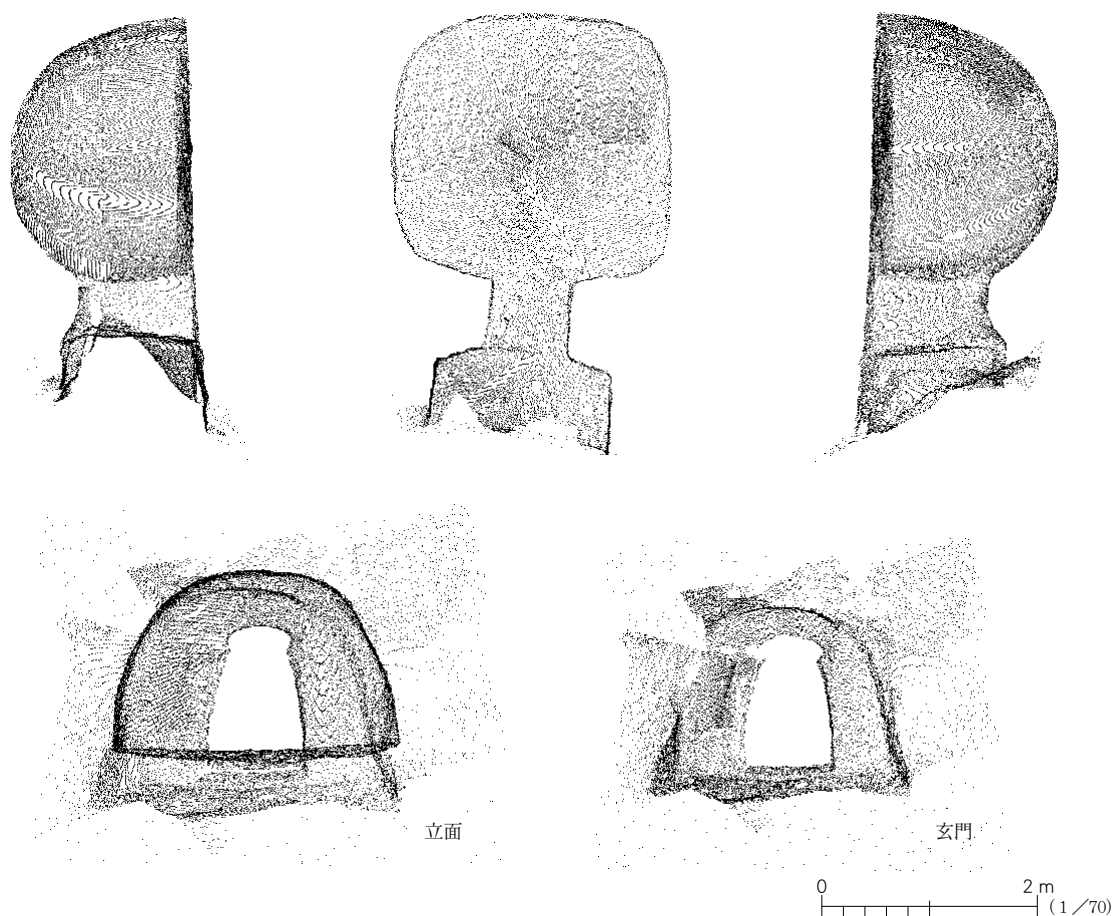


図13 3号横穴墓レーザー計測図

羨道部の堆積土中には閉塞に使用したとみられる石材等は含まれておらず、玄室内の ℓ 3上面には藁が敷いてある状況から、後世に何らかの形で横穴墓を再利用したと考えている。

玄室 床面の平面形は、東西2.5m×南北2.4mの隅丸の方形に近い形状であるが、他の横穴墓と比較すると四隅を丸く構築しており、西壁の隅が東壁の隅より丸みを持つ。

床面には溝等の施設は構築されておらず、奥壁の床面幅の midpoint と前壁の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、ほぼ南北方向である。

床面の東西方向は平坦であるが、南北方向は床面標高が奥壁で9.35m、玄門で9.25m、比高差が10cmと他の横穴墓と比べると平坦に近く、床面は玄室から閉塞部まで段差を持たない。

玄室の立面形は、やや天井頂部が平坦ぎみになるドーム型を呈しており、明瞭な変換点を持たず壁面から天井へとつながり、天井の最大高は玄室中央で1.65mを測る。

床面の風化が激しいものの、他の横穴墓と比較すると遺存状況が良く、奥壁に近い箇所では工具痕が認められた。

工具痕は床面中央から奥壁に向かって残っており、床面と壁との変換点がやや深めに削り込まれている。工具痕の幅は約5cmであり、刃先は平行で、掘削の状態も平坦であった。

天井の工具痕は他の横穴墓に遺存している工具痕とは違い、細い筋状に痕跡が残っており、天井

頂部から周囲へと削りだしている。

東西壁と奥壁の中央より下位は、壁の剥落が激しく明瞭な工具痕は認められなかった。

玄門 玄門上部が崩落してはいるものの、遺存状況が比較的良好であり、構築の状況や形態をうかがうことができる。

立面形はアーチ型を呈し、床面幅で0.7m、高さは現況で1.1m、奥行き0.5mを測り、床面は玄室床面からほぼ平坦に延び、羨道部で段を形成する。

玄門の床面幅の midpoint と羨道部の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、玄室の中軸線より西側に傾く。

閉塞部 他の横穴墓の様に溝状にはなっていないが、玄門の床面より羨道部の床面が4cmほど低くなり、段差を形成している。

羨道部と玄門の境がアーチ状に窪んでおり、その規模は床面幅で1.1m、高さが1.25m、奥行き0.1mを測る。遺存状況からこの窪みは閉塞に伴う施設と判断した。

羨道部 西側壁面が崩落しているものの、遺存が比較的良好で、床面の隅には閉塞部を削りだした工具痕が若干遺存している。

立面形はアーチ型を呈し、その規模は床面幅で1.7m、高さが1.35m、遺存奥行き0.75mを測る。羨道部の床面標高が9.15mで、玄室床面との比高差は20cmと横穴墓全体の傾斜が緩やかであり、周囲の崖面や羨道部の遺存状況から奥壁から羨道部までの全長は4mを超えると推定される。

ま と め

3号横穴墓は、今回調査した横穴墓の中では比較的良好な遺存状況が良く、閉塞部施設や羨道部の構築状況をうかがうことができる。

閉塞部や玄室及び天井の形態に若干の相違があるものの、本横穴墓と同じアーチ型を呈した閉塞部や羨道部を持つものは、西側に位置する4・5号横穴墓である。

また、玄室内の天井に遺存する筋状の工具痕の形状は、工具痕が認められる他の横穴墓にはみられない特徴を持つ。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土がないため特定できないが、概ね7世紀頃と考えている。

4号横穴墓

遺 構 (図14・15、写真9・10)

位 置 4号横穴墓は、調査区崖面の東側、ウ38・39グリッドに位置する。東側3mに3号横穴墓、西側5mに5号横穴墓、西側上方3mに2号横穴墓が構築されている。

今回調査した横穴墓の中では中段の並びに位置し、3号横穴墓と床面標高がほぼ同じである。なお、下側2.5mには、後世の削平によって崖面に大きな穴が開けられている。

堆積土 横穴墓は開口しているものの、他の横穴墓と比較すると羨道部から玄門にかけての堆積

第1節 横穴墓

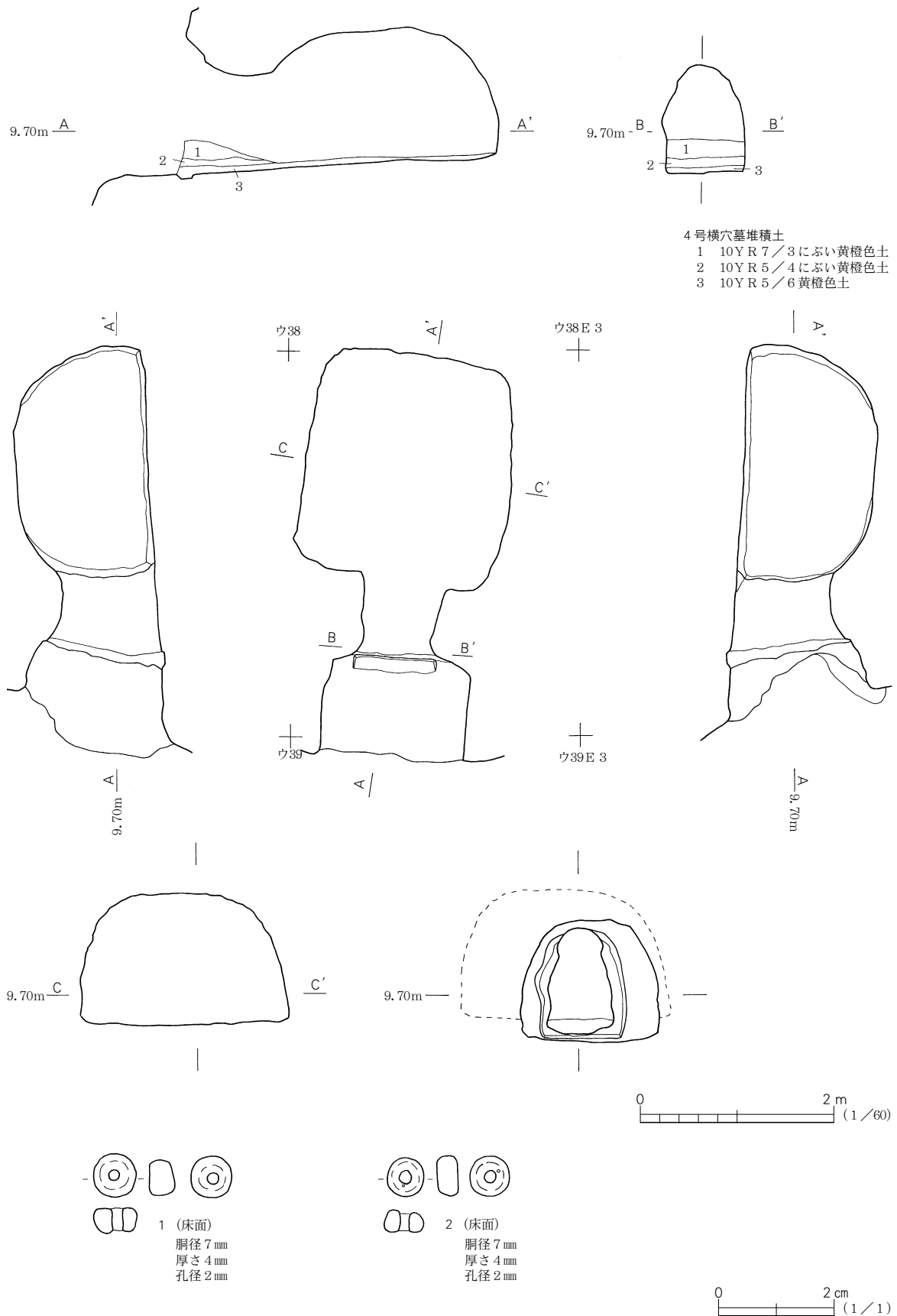


図14 4号横穴墓・4号横穴墓出土遺物

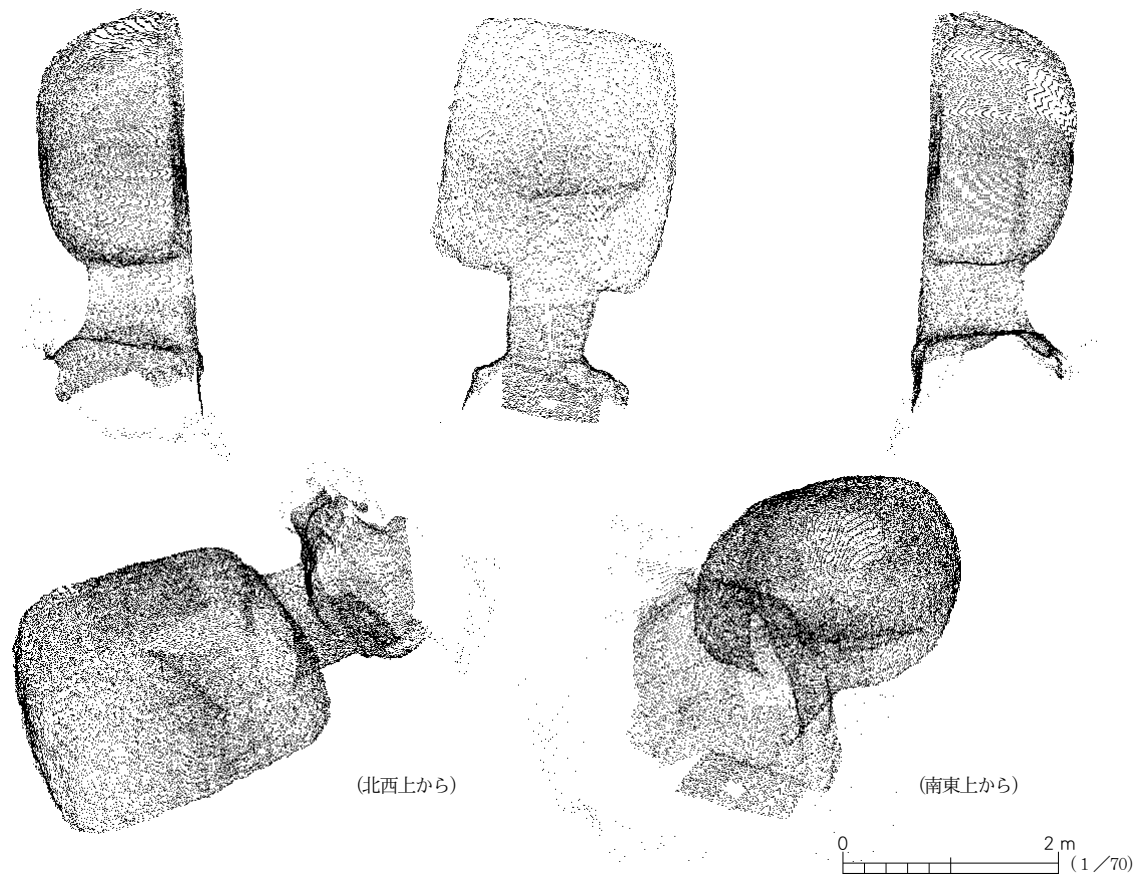


図15 4号横穴墓レーザー計測図

土は多い。堆積土は3層に分けられ、 l_1 は壁の剥落土を含む締まりのないにぶい黄褐色土、 l_2 は壁の剥落した凝灰岩の細粒を含むにぶい黄橙色土、 l_3 は床面上に堆積している締まりのある黄橙色である。層厚は玄門で45cm、奥壁付近で6cmを測る。

羨道部に堆積していた l_1 には、草木の根が多く入り込んでおり、閉塞に使用したとみられる石材等は出土していない。

玄室 床面の平面形は、東西2.15m×南北2.35mの隅丸長方形に近く、東壁がやや膨らむ形状を呈し、床面には溝等の施設は構築されておらず、奥壁の床面幅の midpoint と前壁の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、やや西側に傾く。

床面の東西方向は平坦であるが、南北方向は床面標高が奥壁で9.50m、玄門で9.30m、比高差が20cmと玄室から閉塞部まで段差を持たずに緩やかに傾斜している。

玄室の立面形は、天井頂部が平坦になるドーム型を呈し、明瞭な変換点を持たずに壁面から天井へとつながっており、天井の最大高は玄室中央で1.35mを測る。

床面は風化が激しいため、工具痕はほとんど認められず、わずかながら奥壁付近の床面に遺存しているだけであった。工具痕の幅は5cmで、掘削の状態も平坦である。

天井の工具痕は遺存状態が良く、掘削の状況をうかがうことができる。天井全体を南北方向に削りだしており、工具痕の幅は5cmで、掘削面に丸みを持つことから、刃先のやや丸い工具を用いた

第1節 横穴墓

ものと推測される。掘削の状況は他の横穴墓の天井と比較すると壁面の起伏が激しい。

奥壁や東西の壁は剥落が激しいため工具痕は認められなかった。

玄門 東側上部がやや崩落してはいるものの、遺存状況が比較的良好であり、立面形はアーチ型を呈し、床面は玄室の床面から段差を持たないで延び、閉塞部で段を形成する。

前壁の床面幅で0.85m、閉塞部の床面幅で0.75m、高さが1m、奥行き0.9mを測り、前壁から閉塞部にかけて緩やかに細くなっており、玄門が構築されている位置は、床面の中軸線よりやや東側に偏って構築されている。

玄門床面幅の midpoint と羨道部の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、玄室の中軸線より東側に傾き、南北方向を向く。

閉塞部 玄門の床面と羨道部の床面に若干の段差が削りだされており、この段差に沿って、羨道部の床面に溝が構築されている。その規模は、長さが0.85m、幅が0.15m、深さが4cmで、底面は平坦である。

羨道部と玄門の境がアーチ状に窪んでおり、床面幅が0.9m、高さが1.1m、奥行き8cmを測る。

羨道部 東側の壁が一部崩落しているが、遺存状況が比較的良好である。床面の隅には工具痕が若干遺存している。

立面形はアーチ型を呈し、床面幅が1.5m、高さが1.4m、最大遺存奥行き0.8mを測り、羨道部の床面標高が9.20mで、玄室床面との比高差は30cmとなり、玄室から羨道部にかけて緩やかに傾斜している。

周囲の崖面の状況から推定できる奥壁から羨道部までの全長は4.2mを超える。

遺物(図14, 写真26)

堆積土をふるいにかけてたり、水洗いして取り上げることができた遺物は、ガラス玉2点のみである。2点とも臼状の形態を呈し、胴径7mm、厚さ4mm、孔径2mmである。色調はコバルトブルーであるが、図14-2がより濃い色調である。

まとめ

4号横穴墓は、今回調査した横穴墓の中では、比較的良好な遺存状況が良く、3号横穴墓とほぼ同じ標高に構築されている。

閉塞部や天井の形態に若干の相違があるものの、本横穴墓と同じアーチ型を呈した閉塞部や羨道部を持つものは、隣接する3・5号横穴墓である。

玄室内天井の掘削の起伏が激しく、玄室の規模に比べて天井高が低いのは、他の横穴墓にみられない特徴である。

横穴墓の時期については、遺物の出土がガラス玉2点のみなので時期の特定が難しいが、概ね7世紀と考えている。

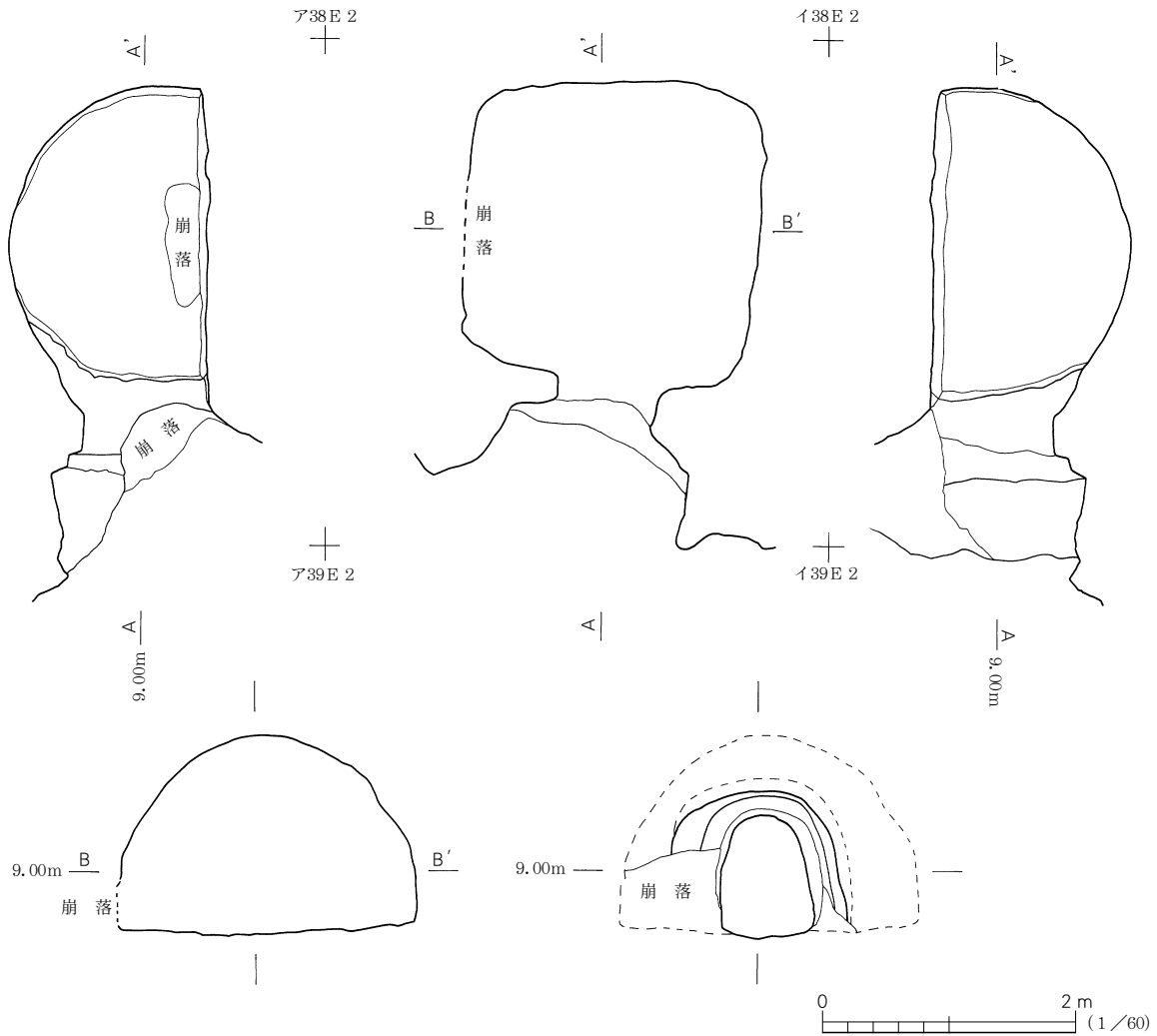


図16 5号横穴墓

5号横穴墓

遺 構 (図16・17, 写真11・12)

位 置 5号横穴墓は、調査区崖面のやや東よりのア38・イ38グリッドに位置する。東側上方3.5mに2号横穴墓、東側5mに4号横穴墓、西側2.8mに6号横穴墓が隣接する。

今回調査した横穴墓群の中では中段の並びに位置し、西側に位置する7・8号横穴墓とはほぼ同じ標高、東側に位置する3・4号横穴墓よりは、1mほど低い標高に構築されている。

なお、下側1.5mには、後世の削平によって崖面に大きな穴が開けられている。

堆積土 横穴墓は開口しており、締まりのない黄褐色土(10Y R7/2)が床面上に5~10cmの厚さで堆積している。

堆積土上面には木材が散乱しており、堆積土中には壁面が剥落した小礫が大量に含まれている状況であった。

第1節 横穴墓

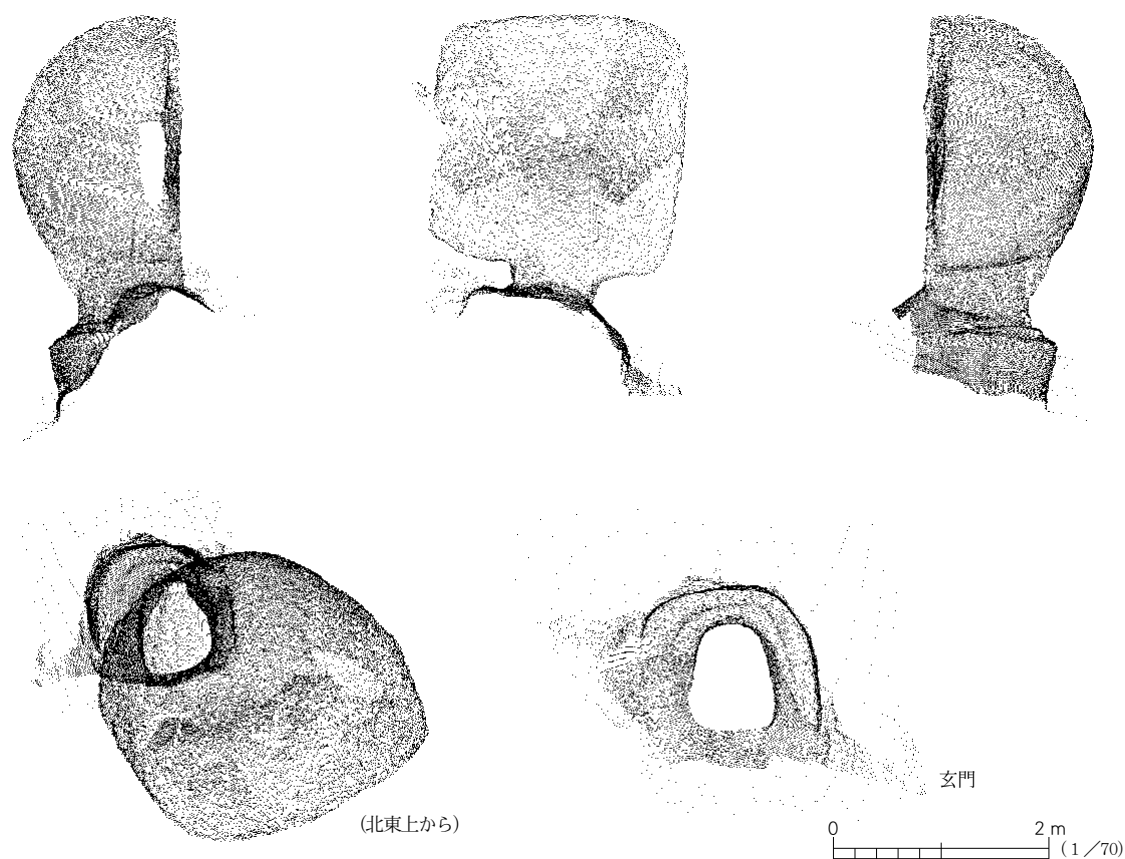


図17 5号横穴墓レーザー計測図

なお、床面上には藁を敷いた痕跡もあることなどから、後世に何らかの形で再利用されていたと考えている。

玄室 床面の平面形は、東西2.35m×南北2.4mの隅丸方形に近い形状であるが、西壁の長さが2.1m、東壁の長さが2.3mと西壁が東壁よりやや短い。

床面には溝などの施設は構築されておらず、奥壁の床面幅の中心と前壁の床面幅の中心を結んだ中軸線は、ほぼ南北方向に延びる。

床面の東西方向はほぼ平坦で、南北方向は床面標高が奥壁で8.55m、玄門で8.5m、比高差が5cmと平坦に近く、床面は玄室から閉塞部まで段差を持たない。

玄室の立面形はドーム型を呈し、明瞭な変換点を持たずに壁面から天井へとつながっており、天井の最大高は玄室中央で1.55mを測る。

西壁の床面付近は、不整な1m×0.3mの規模で壁に大きく穴があいている状態であった。開口している状況から、風化によって自然に崩落したものと判断した。

このため、他の横穴墓と比較すると床面の風化が特に激しく、精査時には床面が剥離してしまう箇所もあったため、工具痕はほとんど確認できなかった。

壁面や天井も工具痕は認められないが、わずかながら奥壁中央付近で、明瞭ではないものの幅5～7cmで工具痕が認められた。

玄門 床面の半分以上が崩落している状況にも関わらず、上半部の遺存状況が良く、形状などをうかがい知ることができる。

立面形はアーチ型を呈し、床面の幅が0.8m、高さが1m、遺存の奥行きは天井で0.8m、床面で0.2mを測る。

玄門の天井の前壁付近が崩落しているため、玄門の天井が途中から大きく広がる。このため、玄門の天井が、前壁で明確な稜線を持たずに玄室の天井へとつながる。

閉塞部 玄門と同じように下半分が崩落しており、床面の状況は不明である。上半部は他の横穴墓と比較して遺存状態が良く、閉塞部に伴うとみられる段差が明瞭に遺存していた。

その形状はアーチ状を呈しており、推定の床面幅が1.05m、高さが1.15m、遺存の奥行き0.15mである。

羨道部 下半分が大きく崩落しているものの、上半分は遺存が比較的良好である。立面形はアーチ型を呈し、推定の床面幅が1.3m、高さが1.3m、遺存最大奥行き0.85mを測る。

閉塞部の天井の標高と遺存している羨道部の南側天井の標高は、わずかながら羨道部南側が低い状況である。このような点から羨道部は、床面が羨道部南側に向かって緩やかに傾斜していたか、もしくは羨道部入口が細くなっていたと推測される。

周囲の崖面の状況から奥壁からの羨道部までの全長は3.7mを超えると推測される。

なお、玄門の床面幅の midpoint と羨道部幅の midpoint を結んだ中軸線は、玄室の中軸線より西側に強く傾いている。

ま と め

5号横穴墓は、風化が特に激しく、遺存状態が悪かったものの、玄門及び羨道部などの遺存状況から形態としては、閉塞部にアーチ型のくぼみを持ち、羨道部もアーチ型を呈する3・4号横穴墓とほぼ同じものであると判断した。

玄門が玄室の前壁中央に構築されているものの、羨道部の中軸線が玄室の中軸線から大きく屈曲するのは、他の横穴墓にはみられない特徴である。

他の横穴墓の構築位置と比較すると、隣接する6号横穴墓とは、壁が崩落して穴が開くなど構築した間隔が近すぎる様相をみせている。

遺物の出土がないため、5・6号横穴墓は、同時期に構築されたものか時期差を持って構築されたものかは判断できなかった。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土がないため、時期の特定はできないが、概ね7世紀ごろと考えている。

第1節 横穴墓

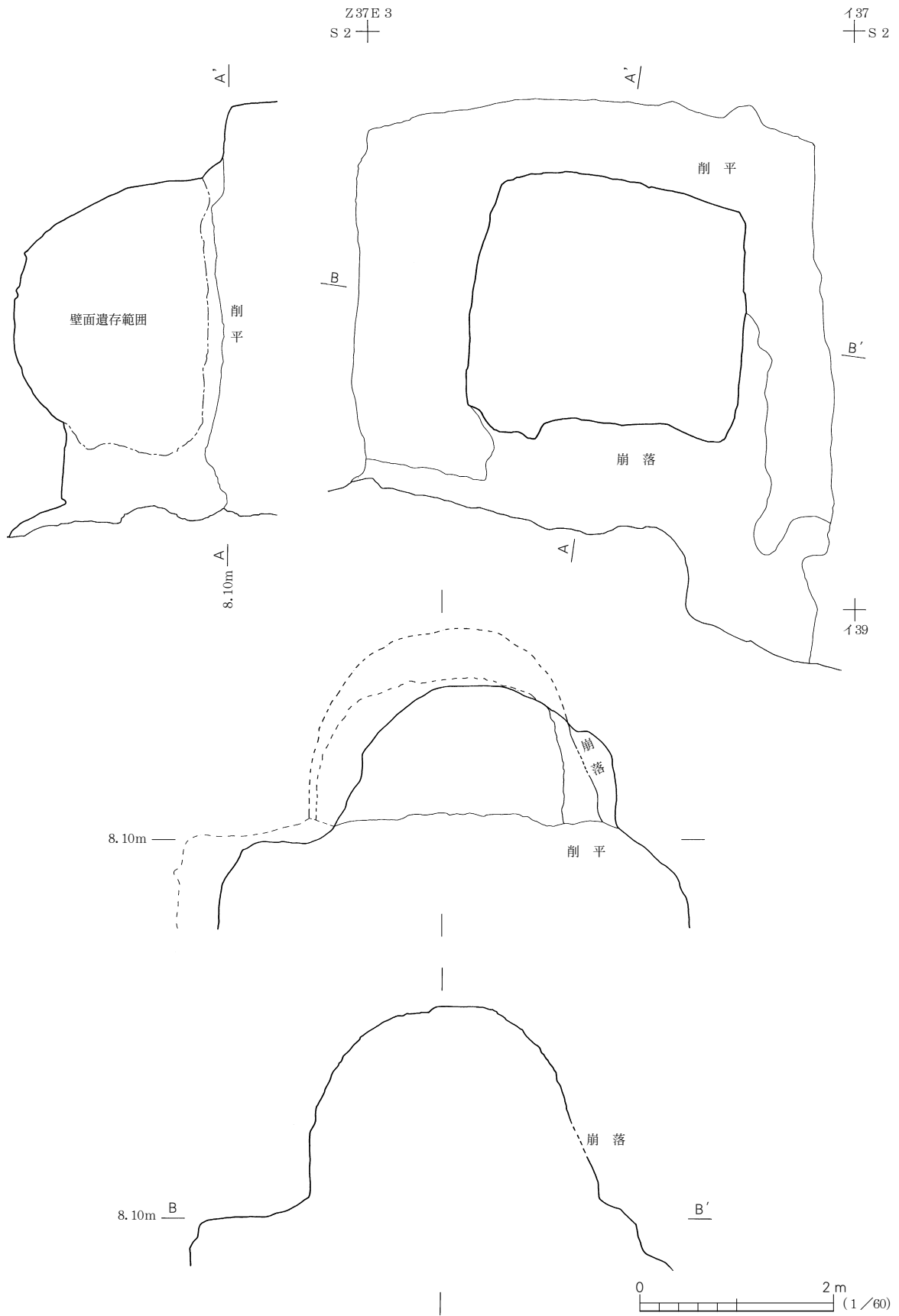


图18 6号横穴墓 (1)

6号横穴墓

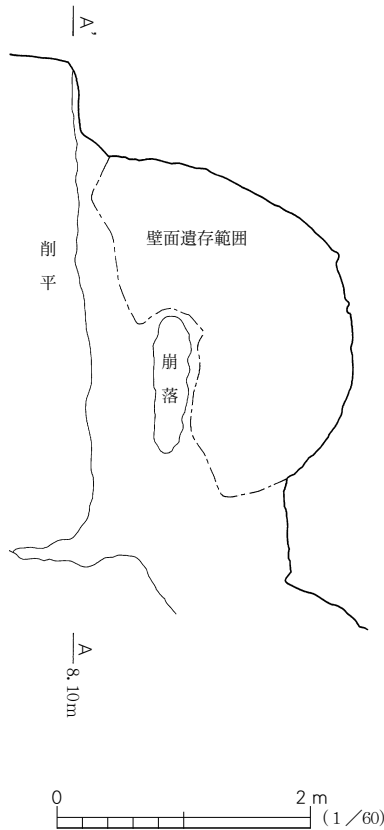


図19 6号横穴墓(2)

遺構(図18~20, 写真13)

位置 6号横穴墓は、調査区崖面の中央よりのア37・38グリッドに位置する。東側2.8mに5号横穴墓、西側3.3mに7号横穴墓が隣接する。

今回調査した横穴墓の中では、中段の並びに位置する。横穴墓の位置する崖面下側が後世に削平を受けているため、本横穴墓は床面全体が消失しており、床面付近の壁から上位しか遺存していない。

玄室 平面形は遺存している壁面から推定すると東西2.8m×南北2.5mの隅丸長方形を呈し、奥壁幅の midpoint と前壁幅の midpoint を結んだ軸線は、ほぼ南北方向を向いている。玄室の立面形は、南北方向に天井が緩やかに湾曲するアーチ型を呈し、奥壁が内傾して立ち上がり、天井との境に明瞭な稜線を持つ。

遺存している天井までの壁面の高さは最大で2.0mを測る。

西壁は剥落があるものの、床面と推定される付近まで遺存しており、東壁の下側は、崩落のため1m×0.3mの規模で穴が開いている。このため、穴の周囲も大きく剥落し、東壁の遺存は極めてよくない。また、この穴は5号横穴墓の壁面とつながっている状況である。

天井は中央が大きく剥落しており、明瞭な工具痕は確認できなかった。天井の掘削方向は、剥離した天井や周囲の状況などから、天井中央から外側に向かって放射状に広がることが確認できた。壁面は全体の風化が激しく、深く削り込んでいる部分のみ工具痕がわずかに認められる程度であったため、工具痕の幅や掘削の状態などは確認できなかった。

玄門 玄門付近は大きく崩落しているため、明確な形状などをとらえることができなかった。玄門付近の崖面の状況などから、推定できる高さは1.35m、奥行きは1mである。

奥壁から羨道部付近までの全長は、周囲の崖面の状況などから判断して5mを超える。

まとめ

6号横穴墓は、床面が削平されており、玄門付近が大きく崩落しているなど、遺存状況が極めて良くないが、今回調査した横穴墓の中では唯一玄室がアーチ型を呈するものであり、横穴墓の規模としては大きい部類にはいる。

他の横穴墓と構築されている位置を比較すると、東側の5号横穴墓とは構築した位置が近すぎる様相を呈しており、他の横穴墓とは構築状況が異なる。

第1節 横穴墓

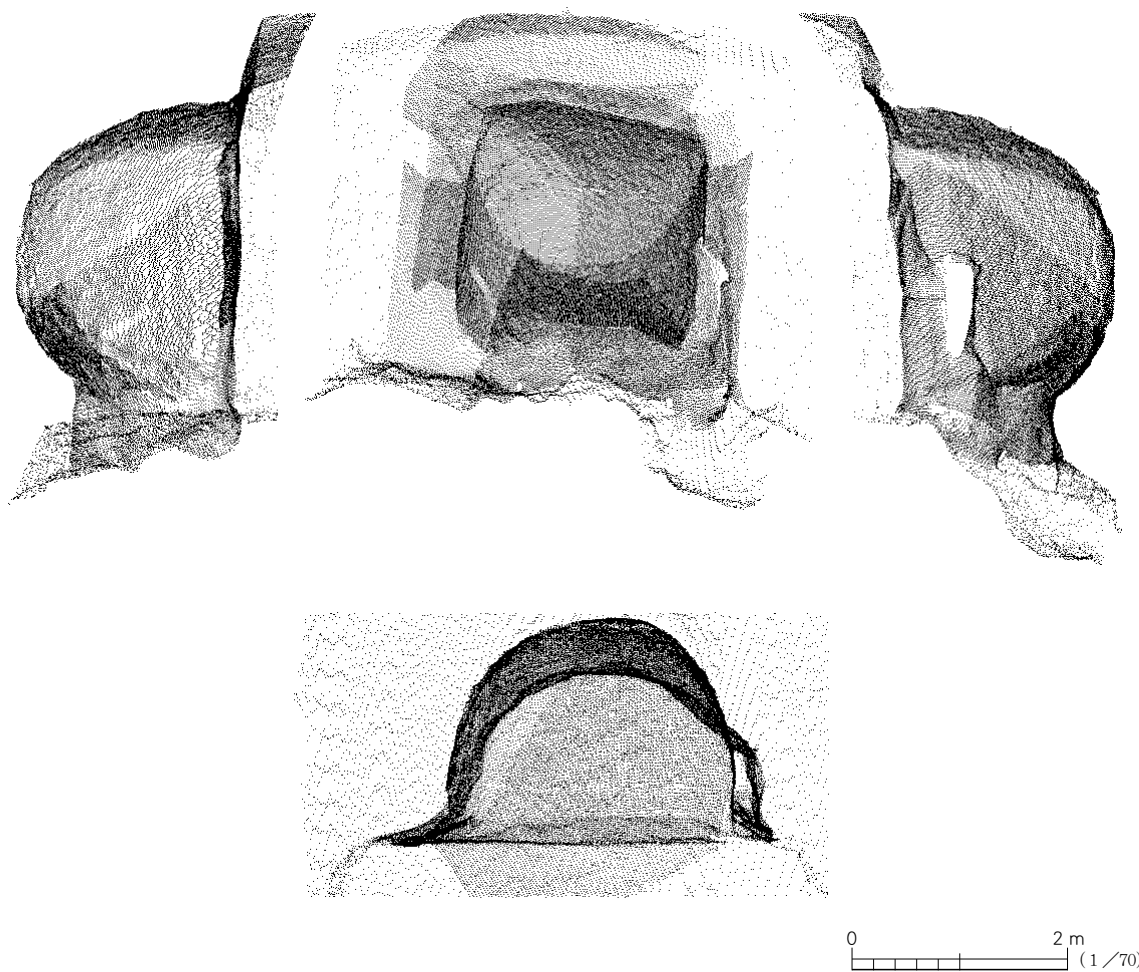


図20 6号横穴墓レーザー計測図

5・6号横穴墓は、遺物の出土がないため同時期に構築されたものか、時期差があるものなのかは判断できなかった。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土がないため、時期の特定はできないが概ね7世紀ごろと考えている。

7号横穴墓

遺 構 (図21・22, 写真15・16)

位 置 7号横穴墓は、調査区崖面の中央付近、Z38グリッドに位置する。東側3.3mに6号横穴墓、西側2.8mに8号横穴墓が隣接する。

今回調査した横穴墓の中では中段の並びに位置しており、8号横穴墓とほぼ同じ標高に構築されている。なお、本横穴墓の上側には横穴墓は構築されておらず、下側2mには、後世の削平によって崖面に大きな穴が開けられている。

堆積土 横穴墓は開口しており、締まりのないにぶい黄褐色土が、10~20cmの厚さで堆積してい

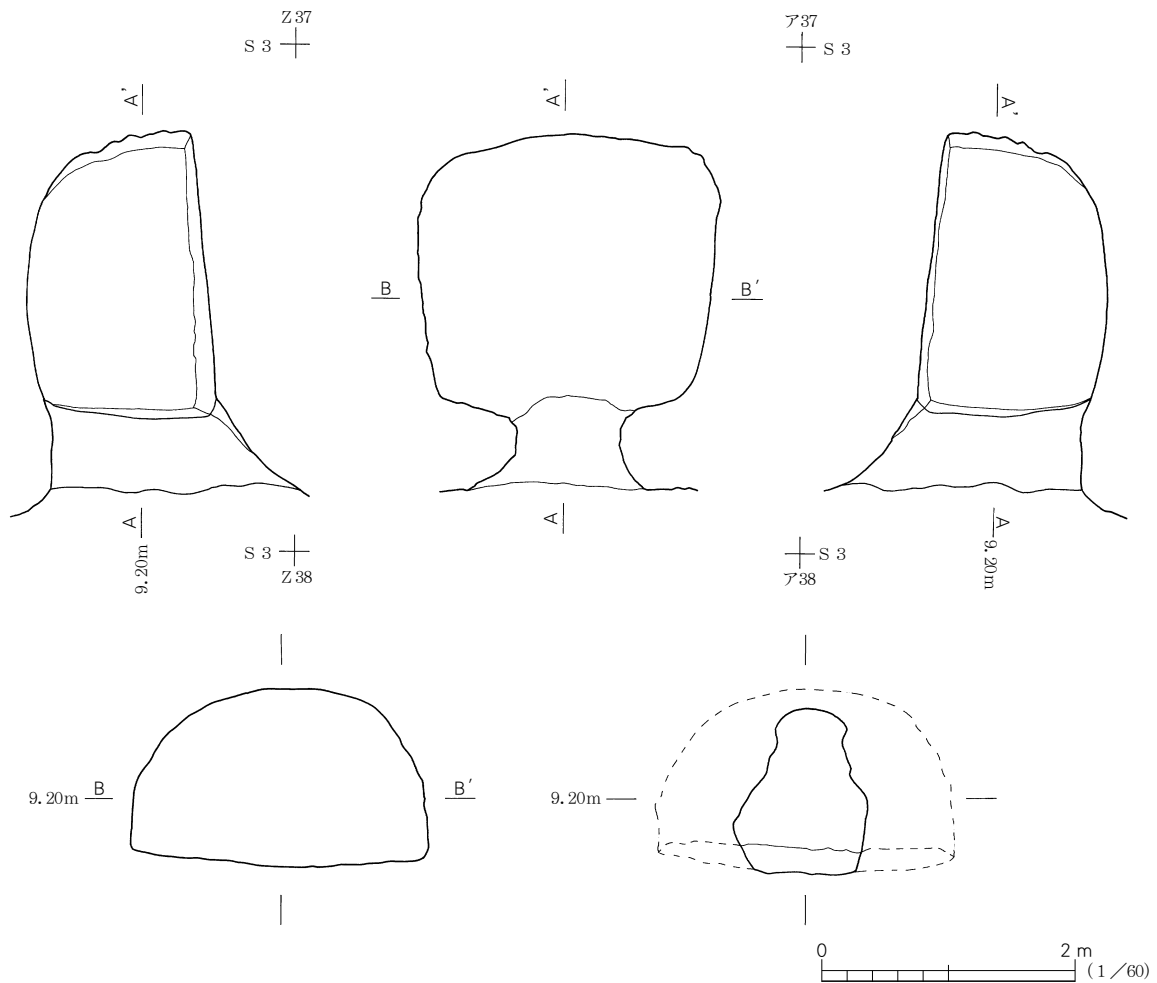


図21 7号横穴墓

る。堆積土中には、剥落した壁面の細片を大量に含んでいる。

床面上には筵が敷いてある状況から、後世に何らかの形で横穴墓を再利用したと考えている。

玄室 床面の平面形は、東西2.3m×南北2.2mの隅丸方形に近い形状を呈し、床面の四隅は丸みを持っており、前壁の床面幅が2m、奥壁の床面幅が2.35mとやや奥壁側の幅が広い。

床面に溝等の施設は構築されておらず、奥壁の床面幅の midpoint と前壁の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、ほぼ南北方向である。

床面はほぼ平坦であるが、床面標高は奥壁で8.8m、玄門付近8.6mと、比高差が20cmで奥壁から玄門へ向かって緩やかに傾斜している。

玄室の立面形は、天井が平坦なドーム型を呈し、明瞭な変換点を持たずに壁面から天井へとつながっており、天井の最大高は玄室中央で1.45mを測る。

床面の工具痕は奥壁付近にのみ認められた。掘削の方向は、床面中央から奥壁に向かって削り出しており、工具痕の幅は7cmで、刃先は平形で、掘削の状態も平坦であり、床面から立ち上がる壁面の裾は、やや深く削り込んでいる。

天井や奥壁などは、風化による剥落が激しく明瞭な工具痕は認められなかった。

第1節 横穴墓

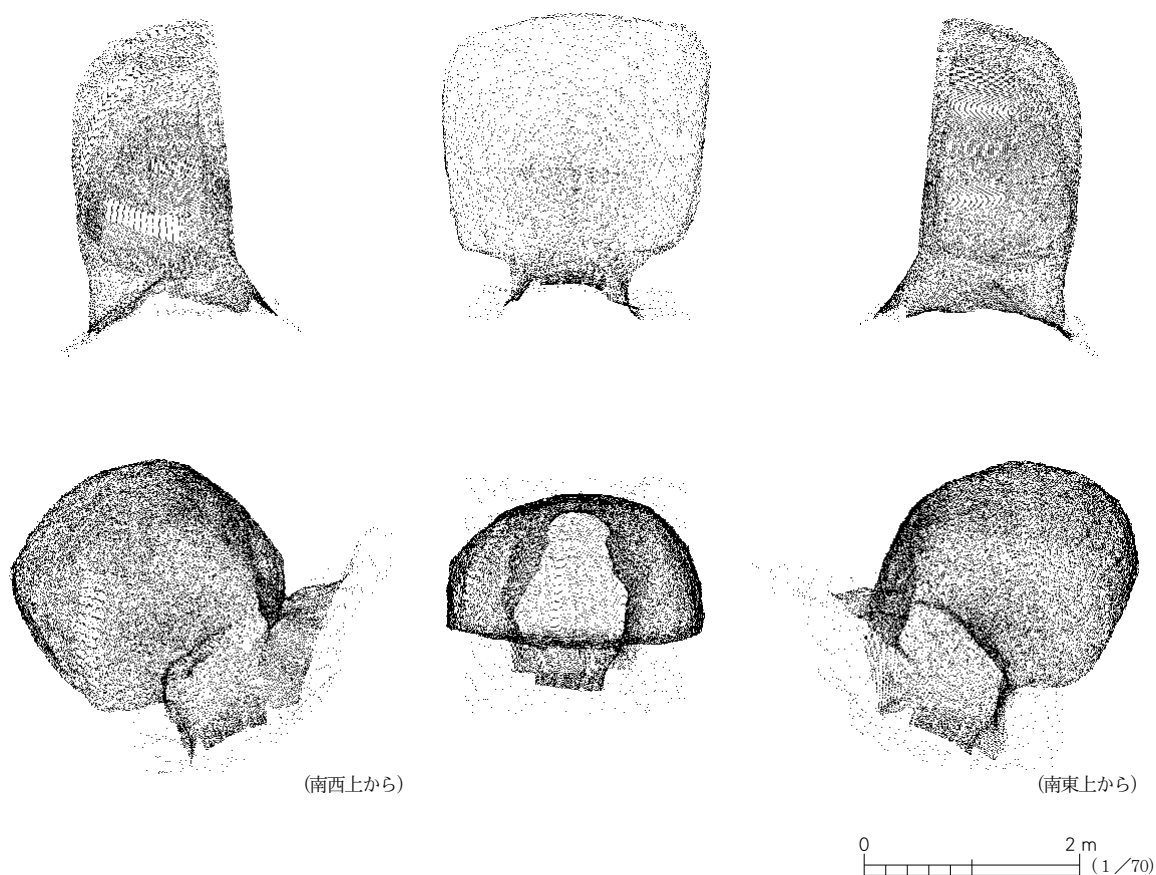


図22 7号横穴墓レーザー計測図

玄門 天井の崩落が激しく遺存状況は良くないが、立面形はアーチ型を呈する。現況での規模は、床面付近の幅が0.8m、高さが1.3m、奥行きが0.65mである。天井付近が崩落しているため、玄室の天井との比高差は20cm程度となり、玄門の天井は前壁から明確な稜線を持たずに緩やかに玄室の天井へとつながる。

玄門の床面は崩落しているため、玄室内の床面から急激に落ち込み、崖面へとつながる。このため、閉塞に関連する施設などは確認できなかった。

羨道部等は、崩落が激しいため全く遺存しておらず、崖面にも痕跡が認められない。奥壁から羨道部付近までの全長は、周囲の崖面の状況などから判断して3mを超える。

まとめ

7号横穴墓は、羨道部などが崩落しており、全体像をうかがい知ることができない。特に玄門の天井の崩落が大きいため、玄室の天井と玄門の天井は、明確な変換点を持たずにつながる状況を呈している。

玄門の規模は、遺存状況などから他の横穴墓と同じような1m程度の高さを持つのではないかと推測される。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土がないため、特定はできないが概ね7世紀と考えている。

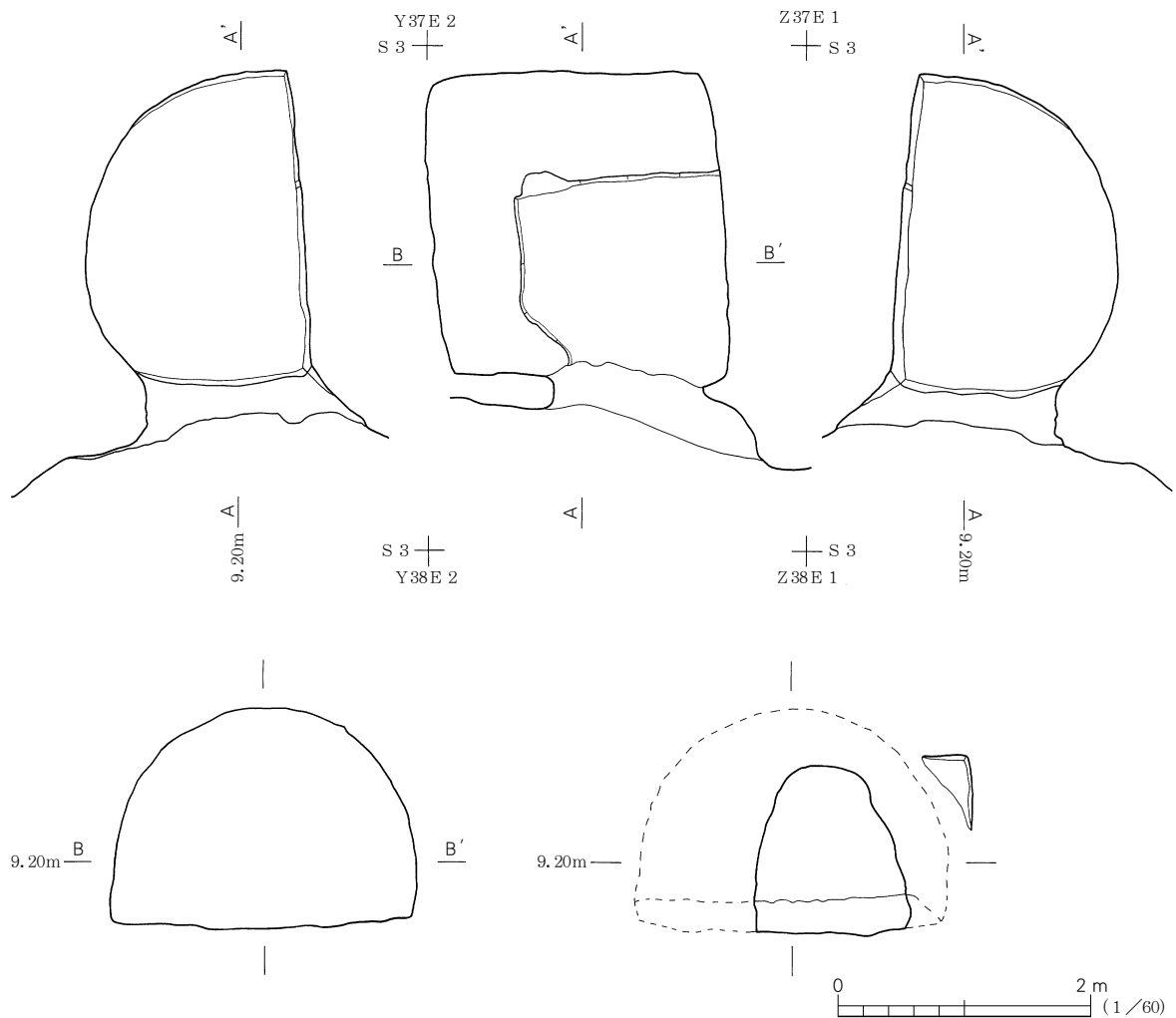


図23 8号横穴墓

8号横穴墓

遺 構 (図23・24, 写真17・18)

位 置 8号横穴墓は、調査区崖面の中央付近、Y37・38、Z37・38グリッドに位置する。東側2.8mに7号横穴墓、西側18.5mに9号横穴墓が位置する。

今回調査した横穴墓の中では、中段の並びの一番西側に位置し、7号横穴墓と床面標高がほぼ同じである。また、本横穴墓と9号横穴墓までの間には横穴墓は構築されていない。

堆積土 横穴墓は開口しており、締まりのないにぶい黄褐色土が8～10cmの厚さで堆積している。堆積土中には、剥落した壁面の細片を多量に含んでいる。

なお、床面には藁が敷いてある状況から、後世に何らかの形で横穴墓を再利用したと考えている。

玄 室 床面の平面形は、東西2.3m×南北2.4mの隅丸方形に近い形状を呈し、床面には棺座が構築されており、奥壁の床面幅の中心と前壁の床面幅の中心を結んだ中軸線は、やや東側に傾く。

第1節 横穴墓

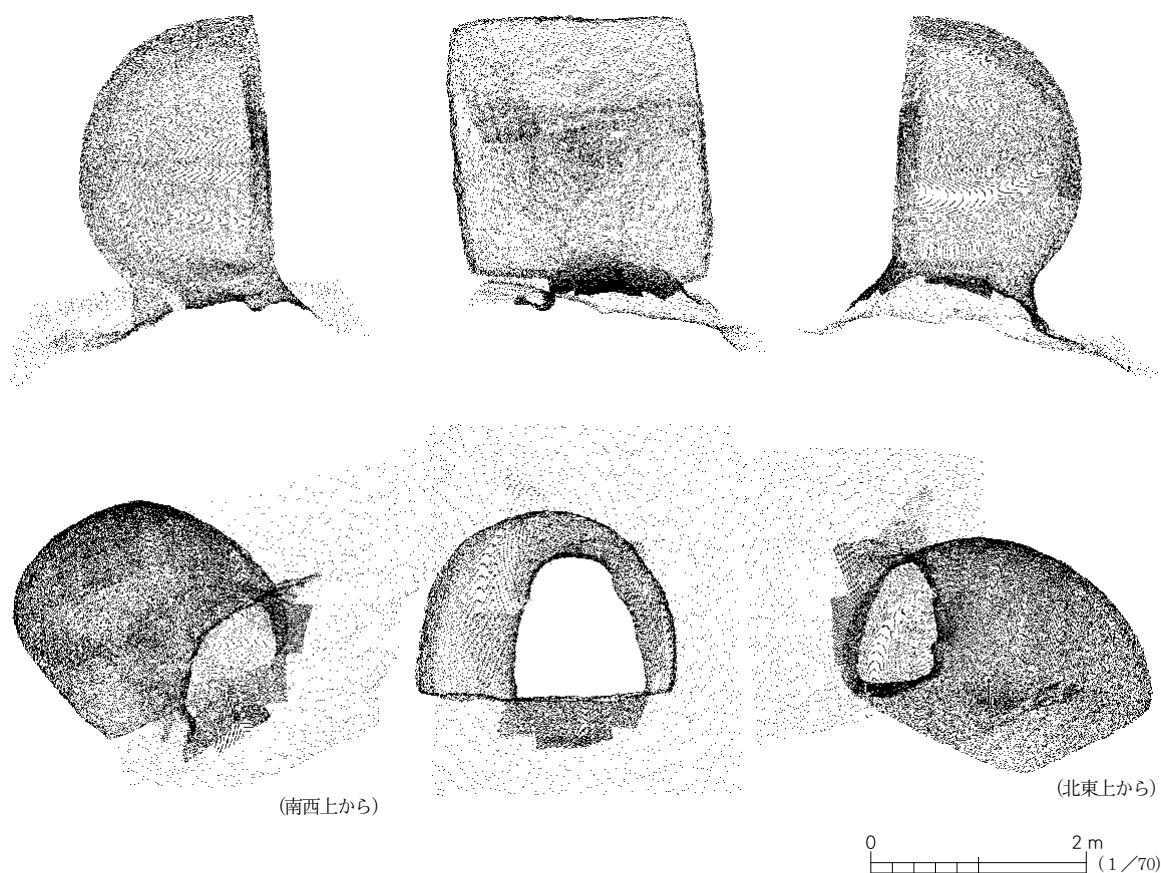


図24 8号横穴墓レーザー計測図

床面はほぼ平坦であるが、床面標高は奥壁で8.8m、玄門付近が8.6mと、比高差が20cmで奥壁から玄門に向かって傾斜している。

床面では、奥壁から0.9mで東西方向、西壁から0.7mで南北方向に4～5cmの段差が削りだされており、構築状況から棺座と判断した。

玄室の立面形はドーム型を呈し、明瞭な変換点を持たずに壁面から天井へとつながっており、天井の最大高は玄室中央で1.75mを測る。

床面の工具痕は奥壁付近のみ認められ、掘削の方向は床面中央から奥壁に向かって削り出していた。工具痕の幅は5cmで、掘削の状態が平坦であることから、刃先は平形の工具を使用したと推定される。

天井は風化による剥落が激しく、明瞭な工具痕は認められなかった。工具痕が認められたのは、奥壁は中央より下側で、東西の壁では奥壁側の1/3のみである。いずれも工具痕の幅や刃先及び掘削の状況は確認できなかった。

玄門 玄門は崩落が激しいため、正確な規模は明確ではないが、立面形はアーチ型を呈し、現況での規模は、床面幅1.2m、高さ1.3m、遺存する奥行き0.27mである。

玄門は、玄室の床面奥壁幅の midpoint と床面前壁幅の midpoint を結んだ中軸線より東側に構築されている。玄門の床面は崩落しており、閉塞に伴うような溝等の施設は検出できなかった。また、玄室の床面も玄門付近に崩落がみられる。

羨道部 本横穴墓の玄門から東上方の崖面に削り出された段差があり、その規模は幅が0.4m、高さが0.6m、奥行きで8cmを測り、平面形が三角形を呈している。玄門からの距離や高さなどの位置関係や遺存状況から羨道部が崩落をまぬがれた箇所と判断した。

玄門などの遺存状況から推定できる羨道部の断面形は、長方形を呈すると考えられ、その規模は幅が2.2m、高さが1.45mと推定される。

奥壁から羨道部までの横穴墓の全長は、周囲の崖面の状況から判断して3mを超える。

ま と め

8号横穴墓は、玄門の崩落もあり閉塞部などの詳細は不明であるが、崖面に遺存している羨道部の一部により、羨道部の断面形は長方形を呈するものであると推測される。

他の横穴墓と比較すると、玄門が玄室の中軸線から東側にずれて構築されている特徴を持つのは、本横穴墓と4号横穴墓である。

床面に棺座が構築されているのは、形態に違いはあるが、本横穴墓と1号横穴墓である。この棺座の形態の違いが、時期差によるものなのか或いは被葬者の相違によるものなのかは、遺物の出土もないために判断ができなかった。

横穴墓の時期については、時期の特定はできないが、概ね7世紀頃と推測される。

9号横穴墓

遺 構 (図25・26, 写真14)

位 置 9号横穴墓は、調査区崖面の西側、U37・38グリッドに位置する。東側18.5mに8号横穴墓、西側6.5mに10号横穴墓が構築されている。

今回調査した横穴墓の中では、一番下の並びに位置しており、8号横穴墓から本横穴墓までの間には、横穴墓は構築されていない。

また、横穴墓の位置する崖面下側が後世に削平を受けているため、本横穴墓は床面全体が消失し、東壁も崩落のため一部しか遺存していない。

玄 室 平面形は、遺存している壁面から東西2.6m×南北2.3mの隅丸長方形と推定される。奥壁幅の midpoint と前壁幅の midpoint を結んだ中軸線は、南北方向から大きく西側に傾く。

床面は削平のためなくなっており、東壁も崩落により奥壁に近い部分だけが遺存している状況である。東壁の遺存箇所では、天井や奥壁と接する部分を四角に削りだしているのが確認できた。

玄室の立面形は、天井や東西壁及び奥壁の遺存状況から平型を呈するものと考えており、奥壁の形状は、上辺が2.2m、下辺が2.6m、遺存の高さが1.1mの台形を呈している。

遺存している天井の規模は、東西2.2m×南北2.05mの長方形を呈しており、奥壁や西壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁の天井までの高さは遺存状況で1.1mを測る。

天井の南側中央付近で、下側にほぼ垂直に落ちる箇所がかろうじて遺存していた。

第1節 横穴墓

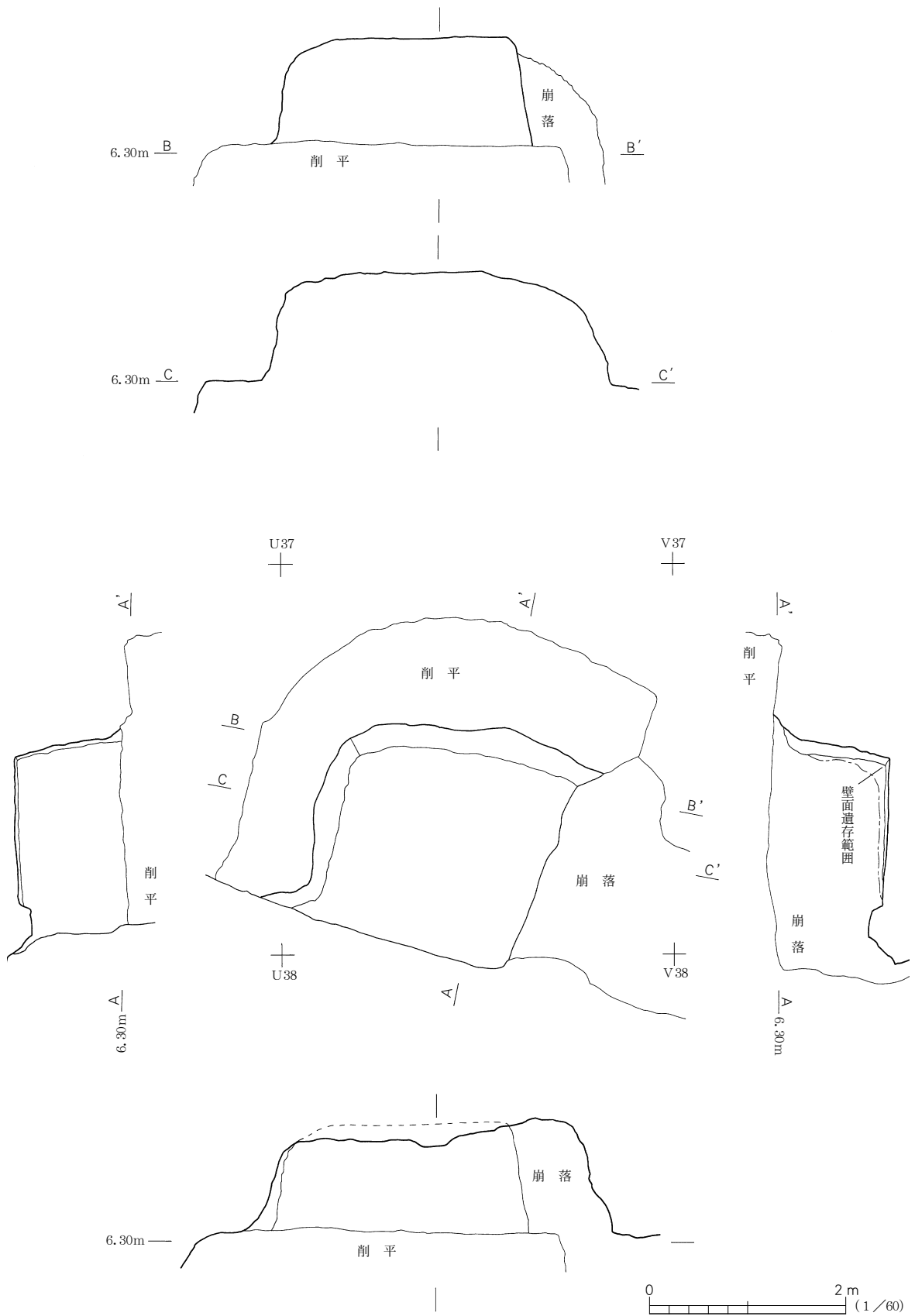


图25 9号横穴墓

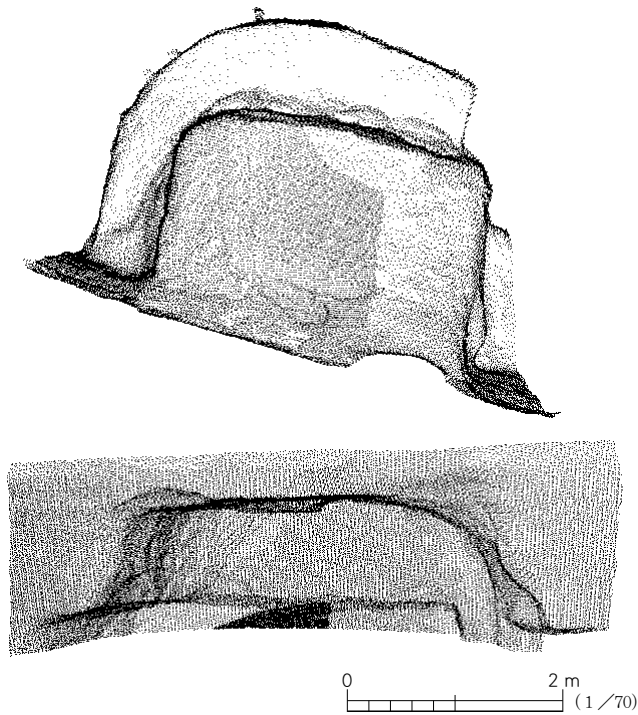


図26 9号横穴墓レーザー計測図

まとめ

9号横穴墓は、削平や崩落により、玄室の上半分しか遺存していないため、玄門や羨道部の形状や規模などをうかがい知ることができない。

また、天井や西壁及び奥壁の遺存状況から玄室の形態が、1・11号横穴墓と同様な平型を呈する横穴墓であると推測される。

横穴墓の時期については、遺物の出土がないため、時期の特定はできないが、概ね7世紀頃と推測される。

10号横穴墓

遺 構 (図27～29, 写真19・20)

位 置 10号横穴墓は、調査区崖面の西側、S36・37、T36・37グリッドに位置する。東側6.5mに9号横穴墓、西側5.4mに11号横穴墓が構築されている。

今回調査した横穴墓の中では、一番下の並びに位置している。なお、横穴墓の位置する崖面下側が後世に削平を受けているため、床面全体が消失している。

玄 室 平面形は遺存している壁面から推定すると、東西3.0m×南北2.8mの正方形に近い形状を呈しており、奥壁幅の midpoint と前壁幅の midpoint を結んだ中軸線は、南北方向よりやや西側に傾く。玄室の立面形は、家型を呈するもので、天井の形態が寄棟で梁行側に玄門がつく寄棟妻入りである。

その規模は、遺存の幅0.5m、天井までの遺存高0.15mを測り、遺存状況から前壁付近が崩落をまぬがれた箇所と判断した。

工具痕は天井や奥壁などの風化が激しいため、若干の遺存があるものの、工具痕の幅や掘削の状態などは確認できなかった。

玄 門 玄門は崩落が激しいため、正確な規模や形状については不明である。

前壁の遺存している位置や周囲の崖面の状況などから、推定できる玄門の奥行きは0.5mである。奥壁から玄門付近までの遺存状況から、横穴墓の全長は3mを超えるものと推測される。

第1節 横穴墓

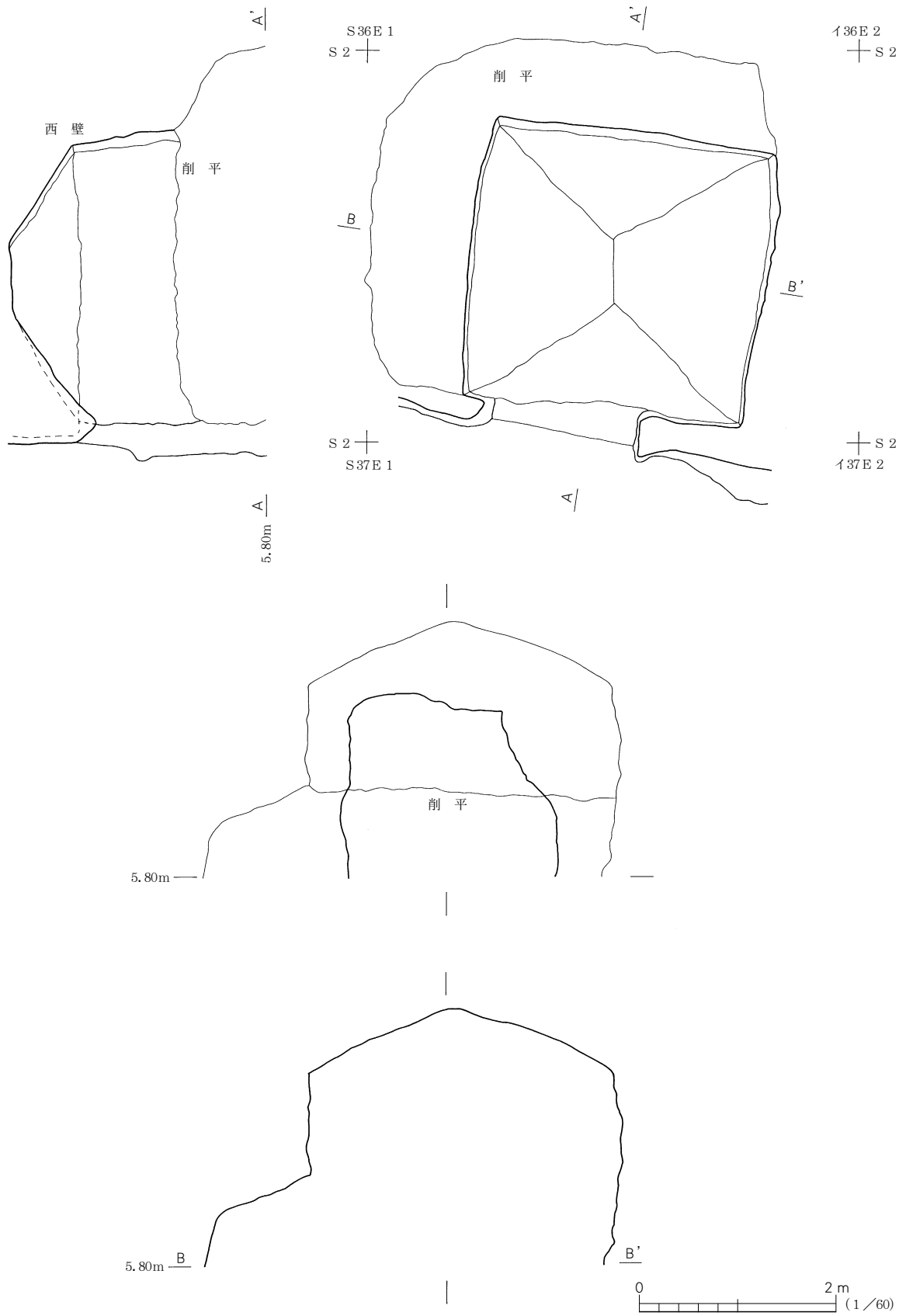


图27 10号横穴墓 (1)

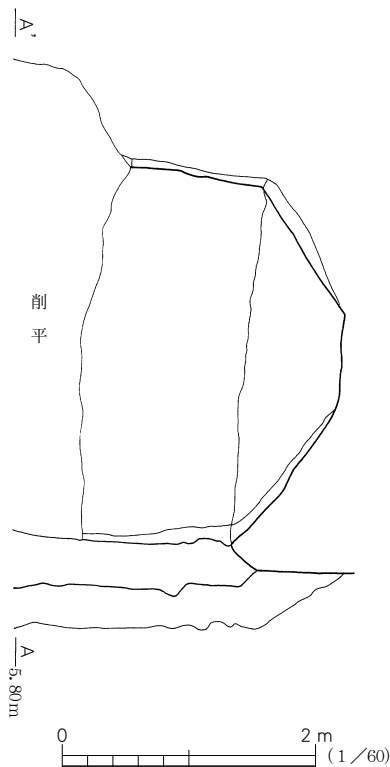


図28 10号横穴墓（2）

天井の大棟は、長さ0.55mを測り、玄室内のほぼ中心を通るが、その方向は玄室の中軸線よりやや南北方向にずれる。

遺存している壁面下部から天井の大棟までの高さは1.65m、西壁や奥壁の遺存高は1mを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

東壁は後世の削平によって、壁面が削平部分との段差を持たずに消失しているため、明確な遺存高は確認できなかった。天井と壁面の境界は、軒回りの溝などが削り貫かれていない。

天井の桁や梁、東西壁や奥壁が接する箇所は丁寧に削り出されている。

天井や壁面は、明瞭な工具痕は確認できなかったが、現況では天井や壁の隅及び軒回りに向かい、削りだされているのが認められた。

奥壁や東西壁に小さい穴があいているが、これは現代に物置として横穴墓を使用していた際に、あけたものであることが、聞き取り調査により判明した。

玄門 玄門は、後世の削平によって下側はなくなっており、周囲の崩落も激しいが、現状での規模は幅が2.0m、遺存している西壁と比較して推定できる遺存高は1m、奥行き0.4mを測る。玄門の西側上部の崩落が激しいが、東側上部の崩落はあまりひどくなく、遺存状況が四角い形状を呈しているため、推定できる玄門の断面形は長方形である。

玄門の構築位置は、玄室内の中軸線より西側にずれており、また、大棟の方向とも一致していない。奥壁から玄門付近までの遺存状況から判断すると、横穴墓の全長は3.5mを超えるものと推測される。

まとめ

10号横穴墓は、今回調査した中では唯一家型を呈するもので寄棟妻入りの形態である。床面が削平されているため、床面の施設をうかがうことはできないものの、天井付近の遺存状態が比較的良好である。本横穴墓は、玄室の平面形が正方形に近い形状からか、天井の大棟の長さが0.55mと短く構築されている特徴を持っている。

なお、調査区外のコンクリートで補強工事されていない東側崖面にも横穴墓を確認しており、本横穴墓とは形態が違い、寄棟平入りである。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土がないため、特定はできないが概ね7世紀と考えている。

第1節 横穴墓

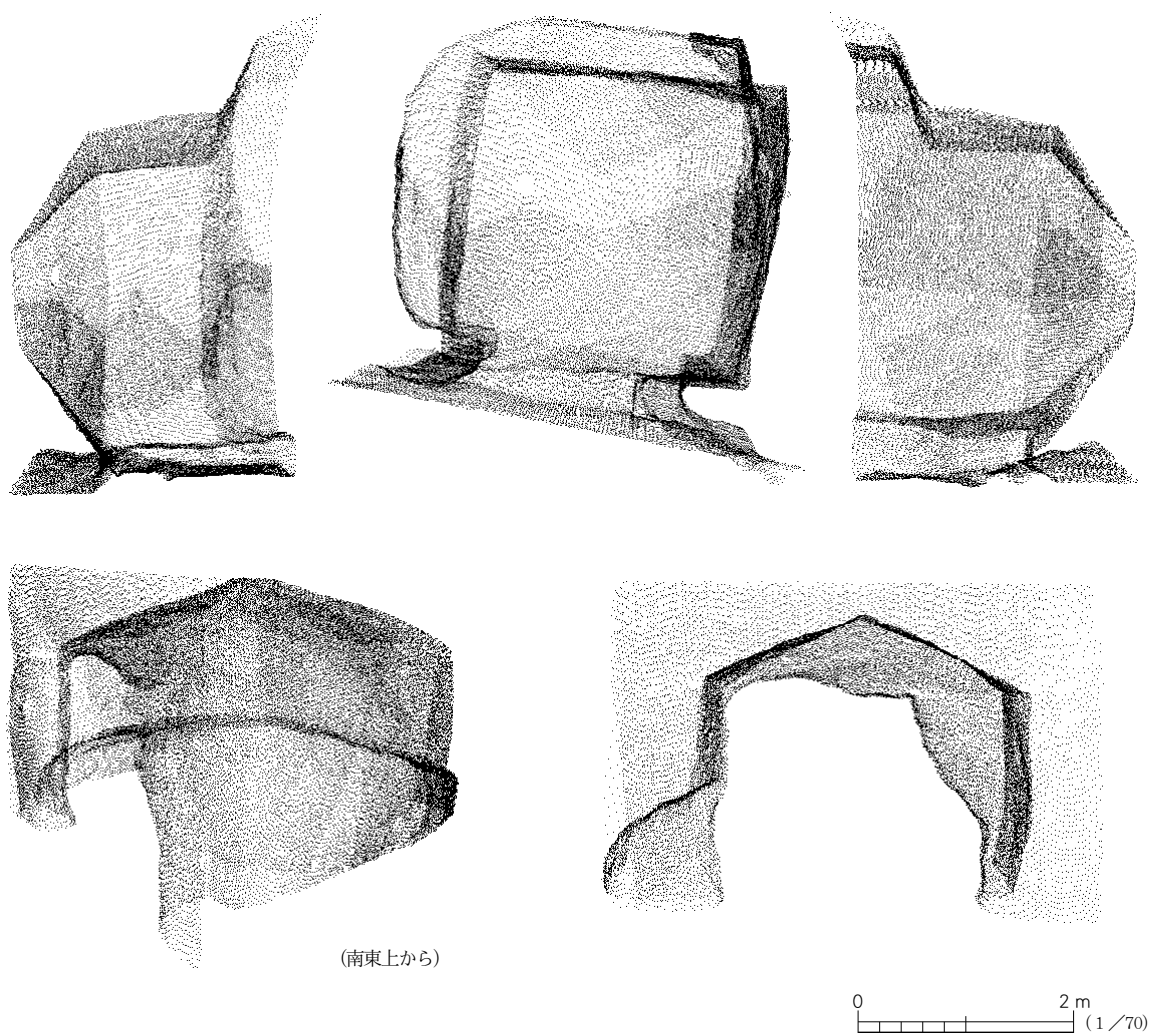


図29 10号横穴墓レーザー計測図

11号横穴墓

遺構(図30・31, 写真21・22)

位置 11号横穴墓は、調査区崖面の西側、R36・37グリッドに位置する。東側5.4mに10号横穴墓が構築されている。今回調査した横穴墓の並びとしては、一番下の列に位置している。

なお、調査区外西側の崩落している崖面では、横穴墓は確認できなかった。

堆積土 横穴墓は開口しており、締まりのない黄褐色砂質土が、層厚15~20cmで堆積している。堆積土中には、壁の剥落とみられる凝灰岩の小礫が含まれていた。

調査前の現況では、玄門の天井西側が崩落したとみられる50cm程度の礫が、堆積土上に転がっている状況であった。

玄室 床面の平面形は、東西2.1m×南北1.7mの隅丸長方形を呈し、床面にピットと溝2条が構築されている。

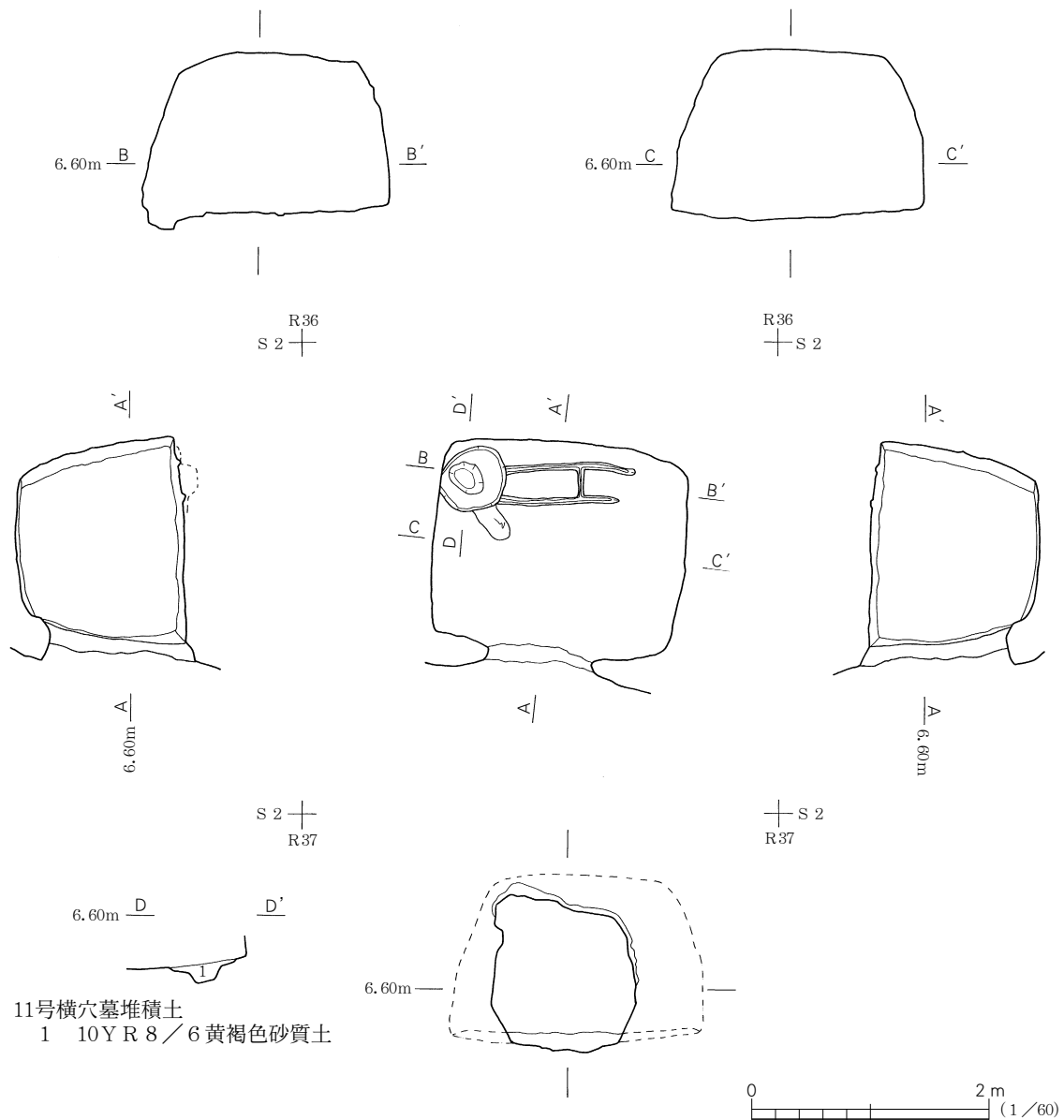


図30 11号横穴墓

奥壁の床面幅の midpoint と前壁の床面幅の midpoint を結んだ中軸線は、南北方向からやや西側に傾く。

床面の東西方向はほぼ平坦で、南北方向は床面標高が奥壁で6.25m、前壁で6.15m、比高差が10cmと奥壁から前壁にかけてわずかながら傾斜している。

床面に構築されているピットは、段差をつけて掘り込まれている。浅い掘り込みは、円形に近い形状を呈し、長軸60cm、短軸50cm、床面からの深さ3cmを測る。深い掘り込みは、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、長軸46cm、短軸24cm、床面からの深さ16cmを測る。このピットの南側にはなだらかな窪みがあり、その底面はピットへとつながる。

溝は2条検出されたが、その規模は奥壁側の溝が長さ110cm、幅5cm、深さ2cmで、玄室中央側の溝が長さ100cm、幅5cm、深さ3cmを測る。溝の断面形はともにU字形で、底面はわずかながら緩やかに西側に傾斜しており、ピットへとつながる。

第1節 横穴墓

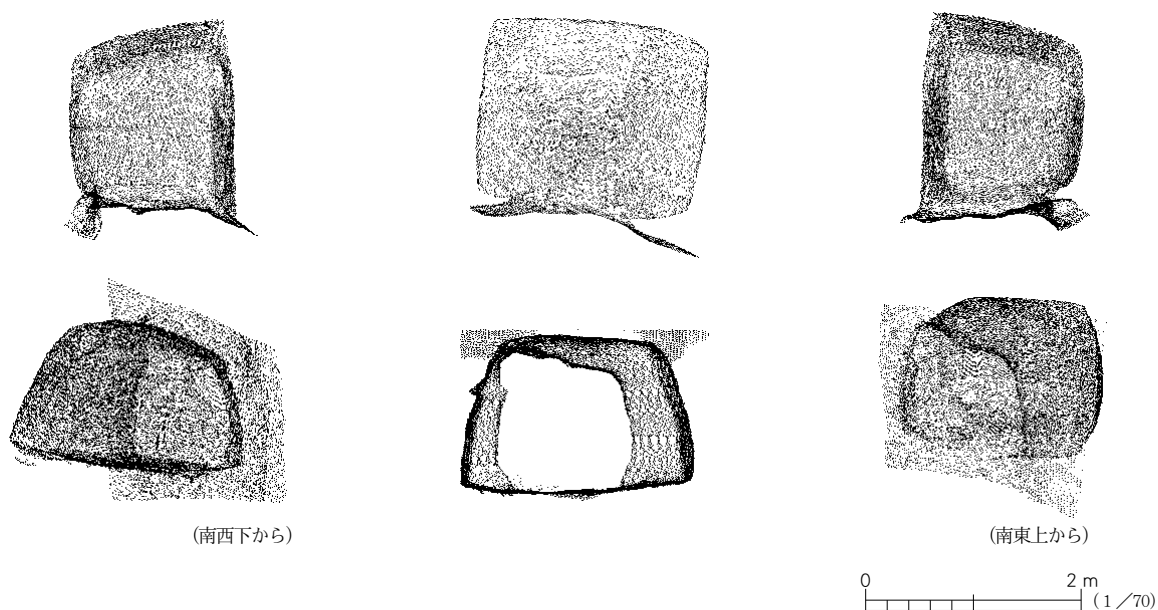


図31 11号横穴墓レーザー計測図

更にこの2条の溝は、床面中央付近で短い溝によってつながっている。

ピットおよび溝の堆積土は、やや締まりのある黄橙色砂質土で、ピット底面からは薄い炭化材が出土している。また、ピットの深い掘り込みの上面には、10cm大の丸い礫が覆い被さっていた。

玄室の立面形は平型を呈し、天井高は玄室中央で1.4mを測る。奥壁は上辺が1.45m、下辺が2.1m、高さが1.35mの台形を呈しており、東西の壁と同様にほぼ垂直に立ち上がる。

また、東西壁の奥壁に近い箇所で天井や壁の隅の方向に向かい、遺存状況がよくないものの、現況で幅7cm、刃先が平形の工具によると思われる痕跡を確認できた。

天井及び床面では壁面の剥落が激しく、工具痕は遺存していなかった。

玄門 崖面が崩落しているため、遺存状況はよくないが、現況での規模は、床面付近の幅0.95m、高さ1.2m、遺存の奥行き0.45mを測り、玄門の断面形は、西側上部が崩落しているものの遺存状況から、長方形を呈すると推測される。

玄門から羨道部にかけては、床面が崩落しているため、羨道部の詳細は不明である。奥壁から玄門付近までの遺存状況から判断すると、横穴墓の全長は3.5mを超えるものと推測される。

まとめ

11号横穴墓は、今回調査した横穴墓の中では、規模が一番小さい部類にはいる。

床面から検出されたピット及び溝は、溝底面の傾斜やピットを礫で蓋をするように覆っていた状況などから、排水を目的としたものと考えられる。

ピットと溝が、構築時の横穴墓に付随する施設なのかは、ピットの堆積土が玄室内に堆積している土とほぼ同じことから、後世に掘り込まれた可能性が強いと考えられる。

横穴墓の時期については、年代を決定づける遺物の出土もないため、時期の特定はできないが、概ね7世紀代と考えている。

第2節 その他の遺構と遺物

今回の調査は、横穴墓が構築されている崖面下の平坦地も併せて行った。崖面下側は後世の開削により、横穴墓と同規模の横穴が多くあけられている状況であった。

平坦面の凝灰岩層にもピット・土坑状の掘り込みなどを確認した。出土した陶磁器類などは近現代のものであり、聞き取り調査によって、崖面下側を馬小屋・作業小屋等に利用していた事がわかり、ピット等はこのような施設に伴う位置に掘り込まれていたことから調査対象から除いた。

平坦地に設定した基本土層の観察から凝灰岩層が急激に落ち込む箇所がみられ、現在の崖面から約1.5m離れた平坦面の変換点までは崖面が存在していたと推測される。

なお、本年度の試掘調査では、崖面から6mほど南に離れた6・7トレンチより、2～3m大の凝灰岩礫の下から土師器・須恵器が出土している。この凝灰岩は崖面が崩落した名残りと考えている。遺物は出土したものの、流れ込みの出土状況を呈していたため、本発掘調査には至らなかった。土師器では杯2点、須恵器では長頸壺の破片2点が出土している。

図32-1と図32-2の杯は、内外面とも摩滅が激しいため、調整は部分的にしか認められなかった。時期については5世紀後半と思われる。図32-3と図32-4の台付長頸壺は、接合はしなかったが、胎土が近似していることから同一個体と判断した。時期については7世紀代が考えられる。

試掘調査及び崖下の平坦地の発掘調査においても、横穴墓に関連した施設は検出されず、横穴墓構築時期を明確に判断できる遺物の出土はなかった。

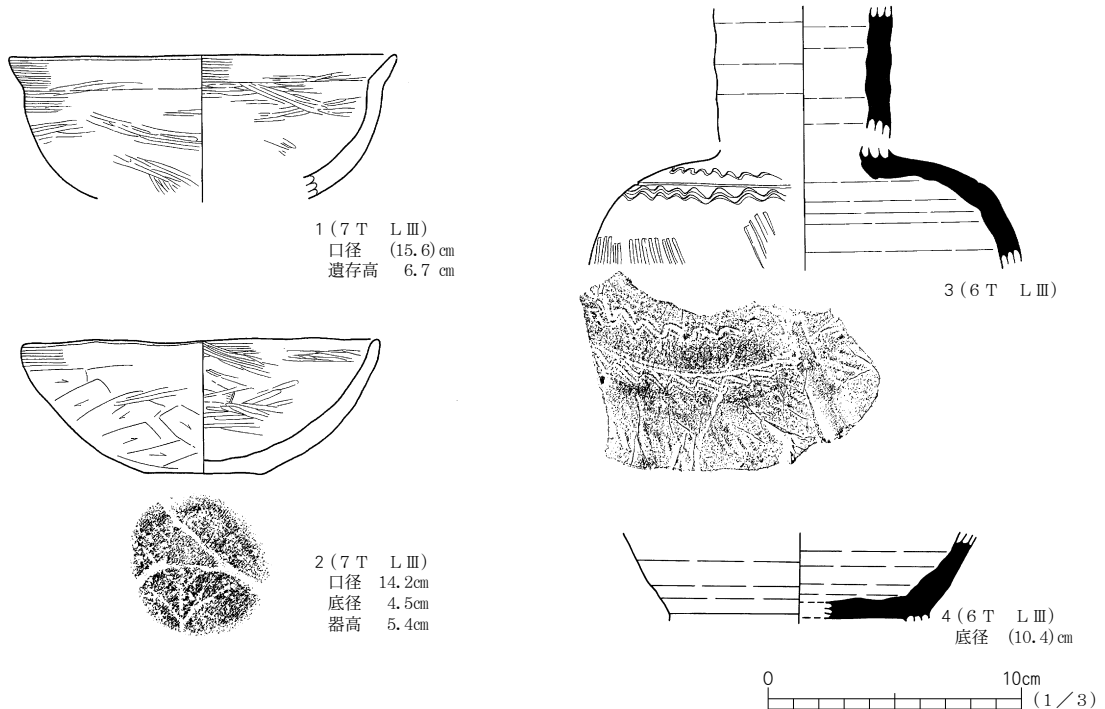


図32 試掘調査出土遺物

第3章 まとめ

相馬市内は古くから多くの横穴墓の存在が知られているが、発掘調査が行われた横穴墓は数が少ない状況である。このような中で一般国道6号相馬バイパス関連に伴う発掘調査が行われ、本笑和田横穴墓群の11基を調査した。

今回調査した全ての横穴墓は開口しているため、横穴墓に伴う遺物は、ガラス玉2点のみであり時期を特定するのは難しい現状であるものの、近隣の横穴墓と比較して構造上の特徴などをまとめていきたい。

横穴墓について

周辺の横穴墓において、発掘調査されたのは次の様な横穴墓群がある。相馬市西山に所在する表西山横穴群(『福島県遺跡地図』では西山横穴墓群A・B・C)は、丘陵の南斜面に三段に構築されており、約33基の横穴が検出され、26基が昭和30年代に調査された。玄室の形態は家型が3基で、他はアーチ型・ドーム型を呈している。家型の形態は寄棟平入りが1基、寄棟妻入りが2基の計3基であり、また、棺座等が認められるのは2基である。遺物は須恵器・土師器・勾玉・管玉・切子玉などで、30号横穴からは鏡が出土している。

相馬市馬場野に所在する福迫横穴群は、丘陵の南・西斜面にほぼ一列で点在しており、41基が確

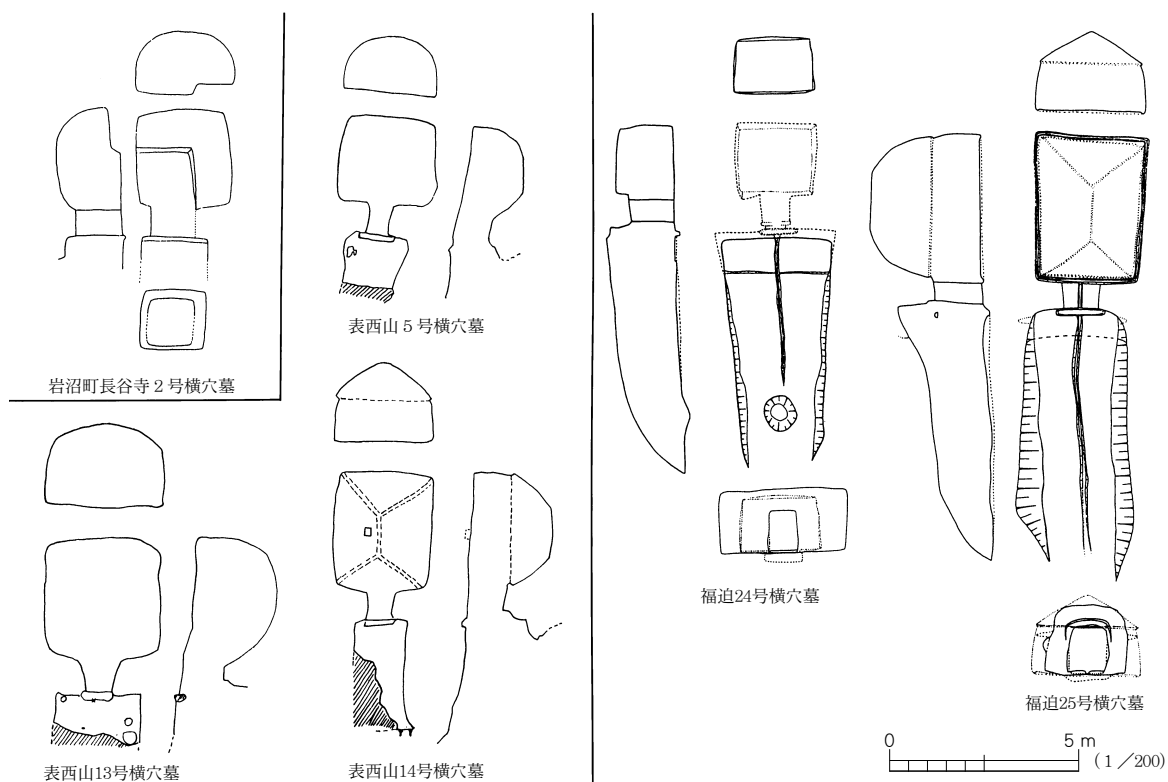


図33 近隣の横穴墓

認められ、昭和40年代に調査された。確認された玄室の形態は、家型が6基、アーチ型が6基、ドーム型が3基、箱型が2基である。遺物は主に須恵器・土師器であり、双竜環頭太刀柄頭が29号横穴より出土している。調査報告されたのは3基であり、寄棟平入りが1基、変形アーチ型が1基、寄棟妻入りが1基である。確認された家型の横穴墓では、寄棟妻入りの形態が多い事が報告書文中にある。

相馬市程田に所在する潜石横穴墓群は、通称高松山と呼ばれる丘陵上に位置しており、昭和40年代に調査された。遺物は土師器・須恵器・鉄製品・石製品などである。

本笑横穴墓群において調査した横穴墓の玄室の立面形は、平型が1・9・11号横穴墓の3基、アーチ型が6号横穴墓の1基、家型が10号横穴墓の1基、ドーム型が残りの6基である。

今までに調査された相馬市内などの横穴墓と本横穴墓の形態などを比較すると、本横穴墓群の1号横穴墓と福迫横穴群の24号横穴とは、玄室の形状及び羨道部幅が玄室幅より広い点など似かよった形態を示している。

本横穴墓群の2・3・4号横穴墓と表西山横穴群の5・13・14号横穴とは、閉塞部の形態が似かよっており、また、本横穴墓群の3・4・5号横穴墓の玄門と羨道部の境にみられるアーチ状の窪みは、福迫横穴群の23・25号横穴にも認められる。

福迫横穴群や表西山横穴群の家型の横穴墓は、軒回りに段差が見られる整正系の横穴墓であるのに対して、本横穴墓群の10号横穴墓や調査区外の寄棟平入りの横穴墓は、軒回りに段差がみられない点や玄室の形状が正方形からやや崩れるなどの違いがみられる。

また、本横穴墓群の1号横穴墓のような棺座を持つ横穴墓は、敷石があるなどの違いはあるが、鹿島町の江垂横穴群の8号横穴などがあり、本横穴墓群の8号横穴墓のような棺座を持つ横穴墓は、棺座の高さや構築位置に違いがあるが、宮城県岩沼町長谷寺の2号横穴の類例がある。

なお、本横穴墓群の2号横穴墓の天井にみられる稜線を描く様に削りだしている工具痕を持つ横穴墓は、近隣の横穴墓にも類例がなく対比資料に欠けるが、宝型や家型の玄室の天井形態を意識しているのではないかと考えられる。

横穴墓の時期については、出土した遺物が少ないため、明確な年代を割り出せない状況ではあるものの、相馬市内の横穴墓との比較から7世紀代の時期を考えている。

この横穴墓群を構築・利用した集落についてであるが、崖面南側の沖積地では古墳時代の周知の遺跡が近くに存在していない。平成12年度に調査した柴迫A遺跡調査報告は次年度以降となるが、検出された溝からは7世紀代の遺物が出土していることから、丘陵上に集落が存在していた可能性があるのではないかと考えられる。

柴迫古墳群との関連について

近年、西日本の九州や本州の中国地方に知られる斜面に位置する横穴墓と尾根上の墳丘との組み合わせが、関東以北にも波及していることが言われており、調査において横穴墓のみでなく、横穴墓が位置する丘陵全体を横穴墓と関連づけて調査・研究することが指摘されている。

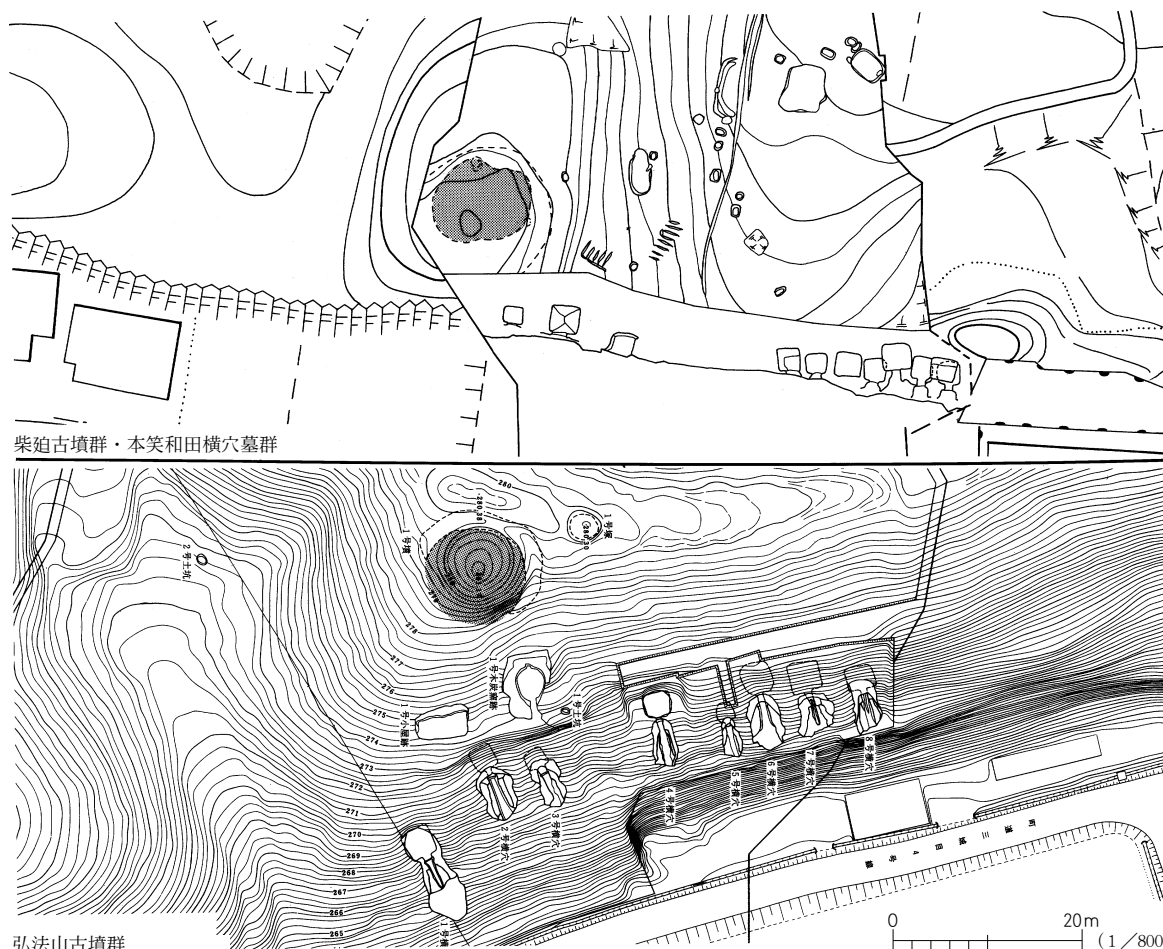


図34 柴迫古墳群・本笑和田横穴墓群，弘法山古墳群遺構配置図

矢吹町の弘法山古墳群も横穴墓群が位置する斜面の丘陵上に墳丘と塚が存在する。1号墳の周溝と墳丘東南部から遺物が出土しており、遺物の時期が横穴墓群との併行関係が確認されたので、横穴墓群の丘陵にある墳丘を後背施設としてとらえている。

本横穴墓群をみると、昨年度から引き続き調査した柴迫古墳群は、本横穴墓群が位置する崖面の丘陵上に位置する。詳細な報告は次年度以降となるが、調査において主体部等の施設がなかったため、1号塚とした遺構があり11号横穴墓のほぼ真上に位置する。なお、塚の名称については、横穴墓に伴う墳丘かどうかは明確な基準がはっきりしない点や時期を特定できる遺物の出土もなかった点から調査時に用いた名称を使用している。

柴迫古墳群の1号塚は調査時点で東側半分が削平されており、西側の裾部は調査区外になるため全体の概要をとらえることができなかった。塚の裾部には溝などは検出されず、塚を構築している盛土からは土師器の細片が数点出土しているだけなので、塚の構築時期や性格を明確にすることはできなかった。

また、1号横穴墓のほぼ真上にも塚状の高まりを確認できたが、調査区外のため北西側の裾部のみ調査を行った。その結果、後世の畑の造成によって、大きく削平されていることがわかり、遺物の出土もないため性格を確定するには至っていない。。

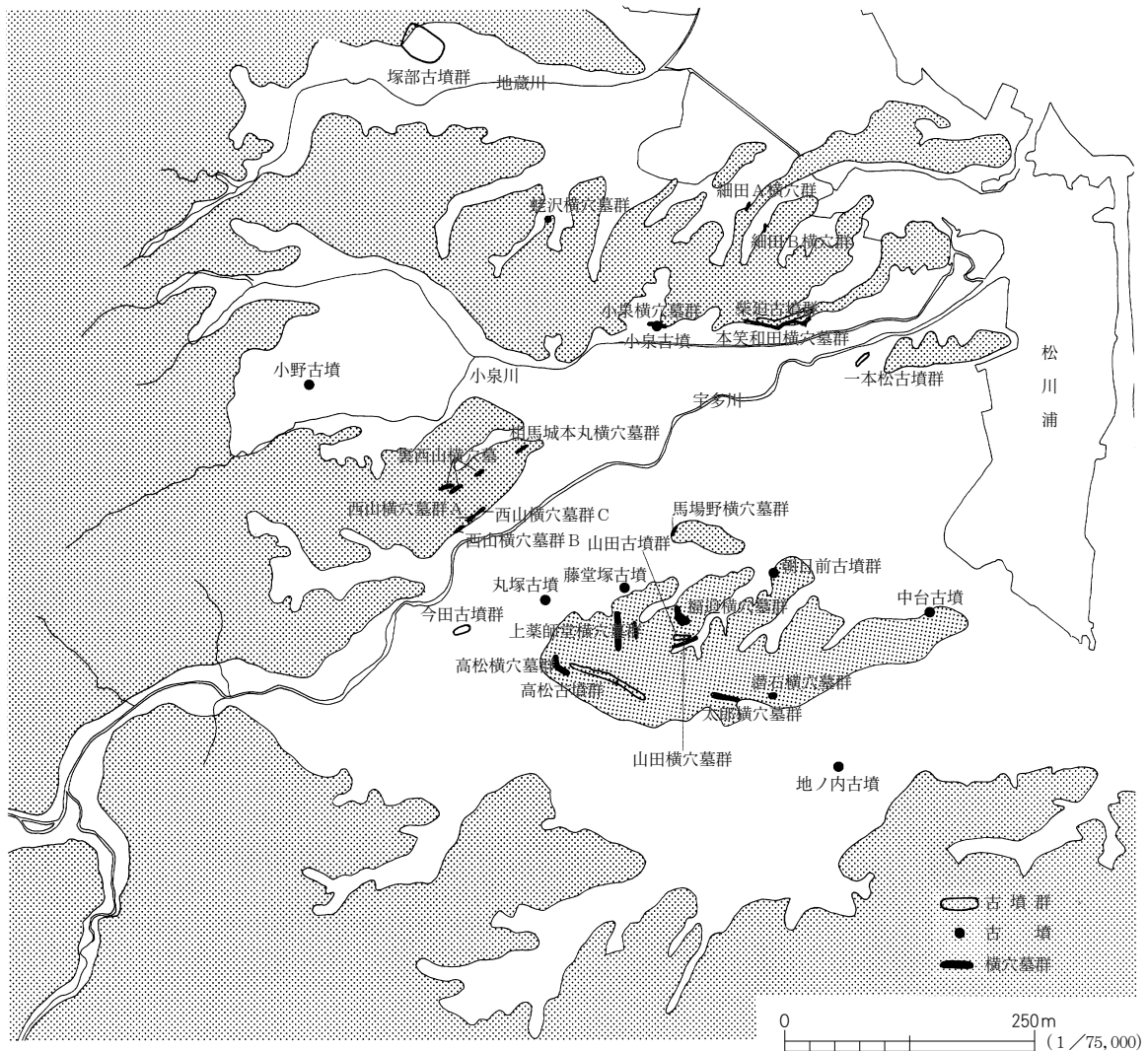


図35 周辺の古墳分布図

以上のような点から、弘法山古墳群と同じように、柴迫古墳群の1号塚を本横穴墓群の後背施設としてとらえることは、現時点では難しい現状であると考えている。

横穴墓の分布について

相馬市内における横穴墓群の分布であるが、図に示したとおりに横穴墓が集中しているのが3箇所みられる。宇多川が流れる沖積地の中央部の福迫横穴群が位置する標高30~50mの通称高松山と呼ばれる丘陵と宇多川中流の表西山横穴群が位置する標高25~35m丘陵及び本横穴墓群が位置する小泉川北側の標高15~20mの丘陵である。

このように分布状況を見ると、沖積地中央にある丘陵に多く存在することや沖積地を流れる宇多川・小泉川沿いの南向きの斜面に横穴墓が構築されている。なお、高松山から沖積地を挟んだ南の丘陵には横穴墓が存在していない。

これと同じような分布が双葉町の前田川流域の沖積地にもみられ、河川北側の丘陵の南斜面に多く存在し、下流域の南側丘陵には横穴墓は構築されていない。

第3章 まとめ

また、隣の新地町や鹿島町の横穴墓の分布をみると、沖積地の北側丘陵の南斜面に点在しているのをうかがうことができる。

結 び

横穴墓11基の遺存状況が良好でないことや遺物の出土が少なかったために、周辺の横穴墓との比較だけにとどまったが、本横穴墓群・表西山横穴群・福迫横穴群の共通する特徴の一つとしてあげられているのは、寄棟平入りの家型と寄棟妻入りの家型及びドーム型の横穴墓が、一つの横穴墓群で共存していることである。特に福迫横穴群の23号横穴のような二棺座の形態は、仙台平野の横穴墓との関連性も指摘されている。

また、本横穴墓群と柴迫古墳群の塚との関連は、横穴墓群の丘陵上の後背施設としてとらえるかは明確にできなかったため、横穴墓が位置する丘陵を含めた今後の調査及び研究が期待される。

引用・参考文献

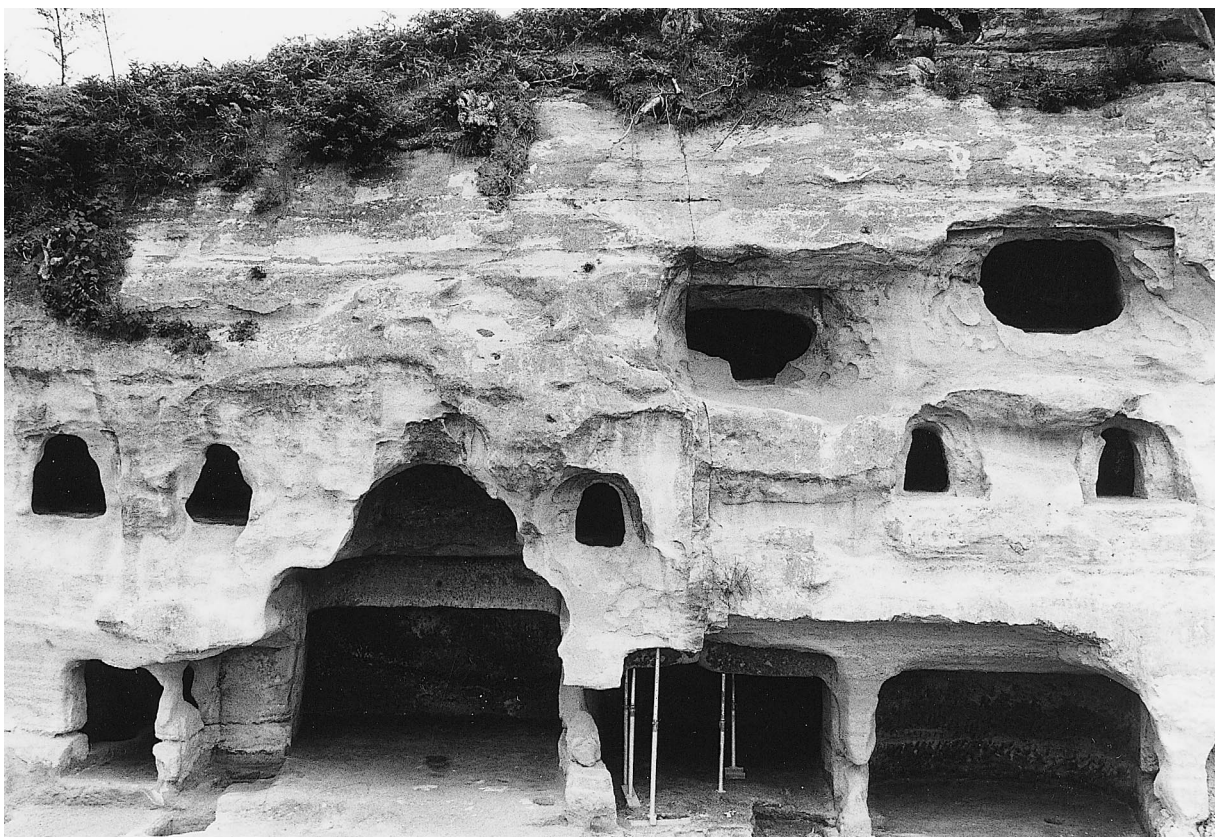
- 1968 佐藤 宏一 「宮城県岩沼町長谷寺横穴古墳群」『仙台湾周辺の考古学的研究 宮城県の地理と歴史』第3集 宮城教育大学歴史研究会
- 1969 『福島県史』第1巻 通史1
- 1969 『福島県史』第6巻 考古資料
- 1978 寺島 文隆 「相馬高校郷土室による相馬地方遺跡調査報告」『相馬市史』2各論1
- 橋本 博幸
- 1978 大迫 德行 他 『福迫横穴群Ⅰ』相馬市教育委員会・相馬高等学校郷土クラブ
- 1980 池上 悟 『横穴墓』考古学ライブラリー 6 ニュー・サイエンス社
- 1984 大竹 憲治 『標葉における横穴墓群の研究』福島県双葉町教育委員会
- 山田 廣
- 1989 『相双地区遺跡分布図2』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 1992 菊田 克紀 他 『一般国道6号相馬バイパス遺跡分布調査報告Ⅰ』福島県教育委員会
(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局
- 1992 松本 望・ 『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ』福島県教育委員会
能登谷宣康 他 (財)福島県文化センター・建設省磐城国道工事事務所
- 1996 古川 一明 「北辺に分布する横穴墓について」『甘粕健先生退官記念論集』
- 2000 松原 強 他 『福島県内遺跡分布調査報告6』福島県教育委員会
- 2000 福島 雅儀 他 「弘法山古墳群」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告8』福島県教育委員会
(財)福島県文化センター・福島県土木部
- 2000 池上 悟 『日本の横穴墓』雄山閣出版
- 2001 渡辺 富雄 他 『福島県内遺跡分布調査報告7』福島県教育委員会
- 2002 香川 慎一 他 『福島県内遺跡分布調査報告8』福島県教育委員会

写 真 函 版



1 遺跡全景

(南から)



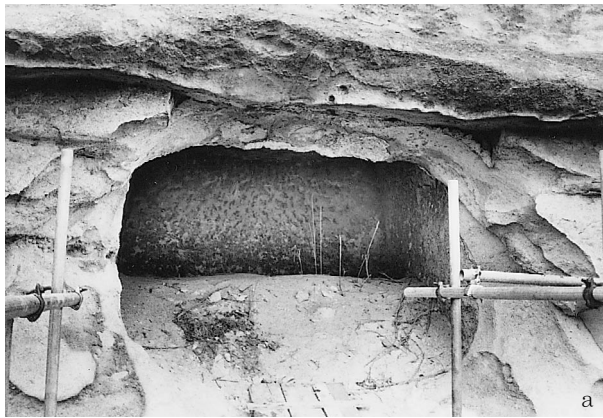
2 横穴墓集中部全景

(南から)



3 1号横穴墓全景

(南から)



a



b



c



d

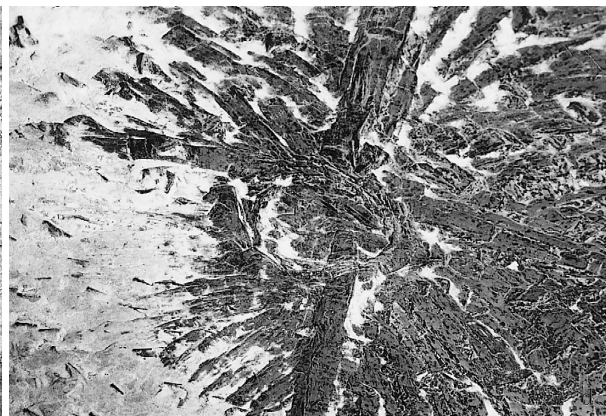
4 1号横穴墓細部

a 調査前現況 (南から) b 奥壁 (南から)
c 床面 (南から) d 東壁 (南西から)



5 2号横穴墓全景

(南から)



6 2号横穴墓細部

a 調査前現況 (南から) b 奥壁 (南から)
c 西壁 (南東から) d 天井工具痕 (北東から)



7 3号横穴墓全景

(南から)



a



b



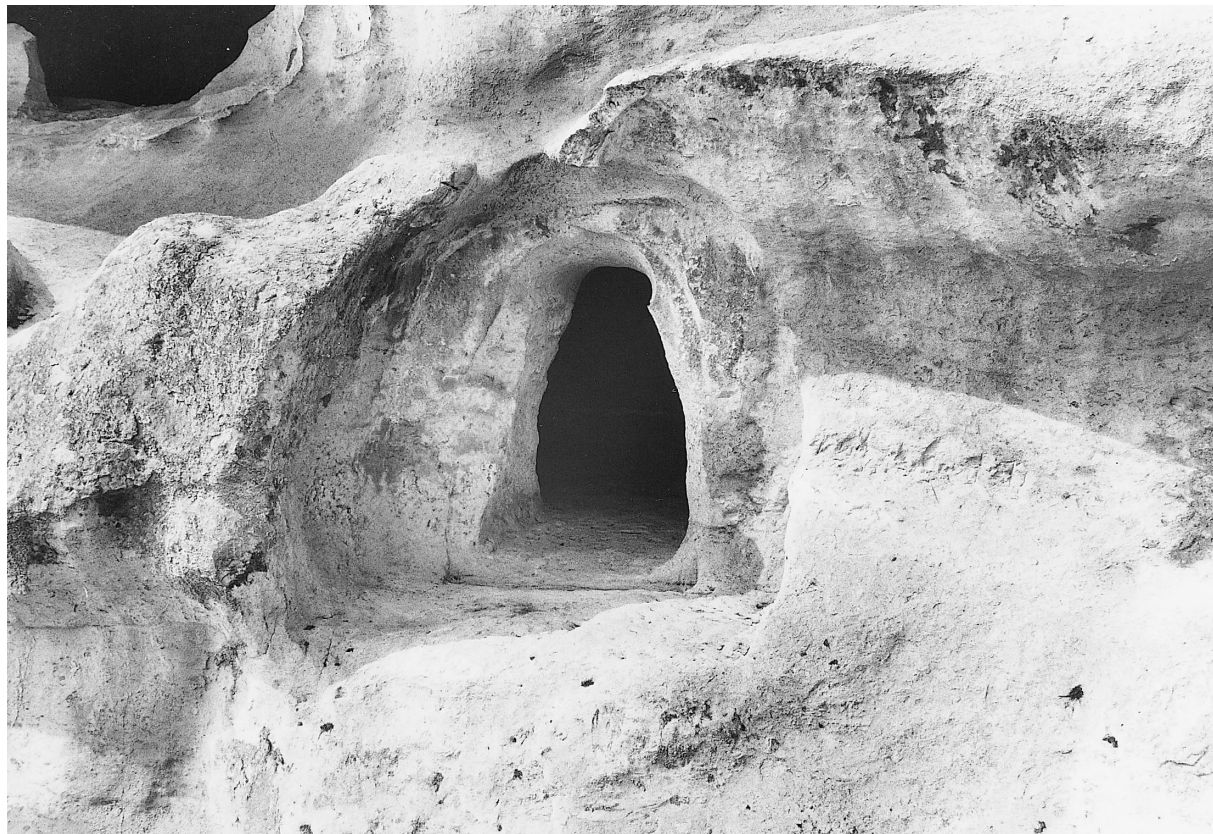
c



d

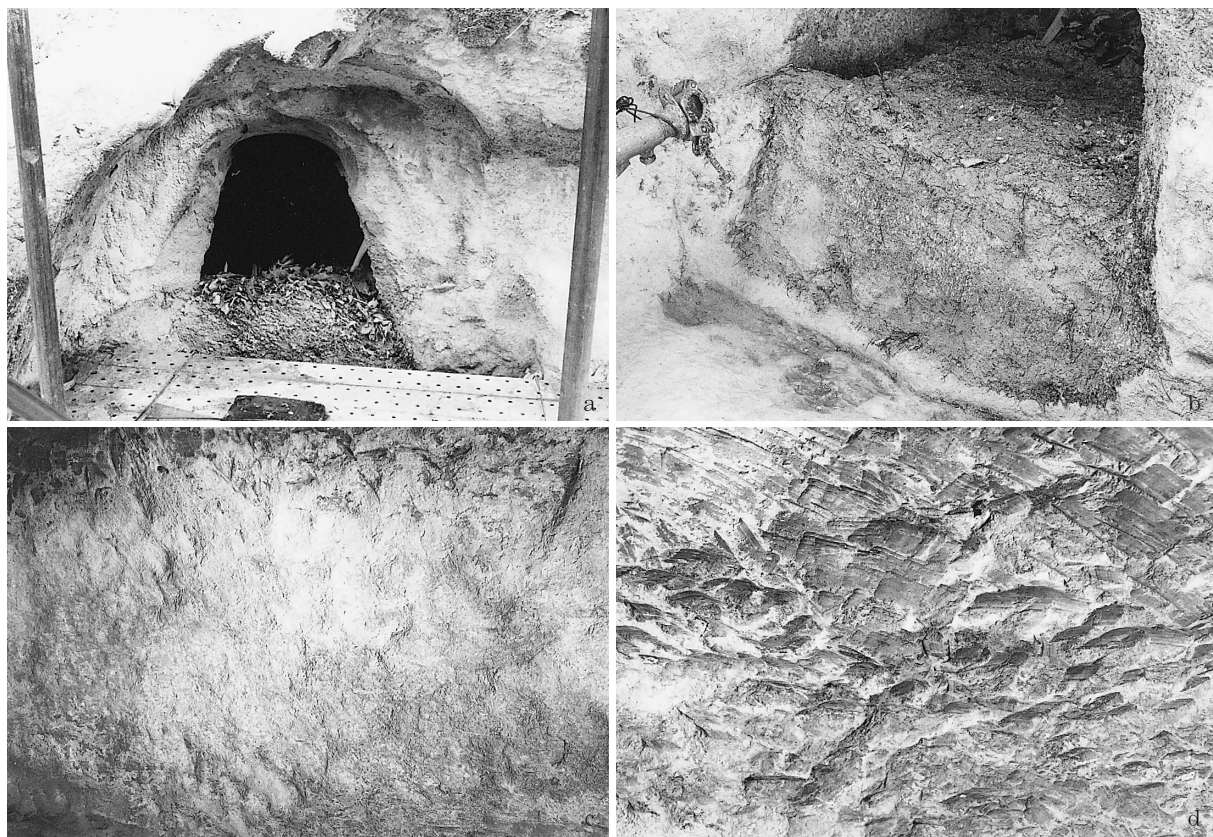
8 3号横穴墓細部

a 玄門部土層断面 (南西から) b 玄門部土層断面 (南西から)
c 天井 (南東から) d 床面工具痕 (南東から)



9 4号横穴墓全景

(南から)



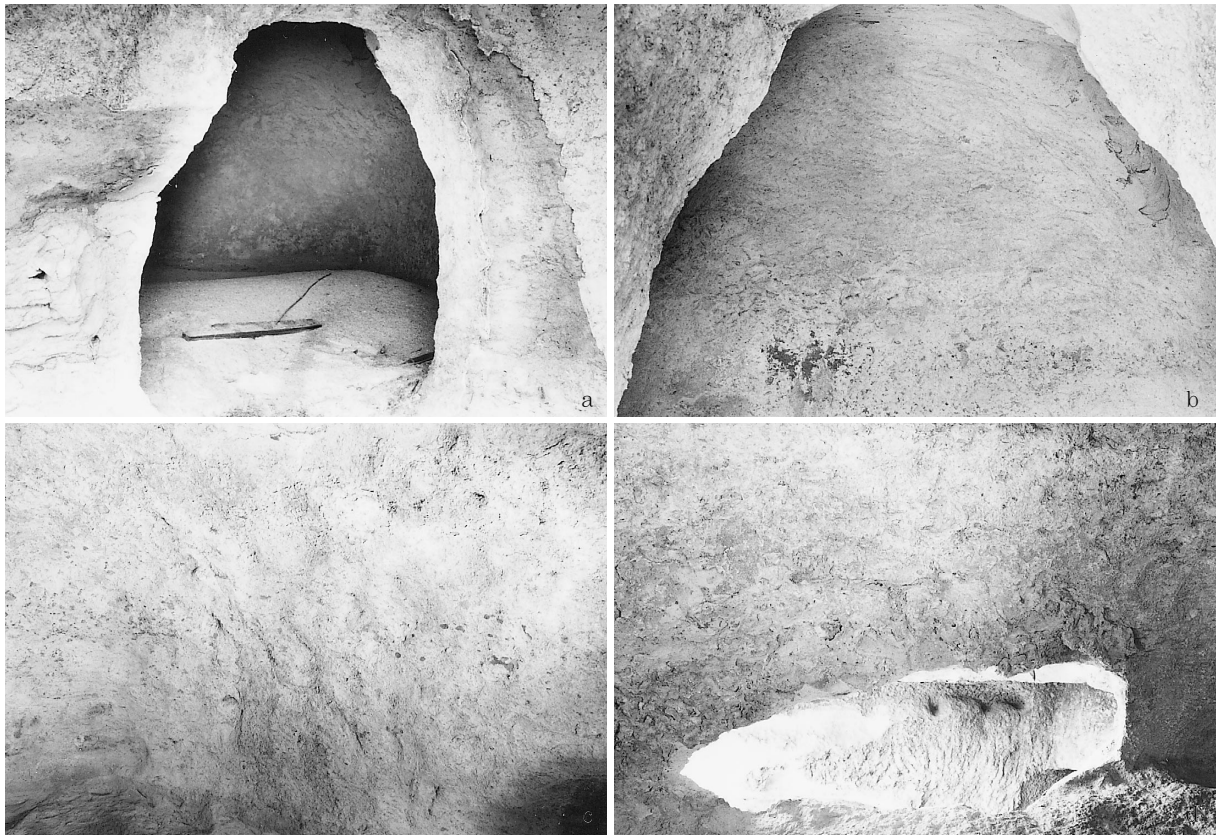
10 4号横穴墓細部

a 調査前現況 (南から) b 玄関部土層断面 (南から)
c 東壁 (南西から) d 天井工具痕 (南東から)



11 5号横穴墓全景

(南から)



12 5号横穴墓細部

a 調査前現況 (南から) b 天井 (南から)
c 東壁 (南西から) d 西壁 (南東から)



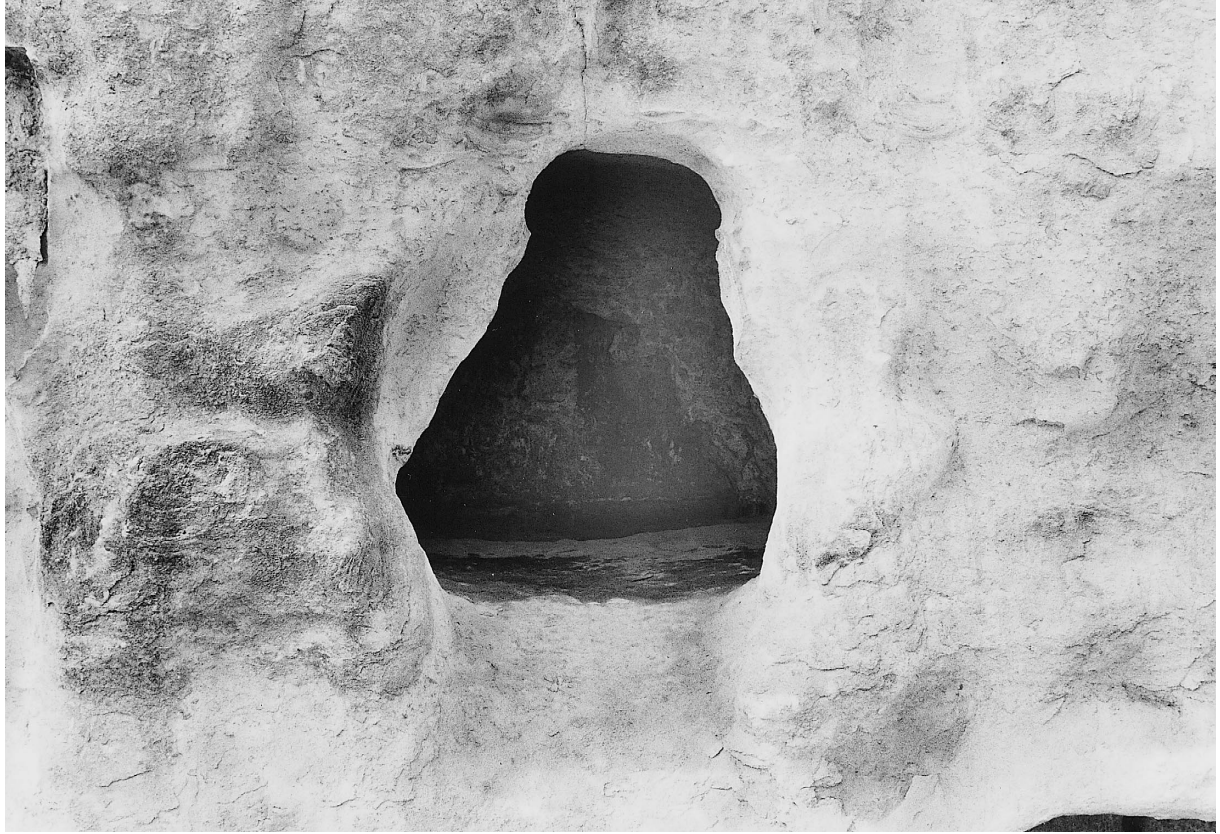
13 6号横穴墓全景

(南から)



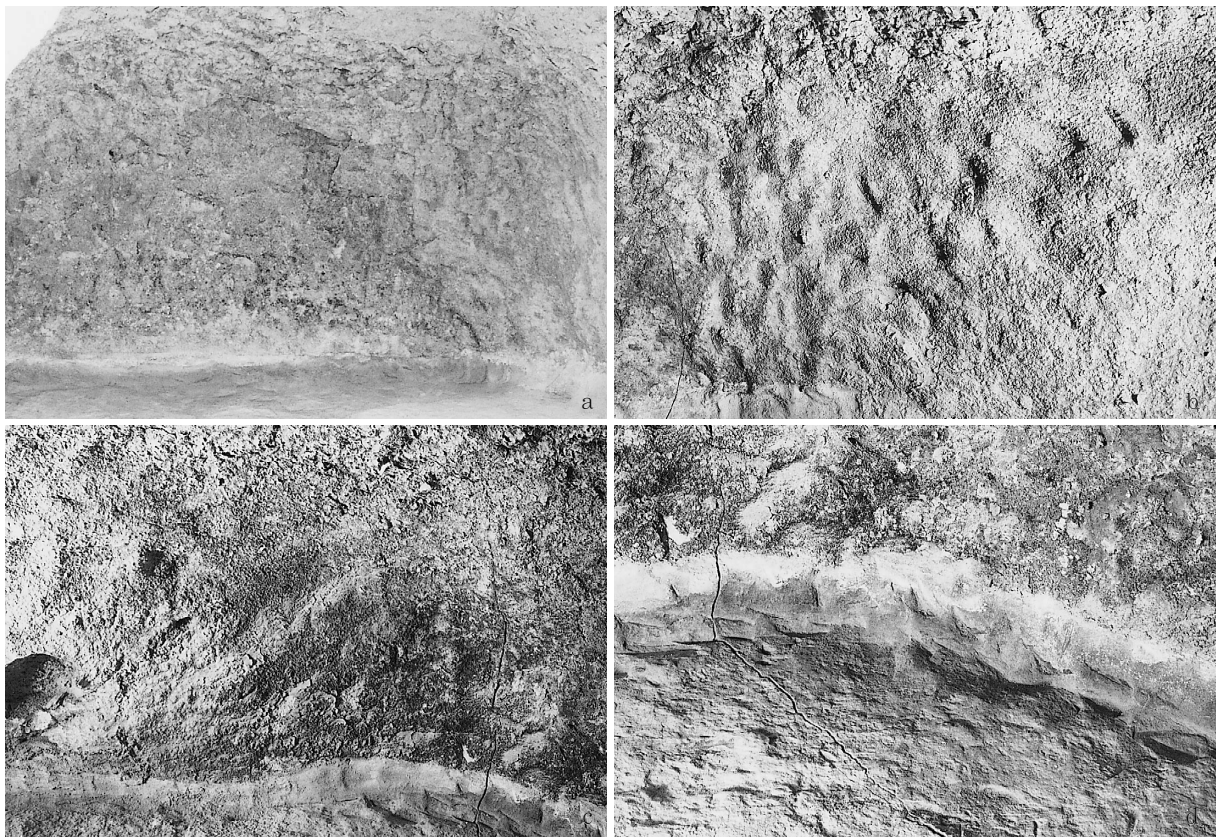
14 9号横穴墓全景

(南から)



15 7号横穴墓全景

(南から)



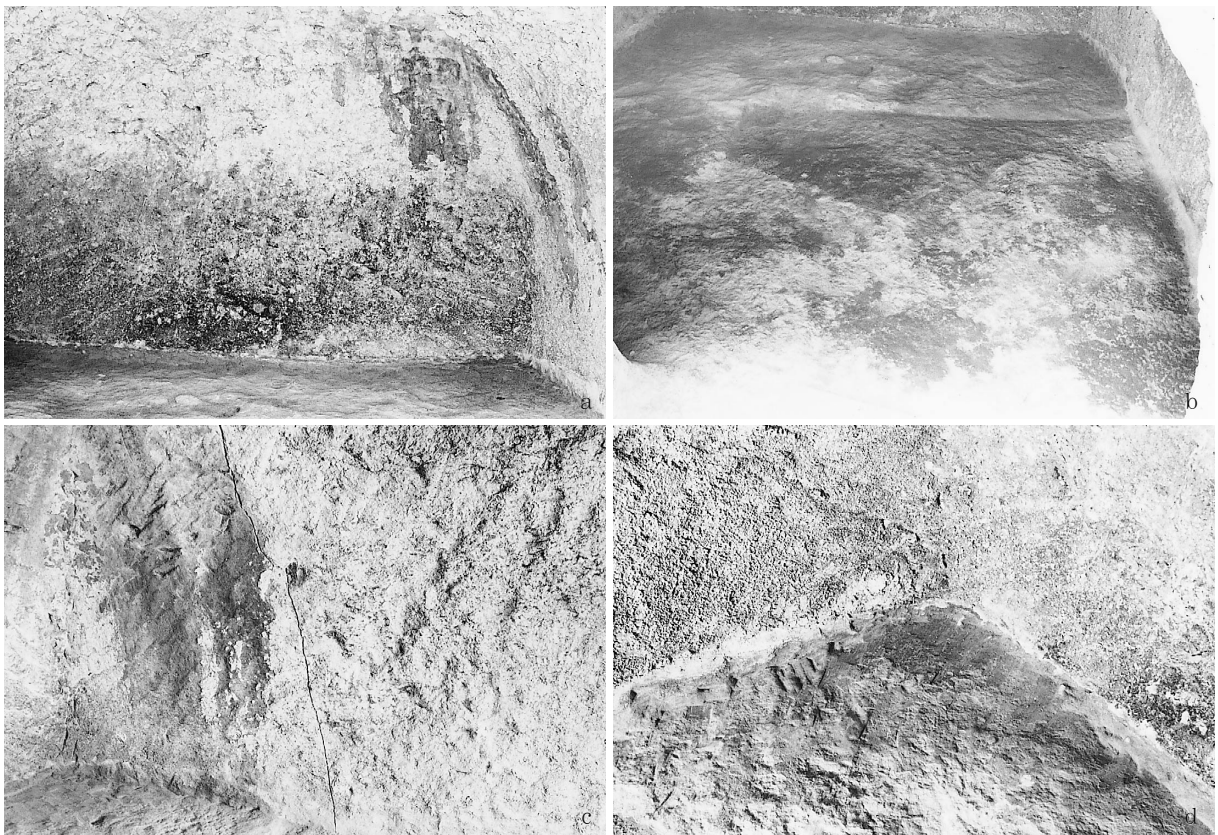
16 7号横穴墓細部

a 奥壁 (南から) b 東壁 (西から)
c 西壁 (東から) d 床面工具痕 (南東から)



17 8号横穴墓全景

(南から)



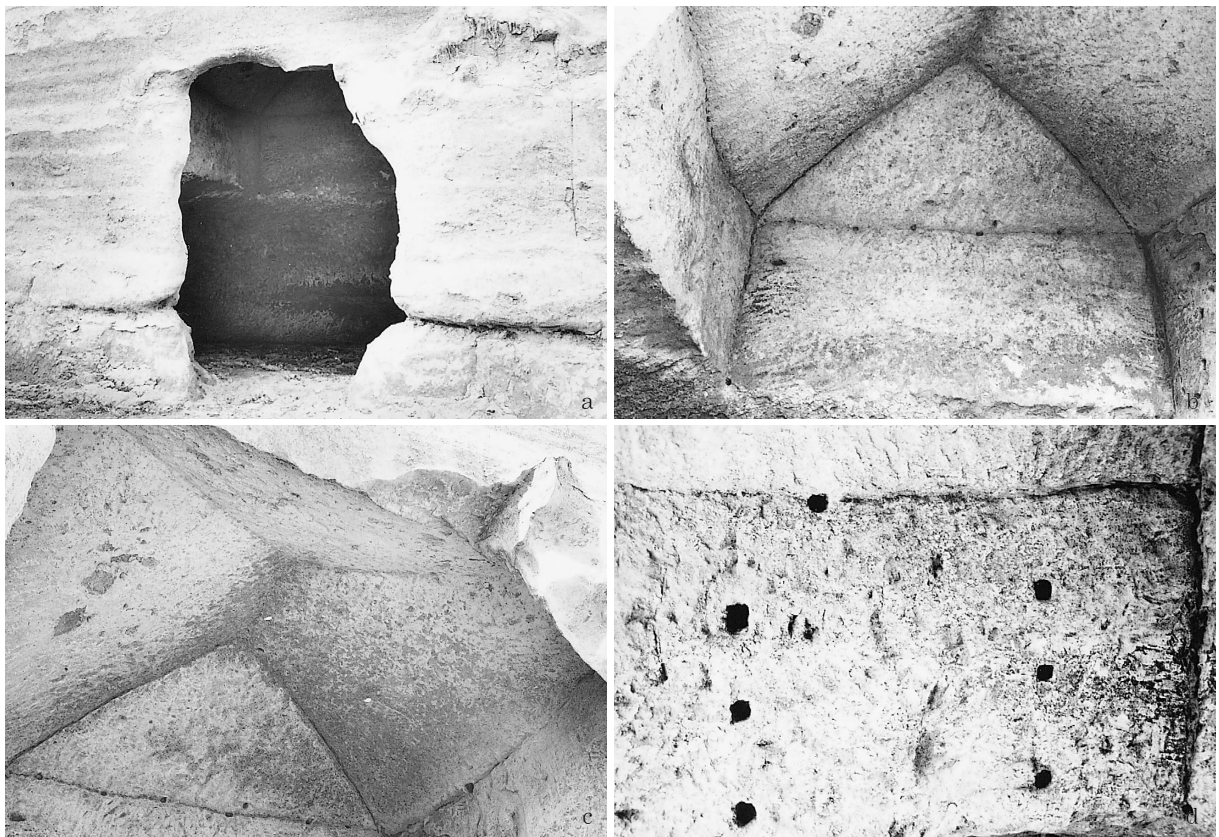
18 8号横穴墓細部

a 奥壁 (南から) b 床面 (南から)
c 東壁 (南東から) d 床面工具痕 (南東から)



19 10号横穴墓全景

(南から)



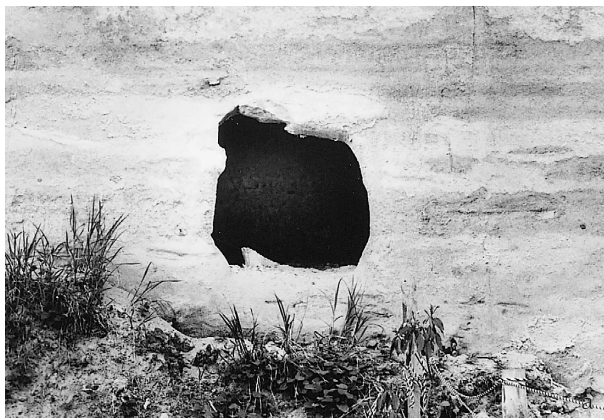
20 10号横穴墓細部

a 調査前現況 (南から) b 奥壁 (南から)
c 天井 (南西から) d 西壁 (南東から)



21 11号横穴墓全景

(南から)



22 11号横穴墓細部

a 調査前現況 (南から) b 床面 (南から)
c 東壁 (西から) d 西壁 (東から)



23 横穴墓群周辺全景

(南西から)



a



b



c



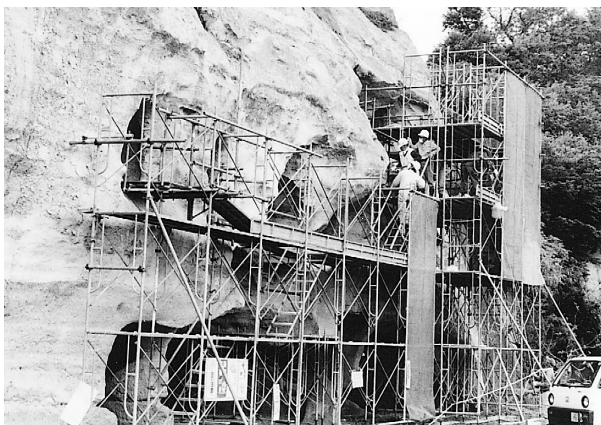
d

24 横穴墓群周辺

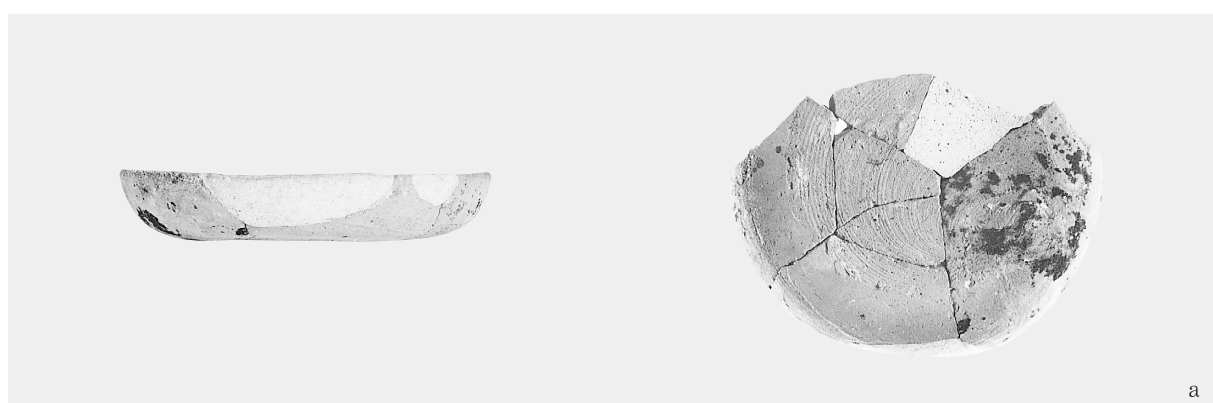
a 基本土層 (南東から) b 東側全景 (南から)
c 中央部全景 (1)(南から) d 中央部全景(2) (南から)



25 調査風景



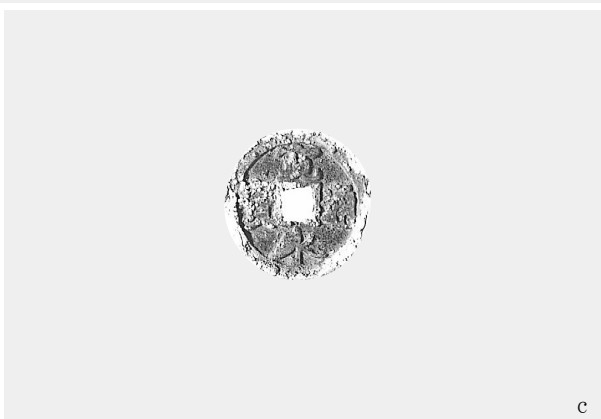
a レーザー計測風景（南東から） b 作業風景（南西から）



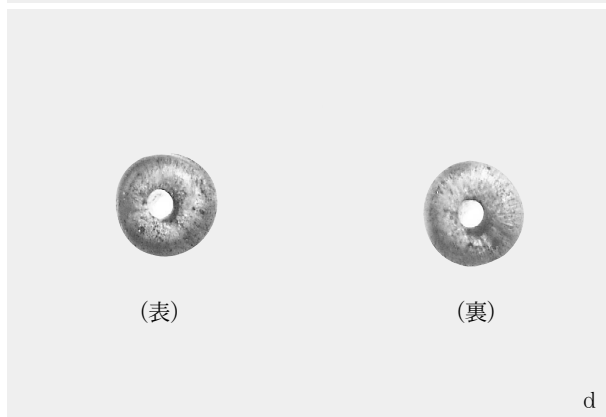
a



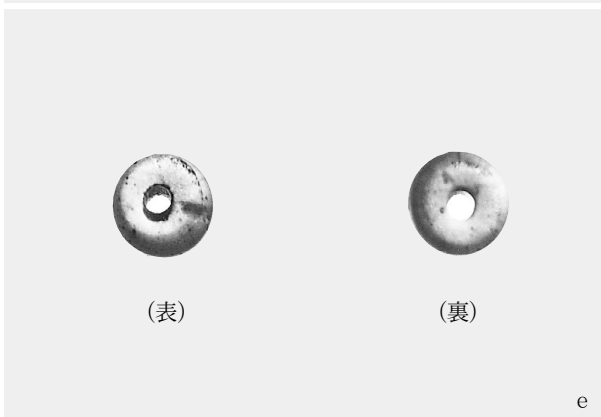
b



c



d



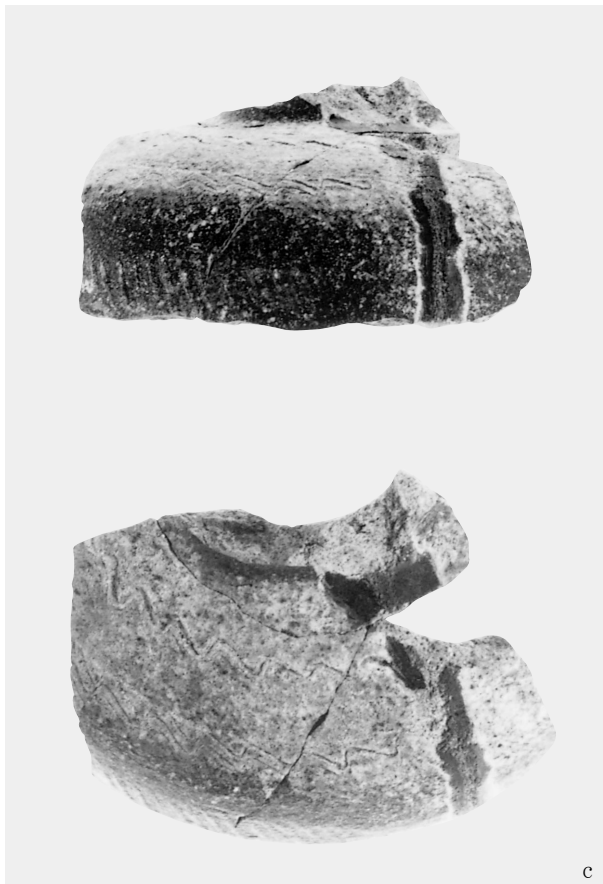
e

26 横穴墓出土遺物

a 1号横穴墓出土杯 b 1号横穴墓出土釘 c 1号横穴墓出土古銭
d 4号横穴墓出土ガラス玉(1) e 4号横穴墓出土ガラス玉(2)



a



c



b



d

27 試掘調査出土遺物

- a 7号トレンチ出土土師器杯 b 7号トレンチ出土土師器杯
c 6号トレンチ出土須恵器 d 6号トレンチ出土須恵器

報告書抄録

書名	一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告書Ⅲ							
副書名	本笑和田横穴墓群							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第396集							
編著者名	大竹正浩 安田 稔 稲村圭一							
編集機関	財団法人 福島県文化振興事業団 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL024-521-1111 財団法人 福島県文化振興事業団 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL024-534-2733 国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所 〒970-8026 福島県いわき市平字五色町8-1 TEL0246-23-2211							
発行年月日	2002年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本笑和田 横穴墓群	福島県相馬市 大字本笑字馬 場添・字西和 田	07209	00069	37度 48分 21秒	140度 56分 57秒	20010416～ 20010719	750	道路（一般国道6号バイパス）建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本笑和田 横穴墓群	古墳	古墳	横穴墓	11基	ガラス玉 銭貨 土師器			

福島県文化財調査報告書第396集

一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ

本笑和田横穴墓群

平成14年3月29日発行

編集 財団法人 福島県文化振興事業団（遺跡調査部遺跡調査課）
発行 福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町2-16
財団法人 福島県文化振興事業団（〒960-8116）福島市春日町5-54
国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所
（〒970-8026）いわき市平字五色町8-1
印刷 株式会社 大盛堂印刷所（〒960-8102）福島市北町1-21

本報告書は長期保存を考慮し、下記中性紙を使用しております。

本文 ダイヤペークAP

図版 ニューVマットホワイト